

朝光寺原式土器の根源的研究

—朝光寺原・三殿台遺跡を中心に—

坂 本 彰・宮 田 毅

目 次

はじめに

1. 朝光寺原遺跡と周辺の遺跡
2. 朝光寺原遺跡の朝光寺原式出土住居址
3. 三殿台遺跡の朝光寺原式出土住居址
4. 朝光寺原遺跡・三殿台遺跡出土の弥生後期土器
5. 朝光寺原遺跡 510 号住居址出土土器ほかの様相
—朝光寺原式設定時の基準資料を中心に—
 - (1) 器種と器形
 - (2) 器面調整
 - (3) 波状文
 - (4) 朝光寺原式土器基準資料の特徴
6. 朝光寺原遺跡と三殿台遺跡の資料調査で分かったこと
 - (1) 現時点の到達点
 - (2) 山の道と海の道

おわりに

はじめに

1960 年代後半に行われた横浜市朝光寺原遺跡の発掘調査は、開発に伴う大規模調査の先駆けであった。研究者・市民・学生等の汗と努力によって、日本で初めて方形周溝墓を伴う弥生環濠集落の全貌を明らかにし、また、神奈川県下唯一の古墳時代甲冑を世に出した（岡本 1968・中村ほか 1969）。

B 区 510 号住居址出土土器をもとにした「朝光寺原式土器」の提唱は、主要な調査成果の一つである。① 櫛描波状文を主とする、② 壺と鉢（甕）の器形が不分明、③ 台付甕を有する、の 3 基準によって、かつて「荏田式」と呼ばれた櫛描波状文土器（杉原 1939b・c）を、北関東の「樽式」から分離・独立させ、新しい型式名を付与した（岡本・武井 1969）。この土器は、70 年代以降に激増した大規模開発に伴う発掘調査によって資料が充実し、それを踏まえた研究の続出により、南関東弥生後期の一型式（様式）としてゆるぎない位置を占めている（松本 1984・2003、橋本 1986、浜田 1995・1998・2000・2009a、渡辺 1995・1997b、安藤 1992・1996、田村 2013 など）。

しかるに、当の朝光寺原遺跡の整理は大規模調査の波に呑み込まれて頓挫し、報告書はいまだに刊行され

ていない。報告によって明らかにされるべき同遺跡の朝光寺原式土器は、一部追加がなされた（赤星ほか 1979, 武井 1986）ものの、半世紀後の今日でも不明のままである。この跛行的状況は同式研究遂行上の「一障害」であり、可及的速やかに改善することが望ましい。

筆者等は昨年、3 基準の一つ大熊宮原遺跡の台付甕を再発見・紹介した（写真 14、坂本・宮田 2021）。その際に、同土器の類例が朝光寺原遺跡に存在する可能性が高いと推察し、関連資料の調査を行った。土器の一部は実測図を作成し、報文に添える予定であった。ところが、（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターを訪れた際、担当の古屋紀之氏から「朝光寺原遺跡は市内遺跡なので、実測図は市内刊行物（etc.『横浜市歴史博物館調査研究報告』、『同紀要』）で公表して欲しい。」と強く要望された。筆者らは協議の上、古屋氏の要望に沿うこととし、未公表資料に関しては写真紹介のみに止めた（坂本・宮田 2021）。

以上の経緯により、一部の实測図では不充分であると考え、現状下可能な範囲で朝光寺原遺跡出土の朝光寺原式土器の調査を進めた。その過程で、三殿台遺跡にも朝光寺原式土器が存在すると判明し、また、松本完氏の教示も受けて、同遺跡の資料も併せて調査した。

調査日程は以下のとおりである。

- ・横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター：2021.7/1、7/15、10/25
- ・横浜市歴史博物館：2021.7/20・21、8/24・25、10/23、12/4
- ・横浜市三殿台考古館：2021.8/17、11/16
- ・綾瀬市神崎遺跡資料館：2021.12/16

以下に示すように、小文の目的は、2 遺跡における朝光寺原式土器の存在と内容を提示することであり、編年や分布については及んでいない。調査し得たのは朝光寺原・三殿台遺跡の限定的な資料で、遺跡全体の様相は報告書（朝光寺原遺跡）・遺物編（三殿台遺跡）の中で明らかにされるべきものである。

資料調査にあたって、選定ほかは坂本が、写真撮影・実測図作成は宮田が、採拓は坂本・宮田が行った。

小文は、はじめにと 1～3・6（1）・おわりにを坂本が、4・5・6（2）を宮田が分担して執筆した。挿図・土器観察一覧表作成・入力も宮田が行った。資料の由来・遺構は坂本が、土器の内容と所見については宮田が執筆した。実測図（S=1/3）のトレースは宮田裕紀枝・宮田圭祐が行った。

小文をはじめめるにあたり、資料公開を許可された（公財）横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター及び横浜市歴史博物館、横浜市三殿台考古館に厚くお礼を申し上げる。その際、古屋紀之氏、井上 攻氏、橋口 豊氏、鈴木重信氏には特段のご配慮を頂いた。また、田村良照氏・綾瀬市神崎遺跡資料館・小滝 勉氏・水野順敏氏・西川修一氏からは文献の提供も頂いた。田村・小滝の両氏と、田中義昭氏・小宮恒雄氏・松本 完氏からは種々の御教示を頂いた。深く感謝を申し上げる次第である。

1. 朝光寺原遺跡と周辺の遺跡（第 1 図）

鶴見川は多摩丘陵東部の主要河川で、下末吉台地を貫いて東京湾へ注ぐ。上流部の横浜・川崎市境から恩田川合流地点までは、“谷本川”と呼ばれている。谷本川東岸の台地裾を近世日野往還（旧横浜上麻生線）が通り、その東方数 100m には南北に伸びる多摩丘陵主脈がほぼ並行している。この主脈から谷本川後背低地（沖積地）に向かって数列の舌状台地が伸び、市ヶ尾地区内で最も幅広の鍵形に突出している。この台地に朝光寺原遺跡がある。

一方、主脈東方は広く早淵川の流域となり、長狭な支谷が西方へ深く入り込んでいる。早淵川上流の中心集落である荏田は、この谷筋を抜ける近世矢倉沢往還（古東海道）の宿場として形成された。荏田から西方



第1図 朝光寺原遺跡と周辺の遺跡（坂本2019原図に加筆）

へ伸びるのが赤田谷、西南方に入り込むのが小黑谷で、その南側に長谷が派生している。現在はこの狭い廻廊に、国道 246 号線・東名高速道路・東急田園都市線が集中している。

1960 年代以降、この地域の開発に伴う発掘調査が行われ、およそ 30 カ所もの朝光寺原式土器を有する遺跡が明らかになった。

朝光寺原式土器を出土する遺跡としては、朝光寺原遺跡と同じ谷本川東岸に、北から稲荷前・寺下・鹿ヶ谷・寺中ノ原が、西岸には上谷本Ⅱ A・B がある。赤田谷には赤田地区遺跡群 No.1・2・6・10・14・15・17 と全域にわたっている。小黑谷周辺には、小黑谷Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴが、長谷方面には中野原・長谷・長者原（棚元）・馬頭観音がある。西方の大場谷には大場富士塚・第二地区 No.2・3 がある。荏田の北方には釈迦堂・虚空蔵山・観福寺北・閑耕地と並んでいる。早淵川の少し下流には矢崎山西・E5 がある（以上の作成には渡辺 1995 を参考とした）。

このように集中しているので、「朝光寺原式様式圏の中核」と評価されている（渡辺 1995）。これらの各遺跡についてはすでにまとめられたもの（渡辺 1995）や、要領よく整理されたレポートがある（伊丹ほか 2000）ので、ここではいくつかの遺跡について述べる。

稲荷前遺跡は墳丘下に検出された方形周溝墓を含む小集落だが、住居址は朝光寺原式期の特徴である隅丸方形・主炉柱穴間外寄りを有する。土製勾玉・鐸形土製品・銅鏃など、注目すべき道具が出土した（坂本 1986）。同遺跡 12 地点住居址は型式提唱以前に「朝光寺原式期」と位置付けられている（古山 1968）。

小黑谷Ⅰ・Ⅱ地区は最奥部に位置し、30 余軒が狭い丘陵～斜面にかけて密集し、超大型住居址を中心として整然と並んでいる。このあり方はこの時期が「小規模」といった特徴とはかなりかけ離れており、存在意義を考える上で重要である（中央大学考古学研究会 1973）。小黑谷は「荏田式」資料出土地としてあげられたが（杉原 1939b）、当該土器については『利根川』44 号（2022 年 5 月刊）で報告の予定である。

荏田西方の矢倉沢往還に北面する幅広の台地が長者原遺跡で、西側北端は棚元遺跡として 1976 年に調査され、朝光寺原式期の住居址 16 軒が発見された（塚田 1977）。その後全域が発掘されて、多数の掘立柱建物群が検出され、奈良～平安時代の「都筑郡衙」に比定された（水野 1981）。その際、台地基部や台地東側でも住居址が確認され、東名高速道路による欠損を考えると、小黑谷・E5 遺跡級の大規模集落とみられる。

観福寺北遺跡群閑耕地遺跡は、早淵川上流西岸の台地上に位置し、朝光寺原式期の住居址 52 軒はこれまでで最大である（田村ほか 1997）。南に隣接する観福寺北遺跡（平子ほか 1989）と合わせて同一集落とみられ、総計 72 軒を数える。さらに南方の釈迦堂・虚空蔵山・東名高速道路欠損部を合わせると 100 軒以上が集中している。住居址は小判型に近い形状が主で、長軸長 15m 余の超大型を含む大型住居址も多く、東京湾岸系の大型住居址と遜色ない。中期後半の環濠集落を踏襲して形成されており、朝光寺原遺跡や矢崎山西遺跡と立地も含めて共通点が多く、大規模集落の典型として検討が望まれる（田村 2013）。

矢崎山西遺跡の調査は一部のみだったが、後期の住居址 17 軒が大型住居址を取り巻くように分布する（武部ほか 2004）。台地平坦面の規模は長者原より広く、全域総数では相当大規模な集落になるとみられる。

E5 遺跡は牛久保谷最奥の台地上にあり、後期の住居址（朝光寺原式期が主）43 軒と方形周溝墓 3 基が発見された。小黑谷Ⅰ・Ⅱと同じく頂部に大型住居址、周囲に中・小型住居址が長軸を揃えて分布する。方形周溝墓はいずれも複数の土坑を有し、一辺 19m 余の 3 号には 17 基が掘り込まれ、主体部から鉄剣・銅釧が出土した（武井 2001）。方形周溝墓の様相は、早淵川下流の大原遺跡（鈴木ほか 2001）と共通し、後期の階層分化状況を示す例であろう。

その他、谷本川下流に下根遺跡、朝光寺原式期唯一の環濠集落である四枚畑遺跡（小宮 2003）がある。

2. 朝光寺原遺跡の朝光寺原式出土住居址（第2～4図、第1表）

朝光寺原遺跡は谷本川中流東岸に西面し、南東から北西に突出する長さ約400m、幅約250mの舌状台地である。西側の緩傾斜面中央に白王山朝光寺が鎮座し、台地裾を旧横浜上麻生線が通り、支谷が入り込む東側は急斜面をなす。台地は上下2段あり、上段（基部）は標高約40m、下段（先端部）は標高約25m測る。

設定された調査区は上段～緩斜面がA区、上段西側がC区、下段がB区である。調査は一次（1967年）がA・B区、二次（1968年）はC区で行った。その結果、ほぼ全域に縄文～平安時代の遺構が分布していた。

A・C区には、縄文時代の住居址、弥生時代の住居址・環濠・方形周溝墓、古墳、古墳～平安時代の住居址・掘立柱建物が、B区には弥生時代の住居址・方形周溝墓、古墳、古墳～平安時代の住居址などが検出されている（岡本1968、中村ほか1969）。

弥生時代後期の遺構はA・B・C区に認められ、最も広く分布している。この遺跡の遺構番号は、住居址が1～200・400・500・800・900、方形周溝墓が700、掘立柱建物が600番台である。以下調査区別に後期遺構番号を記す。

- ・A区－2a、3、4、7、10、11a、11b、14a、14b、20、101、103、104b、106d、109c、203a、203d、209a、210a、210c、212a、212c、213b、214a、219c、220f1、220e、224b、226、227、228c、233a、236、237、238c、241、401、402、404a、404b、405、406、408
- ・B区－504a、510、511b、(511c)、512、513、514a、515a、515b、517、519、520、523、524、525b
- ・C区－902、905
- ・方形周溝墓－720、721、722、723、724、(702～719、725～727の一部)

以上のように、弥生後期（久ヶ原・弥生町・前野町・後期）の住居址は60軒、方形周溝墓は5+ a基である（511cは報文の図・表には無いが遺物があり、725～727は坂本が仮番号を付した）。

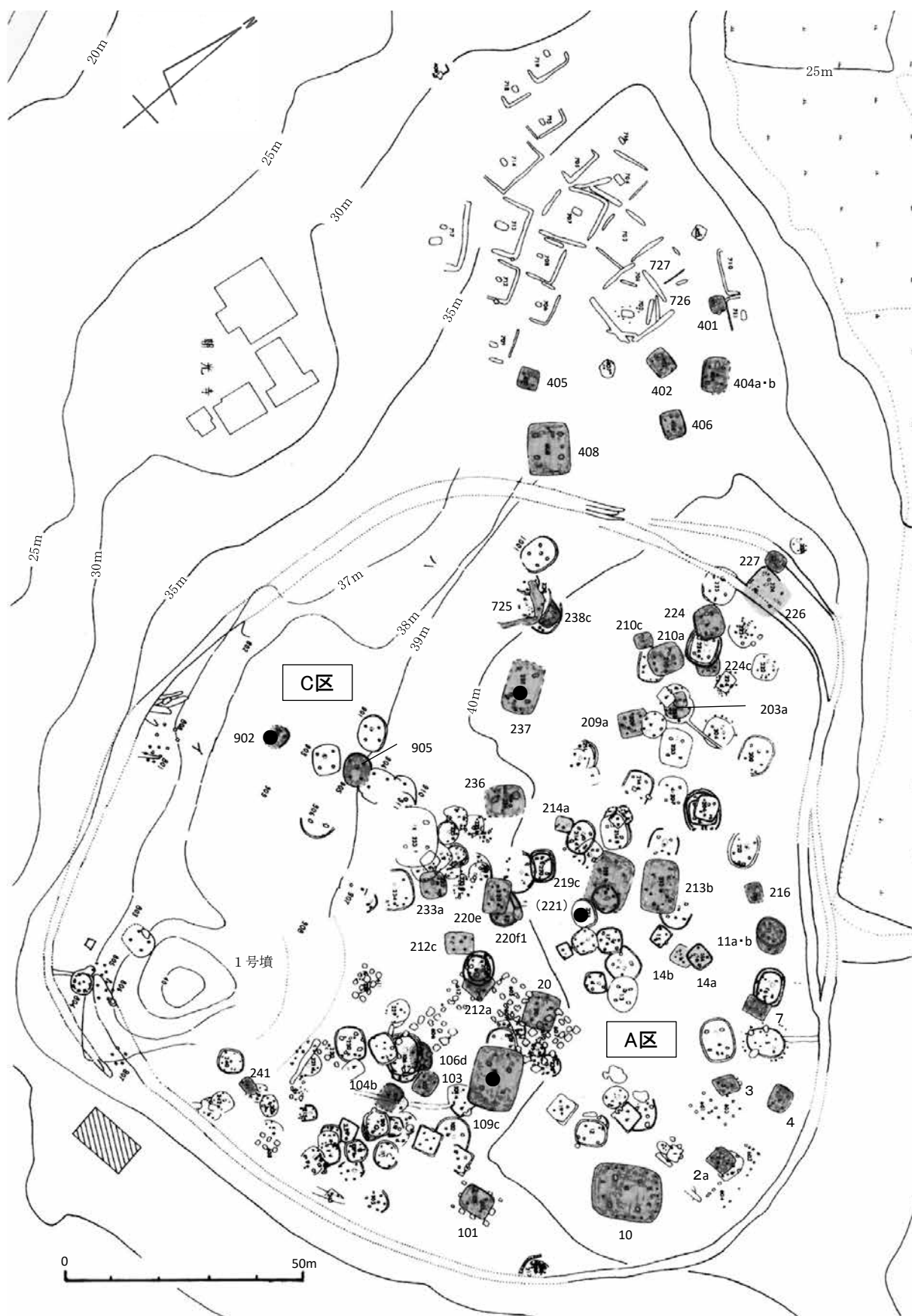
なお、10・109c・213b・219c・408・515a・524・(512)号住は8m以上の大型住居址である。

以上の内から、今回の資料調査で朝光寺原式の存在が明らかになったのは下記の14軒である。住居址の時期は概報に基づき、その他は平面形・出土資料などにより暫定的に記した。規模は推定を（ ）書きとした。

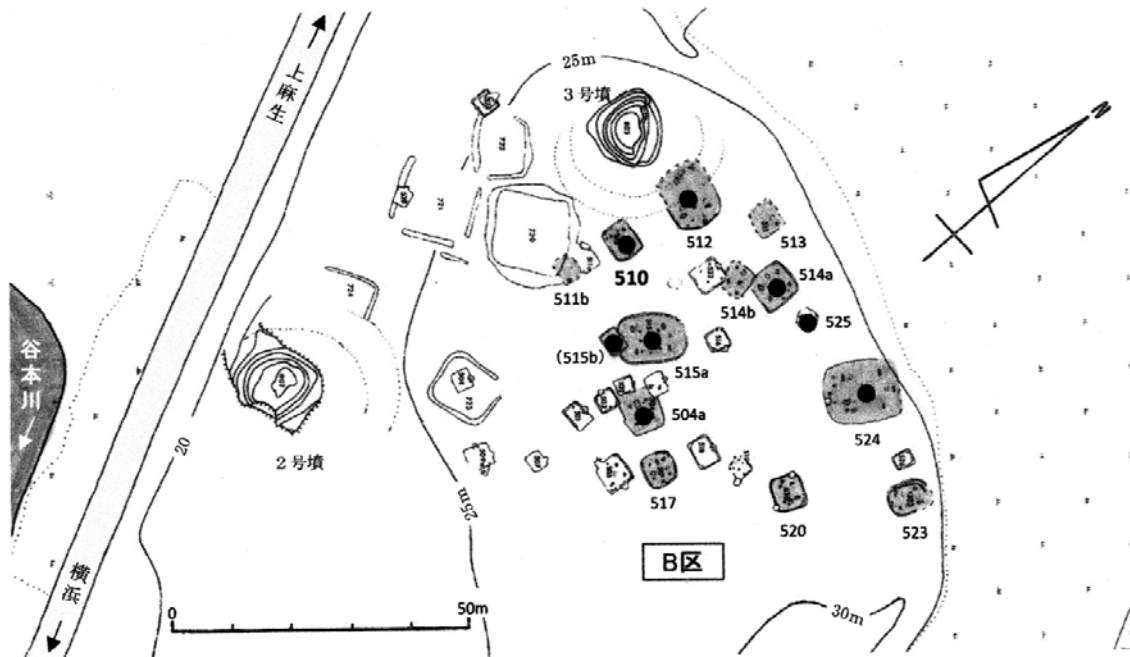
また、出土状況がわかるのは、510・902・905号の3軒のみである。

510号は、北東隅床面上約2mの範囲から16個体、覆土から4個体の計20個体が出土した。住居址実測図には、1～16の番号が付されているが、器形は判然としない。出土した土器にはP-NaとN-Naが注記されており、その内、N-Naが前掲報文の挿図土器Naと一致している。N-NaはP-Naの後に注記されているので、P-Naは取り上げ時点で付けられたNaで、N-Naは報告書作成時に付されたものと思われる。したがって、住居址実測図に付された土器NaはP-Naである可能性が高い。しかし、現段階では正確な判断は不可能なので、小文では床面・覆土の区別はせず、全体一括として扱った。

902号住居址については「西側の床面直上より、ほぼ完形に近い朝光寺原式の壺形土器が出土した」と記されている。この土器は、第4図右写真のように壁面近くに口縁部が傾いた甕形土器を指すものとみられる。当初、今回の調査で見出した21の土器が相当するものと推定したが、器形・文様にやや違う点も見られ、断定するに至らなかった。したがって、902号の土器は不明で、21は他の遺構から出土したものと判断した。



第2図 朝光寺原遺跡 A・C区朝光寺原式土器出土住居址分布図
 (岡本 1968, 中村ほか 1969 原図に加筆; 網掛けは後期住居址、●は朝光寺原式土器出土住居址)



第3図 朝光寺原遺跡 B区朝光寺原式土器出土住居址分布図
(岡本 1968, 中村ほか 1969 原図に加筆: 網掛けは後期住居址、●は朝光寺原式土器出土住居址)

905号住居址は「久ヶ原式に比定される土器片が北側の床面直上より比較的多く出土し」た、とあるものの、同号住居址の遺物は確認できなかった。

以上のように、本遺跡で判明した朝光寺原式土器の大半はB区にあるが、これは必ずしも実態を反映したものではない。A～C区の遺物を全て調査すれば、さらに多数の朝光寺原式土器が判明すると思われる。

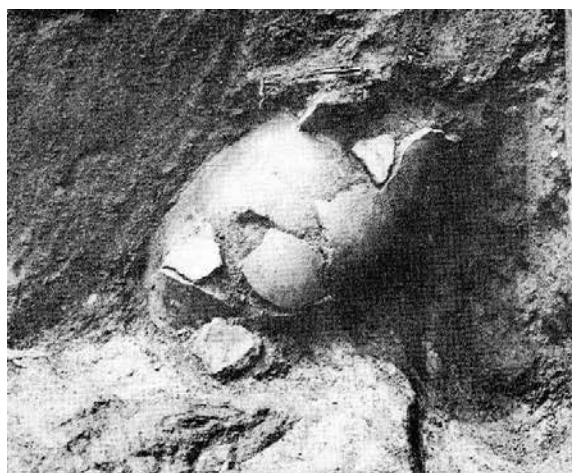
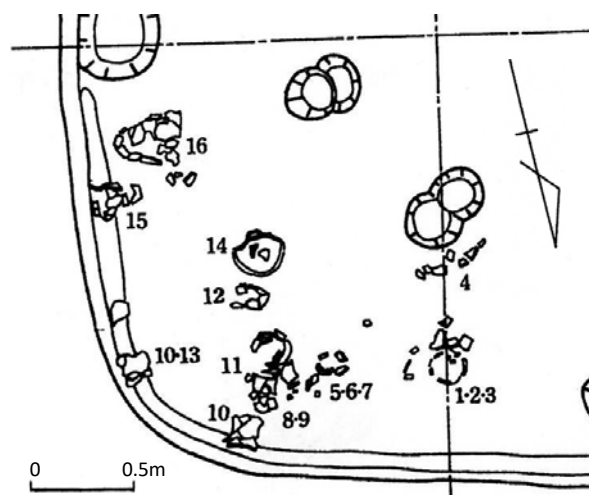
なお、A区概報作成時(1968年1～3月頃)には、すでに「朝光寺原式」の存在は強く意識されていたことが窺え、「弥生町式には、櫛描波状文を特徴とする異質の土器(仮称朝光寺原式)がともなうらしい。」と記されている(岡本 1968)。あくまでも主体は久ヶ原・弥生町式であり、朝光寺原式は客体的であるという認識であろう。同じ大規模集落でも北東へ2.7kmの関耕地遺跡においては、朝光寺原式を主体としており、この点において、やはり違いが認められる。ただし、大型住居址の多さなどは共通しており、型式を超えた集落様相の比較が望まれる。

方形周溝墓は、701号から埴(五領式)が出土した以外、現状では知られていない。田中義昭は、B区の5基は位置から弥生後期とし、A区18基の大半は歳勝土遺跡方形周溝墓との類似性から「宮ノ台期に属するのが当をえているのであろう」と推察している(田中 2021)。そうすると、弥生後期に属する遺構は、B区では住居址13軒、方形周溝墓5基なのに対し、A・C区では住居址47軒、方形周溝墓がせいぜい数基と極めて不均衡である。A区においては、宮ノ台期・後期住居址を切る725号(仮番)の存在もあることなどから、方形周溝墓の時期は改めて見直す必要性があろう。

第1表 朝光寺原遺跡における朝光寺原式土器出土住居址一覧表

区	住居址	住居址時期	平面形	規模 (m)	新旧関係	報文掲載土器No.	本誌掲載土器No.
A	109c	弥生町	隅丸方形	13.6 × 10.1	109a → c → b	未掲載	20
A	221	宮ノ台	小判形?	6.4 × 5.0	17b → 221	未掲載	29
A	237	弥生町	隅丸方形	(12.0) × 7.5	—	未掲載	22
B	504a	朝光寺原	隅丸方形	(7.0 × 6.0)	504a → b	未掲載	25
B	510	朝光寺原	隅丸方形	6.25 × 5.19	510 → 3号墳	1・5・7 ~ 10・12・13、3図2	1 ~ 16
B	511c	—	—	—	—	未掲載	24
B	512	朝光寺原	胴張隅丸長方形	(10.5) × 8.5	512 → 3号墳	未掲載	23
B	514a	朝光寺原	胴張隅丸長方形	7.0 × 7.0	514a → b	未掲載	13
B	515a	久ヶ原	胴張隅丸長方形	12.0 × 8.0	515a → b	未掲載	27・28・30・31
B	515b	古代	長方形	4.0 × 3.0	515a → b	未掲載	17
B	524	朝光寺原	不整楕円形	13.0 × 10.0	—	未掲載	18・19
B	525	久ヶ原	隅丸方形	3.5 × 3.5	—	未掲載	26
C	902	久ヶ原	不明	(一辺5~6)	—	未掲載	未掲載
C	不明	—	—	—	—	未掲載	21

〔※ 510号住出土土器の報文掲載土器Noは、第2図（挿図9）、第3図（挿図10）掲載の番号である。〕



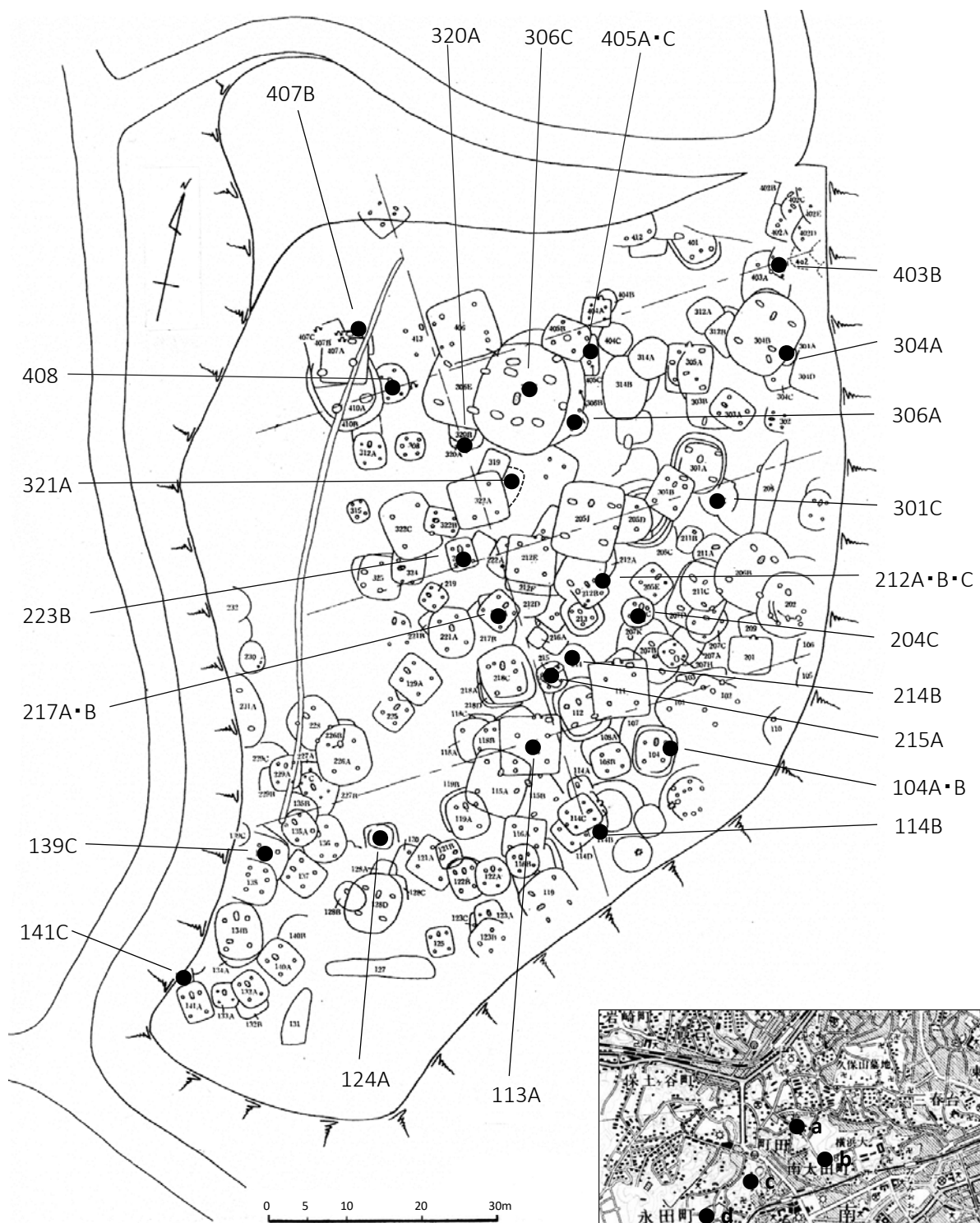
第4図 朝光寺原式土器出土状況（左図：B区510号住、右写真：C区902号住）
（岡本・武井1969，中村ほか1969原図より）

3. 三殿台遺跡の朝光寺原式出土住居址（第5～7図、第2表）

横浜市磯子区の三殿台遺跡は1961年夏に発掘調査され、台地上全面に縄文・弥生・古墳時代の竪穴住居址253軒が密集して発見された。翌年には遺跡の全容が公表され（和島ほか1962）、次いで報告書（遺構篇）も刊行され（和島1964・68）、1966年に史跡指定となった。以後は、国指定「史跡 三殿台遺跡」として史跡整備が行われ、三殿台考古館も併設されて現在に至っている。

遺跡は、弥生時代中期後半～古墳時代初頭の住居址が主体で、およそ150軒を数える。これほどの規模をもつ本遺跡は集落址研究の絶好の対象となり、早くからその分析が進められてきた（田中2011，安藤1992）。前者は、宮ノ台期の住居址を約40軒としたが、後者は、住居址50軒・方形周溝墓2基をあげている。

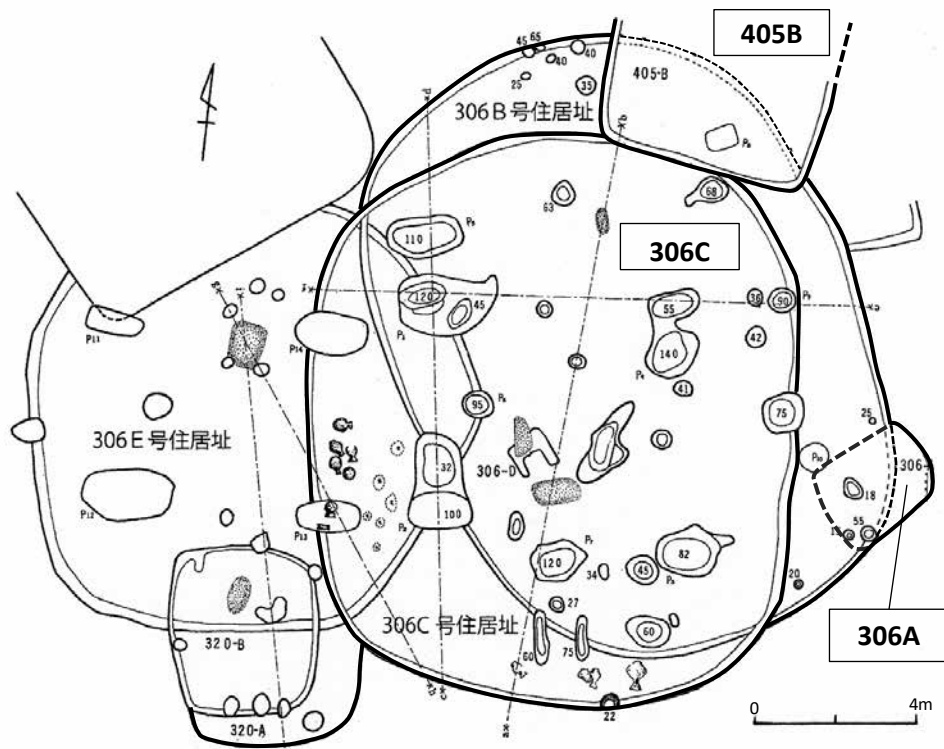
田中義昭は、弥生時代後期～古墳時代初頭の住居址は約110軒で、久ヶ原期約40軒、弥生町期約50軒、前野町期～五領期約20軒としたが、朝光寺原式については言及していない（田中1982）。その後、岡本勇は「三殿台遺跡からは、多量の久ヶ原式・弥生町式土器が出土しているにもかかわらず、朝光寺原式土器



第5図 三殿台遺跡の朝光寺原式出土土器
住居址分布図(和島ほか 1962 原図に加筆)

第6図 三殿台遺跡と周辺の遺跡(横浜 1/5 万)
a. 高速2号線№6遺跡 b. 清水ヶ丘遺跡
c. 殿ヶ谷遺跡 d. 永田町遺跡(推定)
e. 三殿台遺跡





第7図 306A・B・C及び405B住居址関係図（古屋ほか2018原図に加筆）

第2表 三殿台遺跡における朝光寺原式土器出土住居址一覧表

住居址	住居址の時期	報文掲載土器No.	本誌掲載土器No.
104A・B	弥生町	樽式	—
113A	鬼高	朝光寺原式	33・43
114B	鬼高	32図8・12	36（報32図12）
124A	宮ノ台	未掲載	34・41
139C	弥生後期	Nov-73	45
141C	弥生後期	未掲載	35
204C	弥生町	櫛描波状文	39
212A・C	久ヶ原	97図6・10	—
212B	弥生町	未掲載	42
214B	宮ノ台	未掲載	46・47・48
215内大Pit	宮ノ台	106-3	—
217A・B	弥生後期	108-15	—
223B	弥生後期	116図1・2・3・4	49・50・51・53
301C	鬼高	未掲載	44
304C	宮ノ台	132図5	52
306A	久ヶ原	未掲載	55・56
306C	宮ノ台	145図2・22	38・54
320A	宮ノ台	159図10	—
321A	鬼高	159図12・13	37・41
403B	久ヶ原	175図3	—
405A	弥生後期	未掲載	59・61・63・65・67
405C	弥生町	182図22	57（報182図22）・58・60・64・66
407B	鬼高	188図12	—
408	前野町	192図5	—
715	—	未掲載	62

はほとんどまったくみられない」と述べている（岡本 1986）。

報告書作成時は朝光寺原式提唱以前で、104 号住居址（弥生町期）の「樽式系統のもの」（和島ほか 1964）が朝光寺原式を示唆する唯一の例である。近年、306C 号の遺物再整理が行われたが、宮ノ台期に特化した報告であり（古屋・浅野 2018）、朝光寺原式の存在にはふれられていない。

ところが今回の調査で、横浜市歴史博物館の朝光寺原遺跡の資料中に、「306C」と墨書された復原完形の朝光寺原式土器（櫛描波状文・簾状文の甕）1 点があり、その帰属が問題となった。2 で述べたように、朝光寺原遺跡には、300 番台の遺構番号がなく、他遺跡資料の混在であろうと考えた。「306C」という遺構は、三殿台遺跡の中心をなす宮ノ台期の大型住居址が知られている（古屋・浅野 2018）。「306C」は、この宮ノ台期大形住居址ではないかと考えて報文（和島 1964・1968）を検討したところ、同住居址覆土中から櫛描文土器 2 片が出土しており（挿図 145 - 2・22）、朝光寺原式土器の存在を示唆していた。

306C 号住居址は A ～ E の 5 軒が重複しており、D 号はカマドをもつ鬼高期の住居址、中型の E 号と、大型の B・C 号は宮ノ台期と位置付けられている（古屋・浅野 2018）。B 号と C 号はほぼ同規模で、主軸を少しずつずらして構築され、床面の高低差は少なく、壁溝の存在によって区別された。火災を受けて遺物が多数残存していた C 号の方が、調査の中でも早く注目され、B 号と一体化して調査が進められた（和島ほか 1962）。これらの上に弥生後期の 306A・405B が構築されており、両号の遺物が C 号の遺物として取り上げられた可能性は充分あり、前述の土器 2 片もこの想定を裏付けている。さらに、小宮恒雄氏からは「櫛描波状文・簾状文の甕（第 14 図 54）は三殿台考古館に展示されていた」との教示があり、「306C」と注記された当該土器（54）は、本来、三殿台遺跡の 306C 号に属するものと判断した。

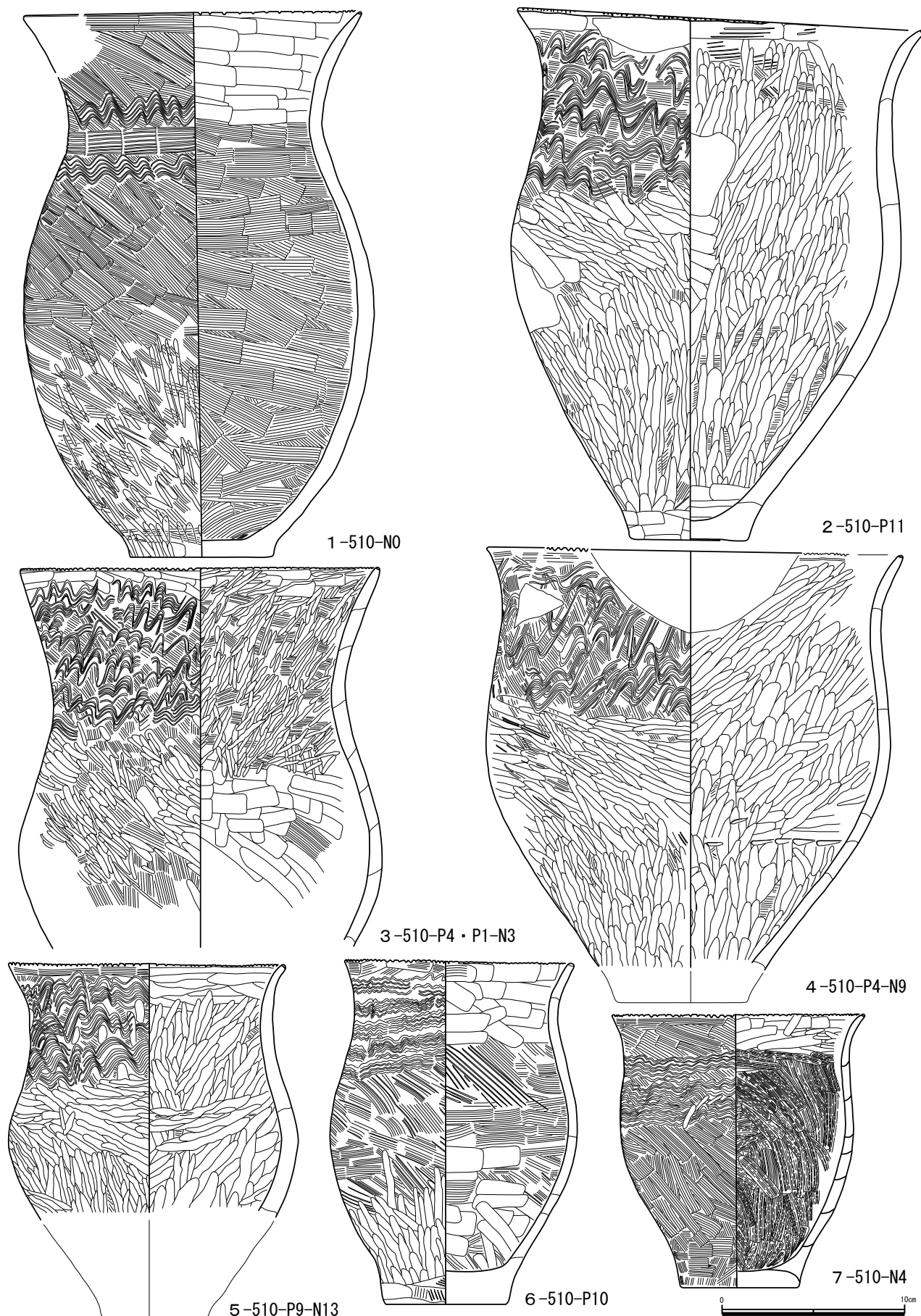
また、松本 完氏（横浜市高速 2 号線 No. 6 遺跡調査担当）は、かつて三殿台遺跡の出土資料を実見して「223 号住の台付甕（挿図 116-2）は朝光寺原式」との知見を持っており、三殿台遺跡における朝光寺原式土器の存在に着目していたという。

三殿台遺跡周辺の大岡川・帷子川に挟まれた多摩丘陵上の朝光寺原式土器は、永田町例が古くから知られていたが（杉原 1964・1989）、70 年代後半～80 年代前半に殿ヶ谷遺跡（榊原 1977）、清水ヶ丘遺跡（石井 1979）、横浜市高速 2 号線 No. 6 遺跡（岡田ほか 1981・1984）の調査が相次いで行われた。清水ヶ丘遺跡では「朝光寺原式土器がほぼ主体をなし」（岡本 1986）、殿ヶ谷遺跡には住居址が知られ、横浜市高速 2 号線 No. 6 遺跡には朝光寺原式土器を主体とする住居址が存在する。「永田町」の正確な所在地は不明だが、殿ヶ谷遺跡と同一の可能性が考えられる。

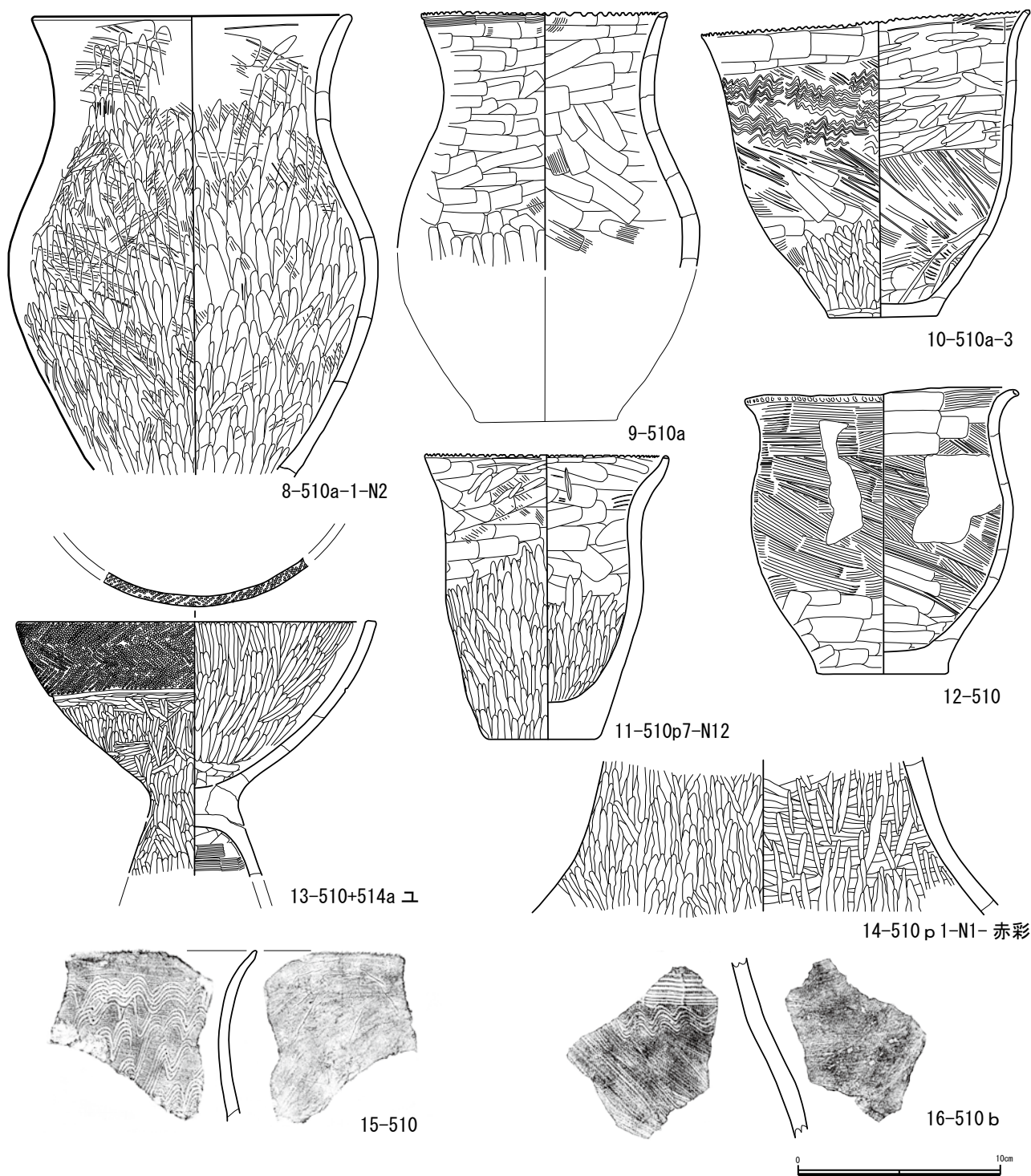
これらに三殿台遺跡例を加えると、朝光寺原式を出土する遺跡が、多摩丘陵上の 2km の範囲に近接していることが認められ、谷本・早淵川流域の遺跡分布と近似する。本地域は、東京湾西岸系土器（久ヶ原・弥生町式）の分布圏内であるが、多摩丘陵系（朝光寺原式）やその他の地域との関係を考える上で格好の資料といえよう。三殿台遺跡の『遺物・論考編』（和島 1964・1968 の編集後記）は未刊であるが、小文以外の朝光寺原式資料が存在することは充分考えられるので、一日も早い刊行が待たれる。

4. 朝光寺原遺跡・三殿台遺跡出土の弥生後期土器（第 8～15 図、第 3～5 表、写真 1～13）

今回の資料調査で確認し、図化できた朝光寺原遺跡と三殿台遺跡出土の弥生後期土器実測図（第 3～15 図）及び土器観察一覧表（第 3～5 表）を以下に提示する。なお、実測図は櫛描文（朝光寺原式）系土器を主とし、それに伴って出土した他系統の土器も補足的に提示した。また、朝光寺原遺跡については、朝光寺



第8図 朝光寺原遺跡B区510号住居址出土土器(1)



第 9 図 朝光寺原遺跡 B 区 510 号住居址出土土器(2)

第 3 表 朝光寺原遺跡 B 区 510 号住居址出土土器観察一覧表

図版 番号	出土遺構	器種 / 部位 / 残存率	法量 (cm)	胎土 / 焼成 / 色調	器面調整	形態 / 文様 / その他の特徴	備 考
1	朝光寺原 510 N0	甕 / ほぼ完形	口径: 18.5 頸径: 13.8 胴径: 19.2 底径: 7.8 器高: 29.7	微砂粒少 / 良好 / にぶ い赤橙色・暗茶褐色、 外面には黒斑、胴部器 壁内面上半部は黒色。	内・外面に木端調整。胴下半～ 底部外面には縦方向の粗い棒 状ミガキ。口縁部内面にはヘ ラナデ。	細身の甕で、長胴でやや下膨れ の底部となる/頸部文様帯に簾 状文。その上・下に三殿台 Ic 類 の波状文を巡らす。口唇部には 刻目文。	N 番号は 「0」/ 朝光 寺原式

図版 番号	出土遺構	器種 / 部位 / 残存率	法量 (cm)	胎土 / 焼成 / 色調	器面調整	形態 / 文様 / その他の特徴	備 考
2	朝光寺原 510 P11	甕 / 口縁～底部 の約3/5を残存	口径: 22.2 頸径: 19.0 胴径: 21.3 底径: 6.4 器高: 28.5	微砂粒少 / 良好 / に ぶい赤橙色・暗茶褐色 / 胴部中位以下は二次焼 成を受けて淡褐色に変 色。	内外面共に木端調整(ハケ目) 後に棒状ミガキを密に施し、 ハケ目をほとんど磨り消して いる。内面の口唇直下は横方 向のヘラナデ痕を止める。	口唇部に刻目文。口径は胴部最 大径をやや上回る。口縁部は短 く、外反している。口頸部文様帯 に朝光寺原Ⅰ類の波状文/胴部 中位に薄く煤付着。	朝光寺原式
3	朝光寺原 510 P1・P4 N3	甕 / 口～胴部の 1/3残存	口径: 19.6 頸径: 15.9 胴径: 19.2 底径: - 残高: 20.4	微砂粒少 / 良好 / に ぶい赤橙色・暗茶褐色。	外面はハケ目調整後に棒状ミ ガキ/内面はハケ目痕をほと んど残さない丁寧な棒状ミガ キを施し、光沢がある/内面は 胴部以下がヘラナデとなる。	口頸部が直線的に開く/口唇部 に刻目文。口頸部に波状文。下地 のハケ目が顕著に残る。外面胴 部上半に煤付着。	朝光寺原式
4	朝光寺原 510 P4 N9	甕 / 口縁～底部 上半の約1/3強 残存、大形破片	口径: 22.6 頸径: 20.6 胴径: 22.1 底径: - 残高: 22.6	微砂粒少 / 良好 / 暗赤 灰色 /	内外面共に木端調整(ハケ目) 後に棒状ミガキを密に施し、 ハケ目をほとんど磨り消して いる。ミガキは底部が縦方向、 口～胴部はやや斜め方向。	口唇部に刻目文。頸部文様帯に 簾状文を巡らし、その上下に朝 光寺原Ⅰ類の波状文。下地の ハケ目が残る。内面の胴部以下 に薄く煤付着。	朝光寺原式
5	朝光寺原 510 P9 N13	甕 / 約70%残存 (底部を欠損)	口径: 15.2 頸径: 13.3 胴径: 15.8 底径: - 残高: 13.5	微砂粒少 / 良好 / 赤色 ～赤橙色 / 胴部下半は二 次焼成を受け淡赤橙 色に変色。	内外面共に木端調整(ハケ目) 後に棒状ミガキを密に施し、 ハケ目をほとんど磨り消して いる。外面は底部が縦方向、口 ～胴部は斜め方向。内面は胴 部上位に横方向。	口唇部に刻目文。口頸部に朝光 寺原Ⅰ類の波状文。下地のハケ 目が残る。ハケ目痕は深い。口 縁～胴部上半に薄く煤付着。	朝光寺原式
6	朝光寺原 510 P10	甕 / ほぼ完形 (口縁部1/6弱を 欠損)	口径: 12.6 頸径: 11.1 胴径: 13.6 底径: 6.9 器高: 18.7	微砂粒少 / 良好 / 赤橙 色 / 胴部中位以下は二 次焼成を受け淡赤橙色 に変色。	内外面共にやや深い木端調整 痕(ハケ目)が明瞭。底部外面 に縦方向の棒状ミガキ。口唇 直下と底部下端にヘラナデ。口 頸部内面は横ヘラナデ。ハケ 目をナデ消している。	頸部の窄まり方がやや弱い/口 唇部に刻目文。口唇直下に狭い 無文帯。口頸部に朝光寺原Ⅲ類 の波状文を巡らす。口縁～胴部 上半に薄く煤付着。	朝光寺原式
7	朝光寺原 510a N4	甕 / ほぼ完形 (口縁の1/10を 欠損)	口径: 13.8 頸径: 12.4 胴径: 12.8 底径: 6.5 器高: 14.9	微砂粒少 / 良好 / 赤色 ～赤橙色 / 全体的に二 次焼成を受け、器肌が 脆くなっている。	外面はやや深い木端調整痕 (ハケ目)が明瞭に残る。内面 にも浅いハケ目痕をすが、口 縁部にはヘラナデを加えてい る。	頸部の窄まり方が弱く、口縁は 弱く外反。口唇部に刻目文。口 縁部文様帯は無文でハケ目を残 す。朝光寺原Ⅱb類の波状文を巡 らす。口縁～胴部にかけて煤が薄 く付着。	朝光寺原式
8	朝光寺原 510a-1 N2	甕 / 底部を欠損	口径: 16.0 頸径: 13.6 胴径: 18.2 底径: - 残高: 22.4	微砂粒少 / 良好 / に ぶい橙色。	内外面共に丁寧なミガキを縦 方向に加え、下地の深いハケ 目痕を所々に残す。やや光沢 がある。	無文/外面の口縁～胴部上半に 薄く煤付着。内面は胴部～底部 に煤が付着。	朝光寺原式
9	朝光寺原 510a	甕 / 胴部下半以 下を欠損 (40% 残存)	口径: 12.2 頸径: 10.4 胴径: 14.9 底径: - 残高: 12.4	微砂粒少 / 良好 / に ぶい橙色。	外面の口縁～胴部上半にはヘ ラナデ、胴部下半以下に棒状 ミガキを施す。内面は、口頸部 に横方向のヘラナデ、以下に は斜め方向のヘラナデ。光沢 は欠く。	無文/口唇部に刻目文。口縁～ 胴部にかけて煤が薄く付着。	朝光寺原式
10	朝光寺原 510a3	甕 / 完形	口径: 16.4 頸径: 14.4 胴径: 13.3 底径: 5.3 器高: 14.3 ～ 15.2	微砂粒少 / 良好 / に ぶい橙色。	外面は、口縁部に横方向のヘ ラナデ、底部には縦方向の棒 状ミガキ、その他はハケ目痕 を残す。内面は、口縁～胴部に ヘラナデ、粗い棒状ミガキを 加え、その下位はハケ目を残 す。	胴部最大径より頸部径の方が大 きく、口唇に向かって開く器形。 口縁は僅かに外反/刻目文が口 唇部に。口縁部文様帯は無文。頸 部文様帯には朝光寺原Ⅲ類の波 状文/口縁～胴部にかけて煤が薄 く付着。	朝光寺原式
11	朝光寺原 510 P7 N12	甕 / 完形	口径: 12.1 頸径: 9.7 胴径: 9.8 底径: 5.8 器高: 14.0	微砂粒少 / 良好 / 明黄 褐色 or にぶい橙色。	内外面共に、二次器面調整の ヘラナデと棒状ミガキにより 一次器面調整のハケ目は消さ れている。	胴部最大径と頸部径がほぼ同一 で、口縁は外反するが、端部は僅 かに内湾を示す。口唇部に刻目 文。口縁外面に煤が付着。	朝光寺原式
12	朝光寺原 510	甕 / ほぼ完形 (所々欠損 /90%)	口径: 13.7 頸径: 11.7 胴径: 12.9 底径: 6.4 器高: 13.9	微砂粒少 / 良好 / 橙色 ないし淡赤色。	ハケ目の器面調整痕を内外面 に残す。外面底部と内面口縁 部にはヘラナデを加えている /二次焼成を全体的受けてい る。	口縁部が大きく反り帰り、口唇 は外を向く。口唇部にはヘラ先 による斜めの連続刻目文を加飾。 無文でハケ目痕が全体を覆う。	床付面に刳 痕が3カ所あ り。うち1カ 所には筋が明 瞭 / 朝光寺原 式
13	朝光寺原 B510, 514a ユ	高坏/坏部(B510) の1/4を残存。脚 部(514A)上半を 残存	口径: 17.8 脚径: 4.6 底径: - 残高: 12.5	微砂粒・長石粒多量 / 良好 / 褐色～暗褐色	外面の坏部下半～脚部は細か な棒状ミガキが丁寧に施され ている。横方向を施文後に縦 方向を施す。坏部内面も同様。 脚部内面には横方向のハケ目 を残す。	口縁部文様帯は下端に横走沈線 で区画し、羽状縄文を充填して いる。口唇部には斜行縄文を施 す。坏部下半の無文帯以下に赤 彩がある。	坏部と脚部は 共接合すると 判断した /

図版 番号	出土遺構	器種 / 部位 / 残存率	法量 (cm)	胎土 / 焼成 / 色調	器面調整	形態 / 文様 / その他の特徴	備 考
14	朝光寺原 510 P1 N1	壺 / 頸部下半の 大形破片	口径：－ 頸径：11.0 胴径：－ 底径：－ 残高：5.5	微砂粒・長石粒多量 / 良好 / 外面は橙色、内 面は黄橙色 / 内外面共 に油脂質の炭化物が薄 く付着する。	内外面とも丁寧なミガキを施 し、一次ハケ目調整痕をほぼ 止めない。	内外面に赤彩あり。	久ヶ原・弥生 町式系
15	朝光寺原 510	甕 / 口辺部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：8.2	微砂粒少 / 良好 / にぶ い橙色。	内外面共に本端調整(ハケ目) 後に棒状ミガキを密に施し、ハ ケ目をほとんど磨り消してい る。内面の口唇直下は横方向の ヘラナデを施す。	口唇部に刻目文。口縁部に朝光寺 原Ⅰ類の波状文を巡らす。	朝光寺原式
16	朝光寺原 510b	甕 / 頸部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：8.9	微砂粒少 / 良好 / 外面 は黒褐色、内面はにぶ い橙色。	浅いハケ目を外面に残す。内面 はヘラナデを施し、ハケ目が目 立たなくなっている。	頸部に簾状文を巡らせ。その上・下 に波状文を加飾する。波状文は三 段台Ⅰc類。	1と同一個体 の可能性有り / 朝光寺原式

(※註：出土遺構欄の表記は土器の注記に従っている)

原式土器設定の基準となった510号住居址出土土器を他と区別して提示した。今回確認できなかった土器と実測に至らなかったものは、報文実測図(岡本・武井1969)を転載した。

510号住出土土器第8図1～5・第9図15・16は櫛描波状文を有する甕で、波状の振幅が大きく、重複して施文している箇所も多い。1・15は頸部のみに櫛描文(波状文・簾状文)を有するものである。1の頸部簾状文は、等間隔止めの施文となっている。2～5・15は頸部の括れ部から口唇直下付近まで波状文を施している。6・7・10は、波状文が口唇直下まで及ばず、無文帯を残すものである。6はその垂直幅が小さいが、7・10は、口縁部をほぼ無文帯としている。16は1と同一土器の可能性があるが、接合点を見出せなかったものである。

第9図8・9は無文の甕である。8はハケ目調整後にヘラナデを加え、さらに縦方向の丁寧な棒状ミガキで仕上げている。9には明確な棒状ミガキが認められない。また、口縁部に刻目文を有する。

第9図11はコップ形を呈する小型甕で、第10図S43-2図-7と同類の器形を呈する。胴部以下に縦方向の棒状ミガキを施している。

第9図13・第10図S43-2図-1・同10は、久ヶ原・弥生町式系の土器である。13は高坏で、口縁部文様帯に沈線区画の羽状縄文を巡らせている。口唇部は水平を呈し、斜行縄文が施されている。S43-2図-1は大型壺で口縁端部は水平近くまで大きく開き、口唇部は外を向く。端部は複合口縁を呈し、三輪玉状の棒状貼付文(3条1組)を加飾している。貼付文間には斜行縄文を施している。横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター・横浜市歴史博物館に現存しない。第10図S43-2図-10は疑似複合口縁を呈する鉢で下端に小段を残す。口縁部文様帯下端を沈線区画し羽状縄文を充填施文している。口縁部は胴部から「く」の字状に内屈しており、口唇部は内傾している。

第10図S43-2図-5は無文の鉢で、厚い底から逆「ハ」の字状に開くものである。器面にはハケ目調整痕が残る。口唇部には刻目文が巡る。

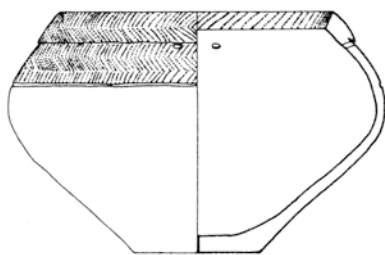
第10図S43-2図-7は、コップ型を呈する細身の小型甕で、第9図11と類似する器形である。

510号住居址出土土器の内、今回は確認できず実測できなかった無文の壺形甕がある(第10図⑫)。『古代のよこはま』(横浜市教育委員会1986)に掲載されたものである。S43-2図-8と器形がやや類似しているが、より細身で底径も小さいものである。

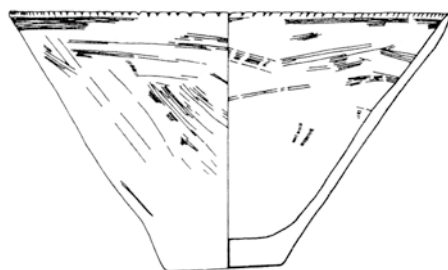
第10図17・18は広口の甕で、口頸部文様帯に波状文を施しているが、各段の間に若干の隙間がみられるもので、19・20はさらに隙間が明瞭となるものである。新しい様相として捉えておきたい。



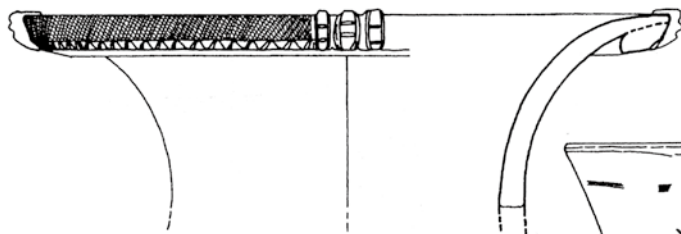
S43-2 図-7



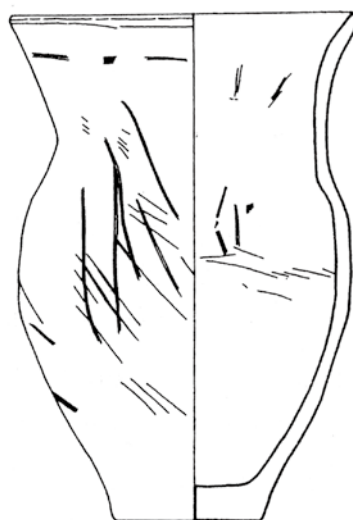
S43-2 図-10



S43-2 図-5



S43-2 図-1



S43-2 図-1



『古代のよこはま』
より転載（武井 1986）

（実測図は 岡本・武井 1969 より転載）

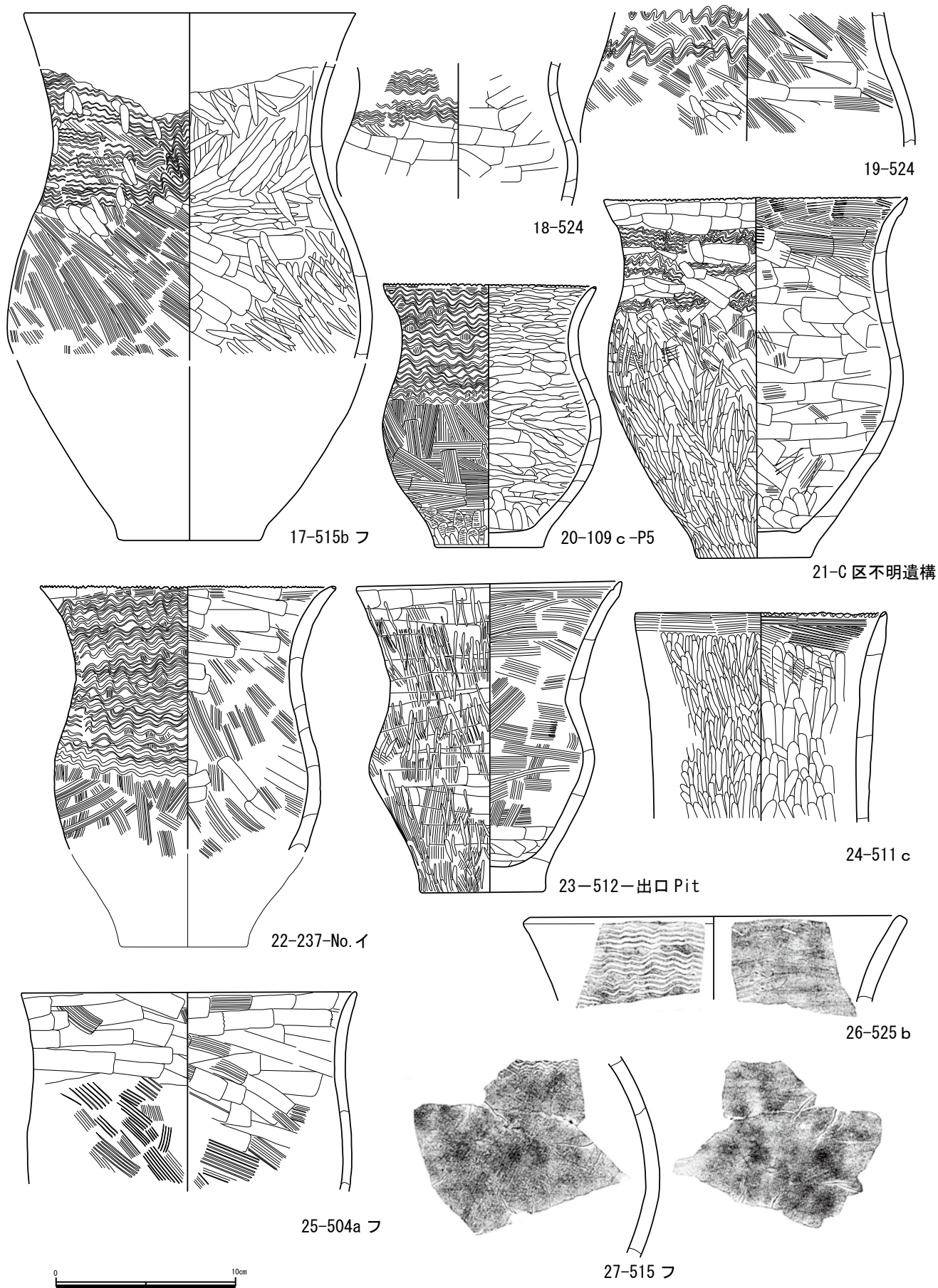
第 10 図 朝光寺原遺跡 B 区 510 号住居址出土土器(3) — 報文掲載土器 —

第 11 図 21 は、胴部最大径が器高のほぼ中位にあり、口径は極僅かに大きい。外面はハケ目調整後にヘラナデを行い、さらに縦方向の棒状ミガキを加えている。底部はより密に施されている。口頸部には仕上げのヘラナデを行っており、波状文をナデ消している箇所もみられる。口唇直下にはヘラ削りにも似た手法が見られ、口唇部は鋭角に尖っている。波状文は間隔のある施文となっている。

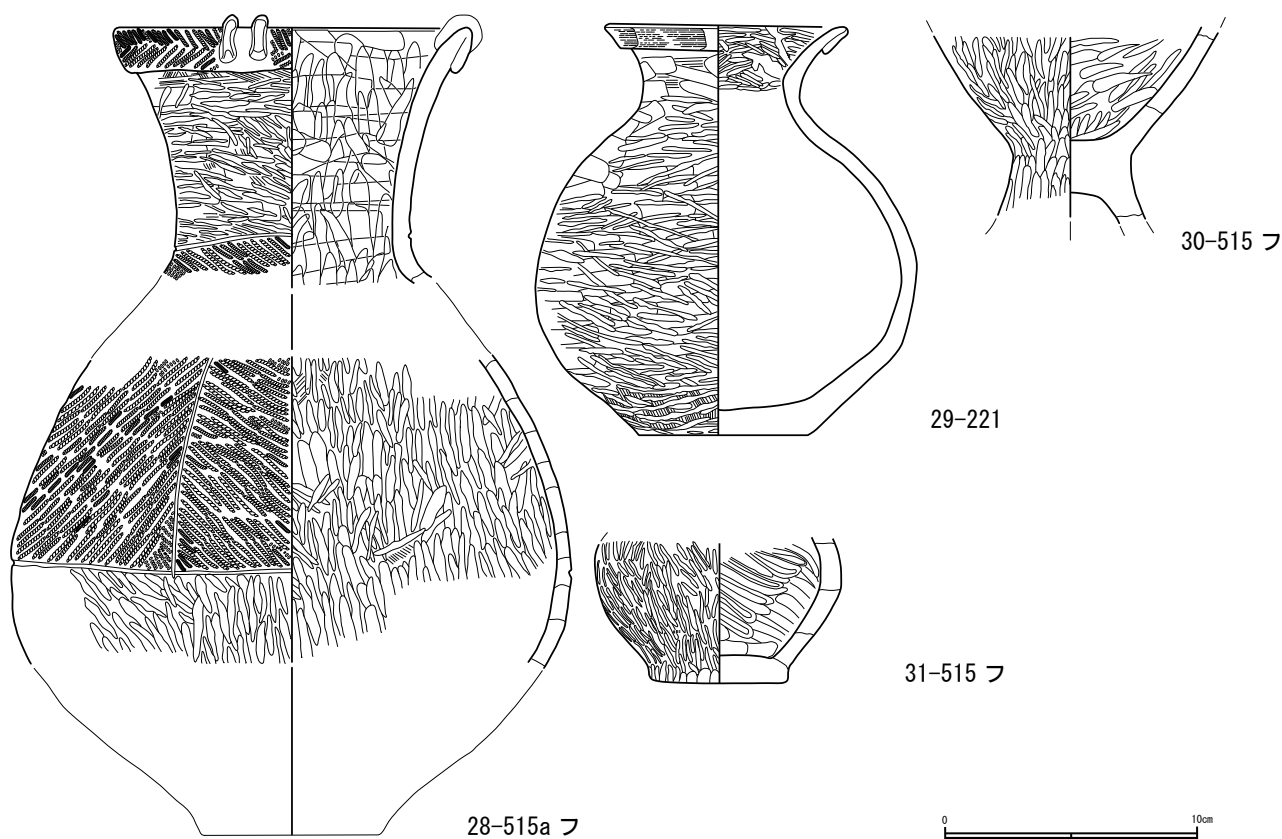
第 11 図 24 は山中式系の小型の長頸壺である。口唇部の刻目文は、先端を鋭角にした木端状工具に因っていることがわかる（写真 9 上）。口頸部は垂直的に立ち上がるが、全体的には僅かに開く。また、山中式系土器の影響を受けたと思われるものには、三殿台遺跡第 13 図 45 の有段高坏もある。

第 13 図 48 は大型壺で、頸部に簾状文と波状文を有するものである。3 段の簾状文が残るが、5・6 段に及ぶ可能性があり、幅広の簾状文帯となる。

第 13 図 49・51～53 はハケ目を残す台付甕である（写真 12・13）。49 は、北川谷編年の 4 期古に比定できるであろう。甕部の高さより胴部最大径の方が大きく、甕部中位より上に最大径の位置がある。口径は最大径より小さく 0.92 の比率を示す。口縁部はやや弱く外屈し、口唇部は外を向き、木端状工具による刻目文を加飾している。51・52 については、5-15) の項で後述する。53 は外面のハケ目調整痕が深く、他と異なる様相を示す。口縁部は縦方向のハケ目調整痕で、胴部は横ないし右下がり施している。異系統のもの



第 11 図 朝光寺原遺跡 A・B・C 区（510 号住居址以外）出土の弥生後期土器実測図(1)



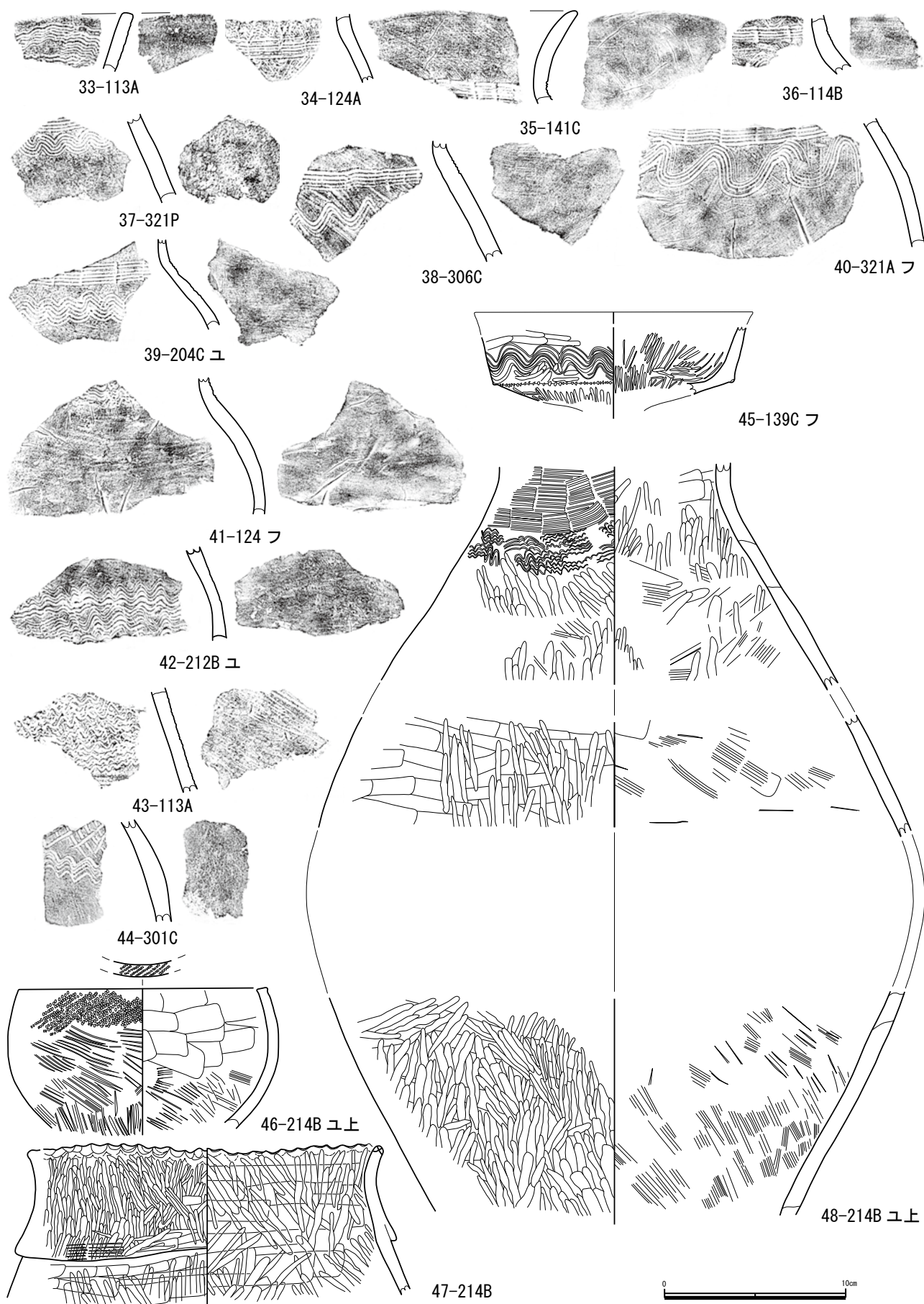
第 12 図 朝光寺原遺跡 A・B・C 区（510 号住居址以外）出土の弥生後期土器実測図(2)

第 4 表 朝光寺原遺跡 A・B・C 区住居址出土土器観察一覧表

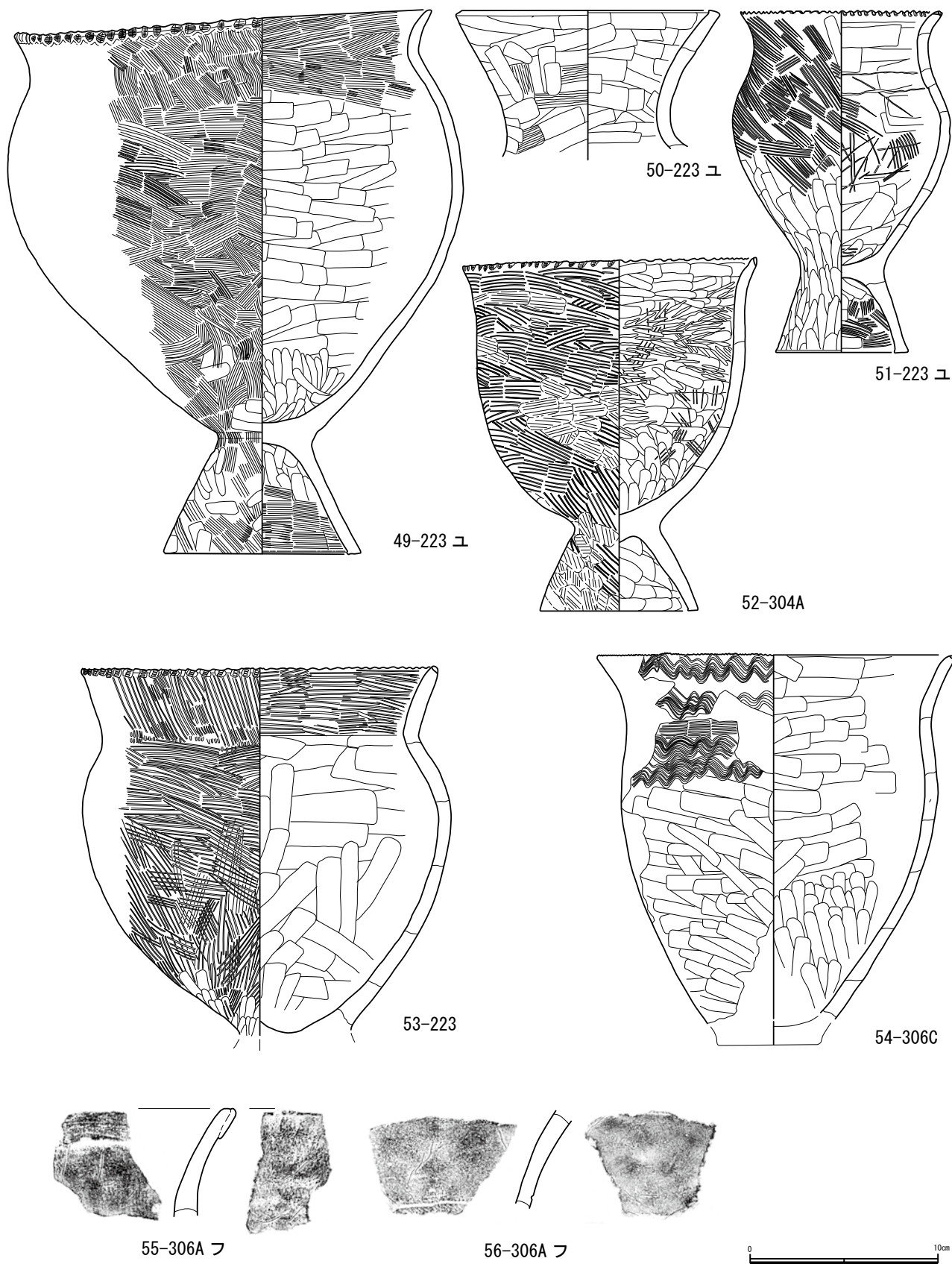
図版 番号	出土遺構	器種 / 部位 / 残存率	法量 (cm)	胎土 / 焼成 / 色調	器面調整	形態 / 文様 / その他の特徴	備 考
17	朝光寺原 515b フ	甕 / 頸部～胴上 半部にかけて 1/4 を残存。	口径：－ 頸径：14.9 胴径：20.2 底径：－ 残高：15.8	微砂粒少 / 良好 / 外面 はにぶい褐色・橙色、 胴部下半は二次焼成を 受けている。内面は明 黄褐色。	外面には斜め方向の浅いハケ 目。頸部にはユビナデも所々 にみられ、波状文を磨り消 している箇所もある。内面 にはヘラナデと棒状ミガキを 施す。	頸部には 7 段に亘り波状文を巡 らせるが隙間がある。朝光寺原 Ⅱ a 類の波状文を巡らす。／胴 部上半には煤の付着がある。	朝光寺原式
18	朝光寺原 B524	小型甕 / 頸部～ 胴部上半部の 1/4 弱を残存	口径：－ 頸径：11.1 胴径：13.5 底径：－ 残高：7.8	微砂粒少 / 良好 / 明黄 褐色・明褐色	内外面共に木端調整（ハケ目） 後にヘラナデを施すが、ハケ 目を完全に消し去っていな い。	朝光寺原Ⅱ b 類の波状文を巡ら す。	朝光寺原式
19	朝光寺原 B524	甕 / 頸部～胴部 上半部の 1/4 を 残存	口径：－ 頸径：14.7 胴径：18.7 底径：－ 残高：7.2	微砂粒少 / 良好 / にぶ い赤橙色・暗茶褐色。	内外面共に木端調整後にヘラ ナデを軽く施す。	頸部に三殿台Ⅱ b 類の波状文を 巡らす。波状文間には僅かな間 隔がある。下地の刷毛目が顕著 に残る。	朝光寺原式
20	朝光寺原 109c P5	小型甕 / 口縁部 の 3/8 を欠損	口径：11.8 頸径：9.8 胴径：12.2 底径：6.1 － 器高：14.6	微砂粒少 / 良好 / 橙色・ 淡赤橙色 / 二次焼成を 受け器面は荒れて脆く なっている。	外面は木端調整（ハケ目）→ヘ ラナデ後に縦方向の棒状ミガ キを粗く加えている。内面は 横方向のヘラナデが丁寧丁寧 だが、棒状ミガキは見られ ない。	口唇部に刻目文。口頸部文様帯 に朝光寺原Ⅱ b 類の波状文。下 地のハケ目が残る。外面の口縁 ～胴部中位に薄く煤付着。	朝光寺原式
21	朝光寺原 C 区 不明遺構	甕 / ほぼ完形 （胴部の一部を 欠損）	口径：16.9 頸径：14.6 胴径：16.5 底径：6.5 器高：20.0	微砂粒少 / 良好 / 橙色 ～明赤褐色 / 底部下位 に煤が付着。内面も同 様。底部下端は二次焼 成を受け淡橙色に変 色。	外面は木端調整（ハケ目）後に ヘラナデを施し、更に棒状ミ ガキを密に施す。内面は丁寧 な横方向のヘラナデ。口縁部 などには 1 次ハケ目調整痕が 残る。	頸部の窄まり方がやや弱い。口 唇部に刻目文。口頸部に朝光寺 原Ⅲ類の波状文。ヘラナデに よって消されている所がある。 ／下地の刷毛目が残る。ハケ目 痕は深い。／口縁～胴部上半に 薄く煤付着。	朝光寺原式

図版 番号	出土遺構	器種 / 部位 / 残存率	法量 (cm)	胎土 / 焼成 / 色調	器面調整	形態 / 文様 / その他の特徴	備 考
22	朝光寺原 237 Noイ	甕 / 口縁～胴部 の1/4を残存	口径：16.1 頸径：12.6 胴径：14.8 底径：－ 残高：14.6	微砂粒少 / 良好 / 橙色 ～明赤褐色 / 底部下位 に煤が付着。内面も同 様。底部下端は二次焼 成を受け淡橙色に変 色。	内外面共にやや深い木端調整 痕（ハケ目）が明瞭。底部外 面に縦方向の棒状ミガキ。口 唇直下と底部下端にヘラナデ。 口頸部内面は横ヘラナデ。ハ ケ目をナデ消している。	口径が胴部最大径を上回る。口 縁部幅がやや長く、弱く外反す る。／口唇部に刻目文。口唇直 下に狭い無文帯。口頸部に朝光 寺原Ⅱ b 類の波状文を巡らす。 ／口縁～胴部上半に薄く煤付着。	朝光寺原式
23	朝光寺原 512 出口 Pit	甕 / (口縁部の 約1/3を欠損)	口径：14.9 頸径：10.6 胴径：12.6 底径：7.1 器高：17.1	微砂粒少 / 良好 / 外面 は明黄褐色内面は橙色 ～褐灰色 / 頸部～肩部 に黒斑有り。	外面は木端調整痕（ハケ目） 後にヘラナデを加え、その後 さらに粗く棒状ミガキを加え ている。内面にもハケ目痕を 残すが、底部にはヘラナデを 加えている。	頸部が「く」の字状を成し、口 縁は直線的に開く。胴部は算盤 玉状を成す / 無文 / 外面の口縁 ～胴部上半に薄く煤付着。	朝光寺原式
24	朝光寺原 511c	長頸壺 / 口縁～ 頸部上半の約 1/3が残存、頸 部下半～底部を 欠損	口径：14.1 頸径：12.0 胴径：－ 底径：－ 残高：11.4	微砂粒少 / 良好 / にぶ い橙色～赤褐色。	内外面共に丁寧なミガキを縦 方向に加え、ハケ目をほとん ど磨り消している。やや光沢 がある。	垂直的に立ち上がる長い口頸部 を有し、やや扁平な胴部に繋がる ものと思われる。木端調整後 にヘラナデ棒状ミガキを加えて いる。内外面共に、口縁直下に ハケ目を残す。口唇部には刻目 文を有する。	山中式系（中 期）
25	朝光寺原 504a フ	甕 / 大形破片	口径：18.7 頸径：17.3 胴径：18.0 底径：－ 残高：10.6	微砂粒少 / 良好 / にぶ い橙色。	外面の口縁～胴部上半にはヘ ラナデ、胴部下半以下に棒状 ミガキを施す。内面は、口頸 部に横方向のヘラナデ、以下 には斜め方向のヘラナデ。光 沢は欠く。	頸部の窄まりが弱く胴が張らな い広口の器形である。無文。／ 口縁～胴部にかけ煤が薄く付 着。	朝光寺原式
26	朝光寺原 525	甕 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：4.4	微砂粒少 / 良好 / にぶ い橙色。	器面調整としてのハケ目痕を 止める。内面では横方向のヘ ラナデを加えており、ハケ目 をほとんど残していない。	口縁部に朝光寺原Ⅱ a 類の波状 文を巡らす。しっかり施文され た波状文である。その下地にハ ケ目痕を止める。	朝光寺原式
27	朝光寺原 515 フ	甕 / 胴部大形破 片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：8.2	微砂粒少 / 良好 / にぶ い橙色。	外面には斜め方向の浅いハケ 目。内面にはハケ目痕→ヘラ ナデを施す。	頸部に朝光寺原Ⅱ b 類の波状文 を巡らす。	朝光寺原式
28	朝光寺原 515a フ	大形壺 / 口頸部 大形破片1点と 胴部破片6点	口径：14.2 頸径：9.2 胴径：22.1 底径：5.8 推高 (32.4) 残高：10+12	微砂粒少・長石 / 良好 ／明黄褐色～にぶい橙 色。	器面の木端調整無文部では棒 状ミガキを加えている。口縁 の複合は一次木端調整後。内 面では横方向のヘラナデ後に 縦方向の磨きを加えている。 胴部内面は棒状のミガキとな る。	複合口縁を呈し、2条1単位 の棒状貼付文と横羽状縄文を加 飾する。頸部下半～胴部上半は横 走沈線で横帯区画し、さらに沈 線で縦区画を加えそれを境に縦 羽状縄文を充填する。	同一個体と判 断し口頸部と 胴部は図上復 元 / 久ヶ原・ 弥生町式
29	朝光寺原 221	短頸小型壺 / 口 縁部1/2と胴部 1/8を欠損	口径：9.6 頸径：6.3 胴径：15.2 底径：6.8 器高：16.2	微砂粒少 / 良好 / 橙色 ないし淡赤色。胴～底 部に黒斑有り。	木端調整（ハケ目）後にヘラ ナデを加え、さらに棒状ミガ キを施している。	複合口縁。頸部は短く口縁は大 きく開く。胴部は球状を成し大 きく張るが最大径が下位にあり 下膨れ感がある。	久ヶ原・弥生 町式系
30	朝光寺原 515 フ	高坏 / 坏部下端 ～脚部上端部が 残存	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 脚径：4.6 床径：－ 残高：7.1	微砂粒少 / 良好 / にぶ い橙色。	木端調整（ハケ目）後にヘラ ナデを加え、さらに棒状ミガ キを施している。	内外面共に赤彩あり。	久ヶ原・弥生 町式系
31	朝光寺原 515 フ	小型壺 / 胴～底 部が残存	口径：－ 頸径：－ 胴径：9.7 底径：5.7 残高：5.5	微砂粒・長石・チャ ー・細砂粒多 / 良好 / 明黄褐色～にぶい橙 色。	外面には丁寧なミガキを施 す。胴部内面は斜行するヘラ ナデを強く加えており、その 境には段差を有する。	器面には細かな剥落を有する	久ヶ原・弥生 町式系

（※註：出土遺構欄の記載は土器に記載された注記に基づいているが、住居址番号の後ろのアルファベットは、第2・3図（住居址分布図）に合わせて小文字に変更した。2行目の3桁数字が住居址番号である。
※註：510号住居址の出土土器には、P番号とN番号の2種が注記されているものがある。P番号は調査時に付されたもので、N番号は報文の図版中の番号と概ね一致していることから、報文作成時に付されたものと思われる。
22の「Noイ」は不明である。
※註：住居址番号の前のアルファベットは調査区を示し、後ろの「フ」は覆土の略と思われる。）



第 13 図 三殿台遺跡 214B 住居址出土ほかの弥生後期土器実測図



第 14 図 三殿台遺跡 223、304A、306A・C 号住居址出土の弥生後期土器実測図

第5表 三殿台遺跡住居址出土土器観察一覧表

図版 番号	出土遺構	器種 / 部位 / 残存率	法量 (cm)	胎土 / 焼成 / 色調	器面調整	形態 / 文様 / その他の特徴	備 考
33	三殿台 113A	小型甕 / 頸部～ 胴部上半部の 1/4弱を残存	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：3.1	微砂粒多 / 良好 / 橙色 ～明赤褐色。	外面は縦方向の木端調整後に 横方向のヘラナデ / 内面は横 方向のヘラナデ。	口縁部文様帯に朝光寺原Ⅱ a 類 の波状文。口唇部近くまで施文 される。	朝光寺原式
34	三殿台 124A	甕 / 頸部～胴部 上半部の1/4を 残存	頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：3.6	微砂粒少 / 良好 / 黒褐色。	外面は左右に斜行するハケ目 調整 / 内面は一次ハケ目調整 後に横方向のヘラナデ。	頸部に6条1単位の簾状文を巡 らす。止め有り。その上下には 三殿台Ⅰ c 類の波状文を巡らす。 下位波状文→簾状文→上位波状 文の順で施文。	朝光寺原式
35	三殿台 141C	小型甕 / 口縁部 の3/8を欠損	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：4.8	微砂粒少 / 良好 / 黒褐色。	内外面とも口縁部には右下が りの浅いハケ目（一次器面調 整）後に横方向の軽いヘラナ デを加える。	口縁部文様帯は無文。頸部に簾 状文を巡らす。止め有り。	朝光寺原式
36	三殿台 114B	甕 / ほぼ完形 (胴部の一部を 欠損)	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：3.2	微砂粒少 / 良好 / 黒褐色 ～にぶい褐色 / 。	外面は右下がりのハケ目を止 める / 内面は右下がりの浅い ハケ目（一次器面調整）後に 横方向の軽いヘラナデを加え る。	頸部に5条1単位の簾状文を巡 らす。止め有り。その上下には 三殿台Ⅰ c 類の波状文を巡らす。	朝光寺原式
37	三殿台 321P	甕 / 大形破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：－	微砂粒少 / 良好 / 暗赤 褐色～黒褐色。	外面は右下がりのハケ目を止 める / 内面は右下がりの浅い ハケ目（一次器面調整）後に 横方向のヘラナデを加える。	頸部に簾状文を巡らす。その下 に三殿台Ⅰ a 類の波状文を1段 巡らす。	朝光寺原式
38	三殿台 306C	甕 / 胴部大形破 片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：8.2	微砂粒少 / 良好 / にぶ い橙色。	外面は右下がりのやや深いハ ケ目を止める / 内面は右下が りのハケ目（一次器面調整） 後に横方向の軽いヘラナデを 加える。	頸部に6条1単位の簾状文を巡 らす。弱い止め有り。その下 に三殿台Ⅰ c 類の波状文を巡ら す。	朝光寺原式
39	三殿台 204C ユ	甕 / (口縁部の 約1/3を欠損)	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：4.6	微砂粒少 / 良好 / にぶ い褐色～赤褐色	外面は右下がりの浅いハケ目 を止める / 内面は横ないし右 下がりの浅いハケ目（一次器 面調整）後に横方向のヘラナ デを加える。	頸部に6条1単位の簾状文を巡 らす。その下に三殿台Ⅰ a 類の 波状文を1段巡らす。	朝光寺原式
40	三殿台 321A フ	甕 / 胴部上位の 大形破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：7.0	微砂粒少 / 良好 / 灰褐 色～黒褐色。	外面は一次器面調整後にヘラ ナデを加える。 / 内面は右下 がりの浅いハケ目（一次器面 調整）後に横方向の軽いヘラ ナデを加える。	頸部に5～6条1単位の簾状文 を巡らす。等間隔止め。その下 に三殿台Ⅰ a 類の波状文を1段 巡らす。	朝光寺原式
41	三殿台 124 フ	甕 / 胴部上位の 大形破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：7.2	微砂粒少 / 良好 / 外面 は灰褐色～黒褐色、内 面は褐色。二次焼成を 受けている。	外面には縦方向の一次器面調 整（ハケ目）後に横方向のヘ ラナデを加えている。 / 内面 は右下がりの浅いハケ目（一 次器面調整）後に横方向のヘ ラナデを加える。	頸部に朝光寺原Ⅱ a 類の波状文 を巡らせる。	朝光寺原式
42	三殿台 212B ユ	甕 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：4.9	微砂粒少 / 良好 / 鈍い 褐色～にぶい橙色。	外面は、一次木端調整→ヘラ ナデ→棒状ミガキ / 内面は一 次木端調整→ヘラナデ→横方 向の棒状ミガキの順で施す。	頸部に朝光寺原Ⅱ b 類の波状文 を巡らせる。	朝光寺原式
43	三殿台 113A	甕 / 頸部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：5.5	微砂粒少 / 良好 / 灰褐 色～橙色。	外面はやや深い木端調整痕 (ハケ目) / 内面はヘラナデ を加えているが消し切れてい ない。	頸部に朝光寺原Ⅱ b 類の波状文 を巡らせる。	朝光寺原式
44	三殿台 301C	壺 / 頸部下位 (肩) 破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：4.9	砂粒多、白色粒・褐色 粒・金雲母少量 /	外面はヘラナデ後に格子目文 と波状文を施す。	頸部下端（肩部）に格子目文を 沈線で施し、その下に三殿台Ⅰ b 類の波状文を巡らせる。格子 目文の下端は山形（鋸歯状）を 形成する。	朝光寺原式系
45	三殿台 139C フ	高坏 / 坏底部の 1/2弱を残存	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 杯部底径：13.5 残高：4.5	微砂粒極多、チャート 粒・輝石粒多、褐色粒 少、金雲母やや多 / 良 好 / 良好 / 外面は灰褐色 ～褐色、内面は黄褐色。	体部外面にはヘラナデ後に横 方向にミガキを加えている。 体部底外面には縦方向の棒状 ミガキを施している。	皿状に大きく開いた坏底部から 「く」の字状に屈曲して立ち上 がり、弱く外傾。口縁端部は僅 かに外反する。体部外面に三殿 台Ⅰ a 類の波状文を巡らす。体 部後線には刻目文を加飾。	山中式系（4 段階）

図版 番号	出土遺構	器種 / 部位 / 残存率	法量 (cm)	胎土 / 焼成 / 色調	器面調整	形態 / 文様 / その他の特徴	備 考
46	三殿台 214B ユ上	高坏 / 坏部口縁 ～胴部にかけて の破片 2 点 (1/6 残存)	口径：13.7 頸径：－ 胴径：14.9 底径：－ 残高：7.5	砂粒多、白色粒を少量 混入 / 良好 / 内外面と もに暗赤灰色～黒褐 色。	内外面ともに木端状工具による 器面調整痕（ハケ目）を止 める。内面口辺には横方向の ヘラナデ調整が加えられてい る。	丸みをもった胴部、僅かに内湾 した口縁を呈する。口縁部文様 帯は斜行縄文（LR）を巡らす。 口唇部にも縄文（LR）を施す。	久ヶ原・弥生 町式
47	三殿台 214B	甕 / 口辺部大形 破片 (1/5 残存)	口径：19.6 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：8.2	砂粒多、白色粒・褐色 粒・金雲母を少量混入 / 良好 / 外面は灰褐色 ～にぶい橙色。内面は にぶい橙色。二次焼成 を受ける。	一次ハケ目調整後にヘラナデ →棒状ミガキを加えている。	口辺部は内傾し、口縁端部は外 反する。胴部は膨らむと思われ る。口唇部には指頭ないし棒状 工具による連続押圧文があり山 形を呈する。	東京湾東岸系
48	三殿台 214B ユ上	大形壺 / 破片 13 点 / 頸部 3/5 弱、 胴部 1/3 弱、底 部 1/2 弱を残存。	口径：－ 頸径：12.7 胴径：(34.3) 脚径：－ 床径：－	白色粒・長石・石英 粒・褐色粒・金雲母を 混入 / 良好 / 内外面と もに橙色～にぶい橙 色。器壁内面には剥落 が目立つ。	外面は、横ないしやや斜行す るヘラナデ後に棒状ミガキを 施す。内面調整痕を見ると一 次ハケ目調整があったと思わ れる。内面は剥落が目立つ。 ヘラナデ後に棒状ミガキを加 えている。	推定器高 60cm、推定胴部最大径 34・5cm を有する大形壺にな ると思われる。頸部に簾状文が 4 段巡り、その下に、数単位に途 切れる朝光寺原Ⅲ類の波状文を 施文している。	朝光寺原式
49	三殿台 223 ユ	台付甕 / ほぼ完 形	口径：22.2 頸径：20.8 胴径：24.2 脚径：5.0 床径：10.5 器高：28.4	砂粒極多、白色粒・長 石粒多、/ 良好 / 外面 はにぶい橙～赤橙色、 内面はにぶい橙色・黒 褐色。/ 二次焼成あり。	外面はハケ目調整で仕上げて いる。内面は胴部にヘラナデ があり、底部にはミガキが加 えられている。	胴部最大径を中位より上にもつ。 口径は胴部最大径より小さく、 「く」の字状にやや弱く外反する。	北川谷 4 期系
50	三殿台 223 ユ	壺 / 口辺部	口径：14.0 頸径：6.8 胴径：－ 底径：－ 残高：7.3	微砂粒少 / 良好 / 外面 は灰褐色～黒褐色、内 面は褐色～褐灰色。	内外面とも、ハケ目調整後に ヘラナデでハケ目をほとんど 消している。	口辺は「く」の字状に外反する。 無文。	久ヶ原・弥生 町式系
51	三殿台 223 ユ	台付甕 / 完形	口径：10.8 頸径：9.3 胴径：11.6 脚径：4.5 床径：7.0 器高：18.1	砂粒・長石多 / 良好 / 黄橙色～淡黄色。	外面は右下がりのハケ目。そ の後に底部と脚部にヘラナデ を加える / 内面はヘラナデで 一次調整の深いハケ目痕を消 しているが、部分的に残る。	細身の台付甕で、口径は胴部最 大径より小さい。胴部最大径は、 胴部中位より僅かに上に位置する / 口唇部に刻目文。	朝光寺原式
52	三殿台 304A	台付甕 / 完形	口径：15.7 頸径：14.4 胴径：13.9 脚径：4.5 床径：7.0 器高：18.8	微砂粒少 / 良好 / 内外 面ともに橙色。	外面は右下がりの深い木端調 整痕（ハケ目）/ 内面はヘラ ナデでハケ目を消し、さらに 棒状ミガキを加えている。	頸部の窄まりは極僅かで、口縁 は僅かに外反する。底部が丸く 膨らみをもつコップ型の台付 甕。口唇部に刻目文。	駿河湾系
53	三殿台 223	台付甕 / 脚部欠 損	口径：19.1 頸径：16.9 胴径：19.6 脚径：5.9 底径：－ 残高：19.0	砂粒多 / 良好 / 橙色～ 褐灰色。	外面は、口辺に縦方向の深い ハケ目。/ 内面は口辺部に一 次調整の深いハケ目痕を残 す。胴部以下は概ね横方向の ヘラナデを施す。底部下半は 二次焼成を受け変色。	口径と胴部最大径が近似する。 胴部最大径が胴部上位にあり、 弱い肩をもつ形状。口唇部に刻 目文。	久ヶ原・弥生 町式系
54	三殿台 306C	甕 / 口縁～底部 にかけての約 1/ 2 を残存。底部 下端は欠損。	口径：19.1 頸径：16.2 胴径：16.9 底径：－ 残高：19.1	微砂粒少 / 良好 / 外面 は灰褐色～黒褐色、内 面は褐色～褐灰色。二 次焼成を受けている。	外面には横ないしやや斜め方 向の木端調整（浅いハケ目） 痕。その後にその後に簾状文 と波状文を巡らせる。内面 にはヘラナデを施し、ハケ目が 消されている箇所もある。	広口の甕で頸部の締めは弱い。 頸部に簾状文（7 条）を巡らせ た後、その上・下に三殿台Ⅰ b 類の波状文を 2 段加飾する。	朝光寺原式
55	三殿台 306A フ	壺 / 口辺部	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：5.4	微砂粒少 / 良好 / 内外 面ともに橙色。	外面は横方向のハケ目を縦方 向に施した後に棒状ミガキで 消している。	複合口縁を呈する。内外面に赤 色塗採を施す。	久ヶ原・弥生 町式
56	三殿台 306A フ	壺 / 頸部	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：5.1	微砂粒少 / 良好 / 内外 面ともに橙色。	外面は右下がりのハケ目を施 した後に縦方向の棒状ミガキ を加えている。	口辺は逆「ハ」の字状に開く。 内外面に赤色塗採を施す。	久ヶ原・弥生 町式系
57	三殿台 405C フ 29+ フ 37	甕 / 口辺部の約 2/5 を残存（2 片）	口径：20.0 頸径：14.7 胴径：－ 脚径：－ 床径：－ 残高：14.7	微砂粒多、長石・金雲 母を混入 / 良好 / 外面 は暗赤灰色、内面はに ぶい赤褐色。	外面は、ハケ目調整後に波状 文→簾状文の順で施文。内面 は、ハケ目調整後にヘラナデ、 さらに棒状ミガキを加えて る。ハケ目が部分的に残る。	口辺が「く」の字状に外反する。 口頸部文様帯に朝光寺原Ⅰ類の 波状文を上から下へ順次施文 し、下端に簾状文を巡らせ区画 する。簾状文には止めが見られ る。	フ 29 は和島 ほか 1962 報 文挿図 182-22 に比定 / 朝光 寺原式

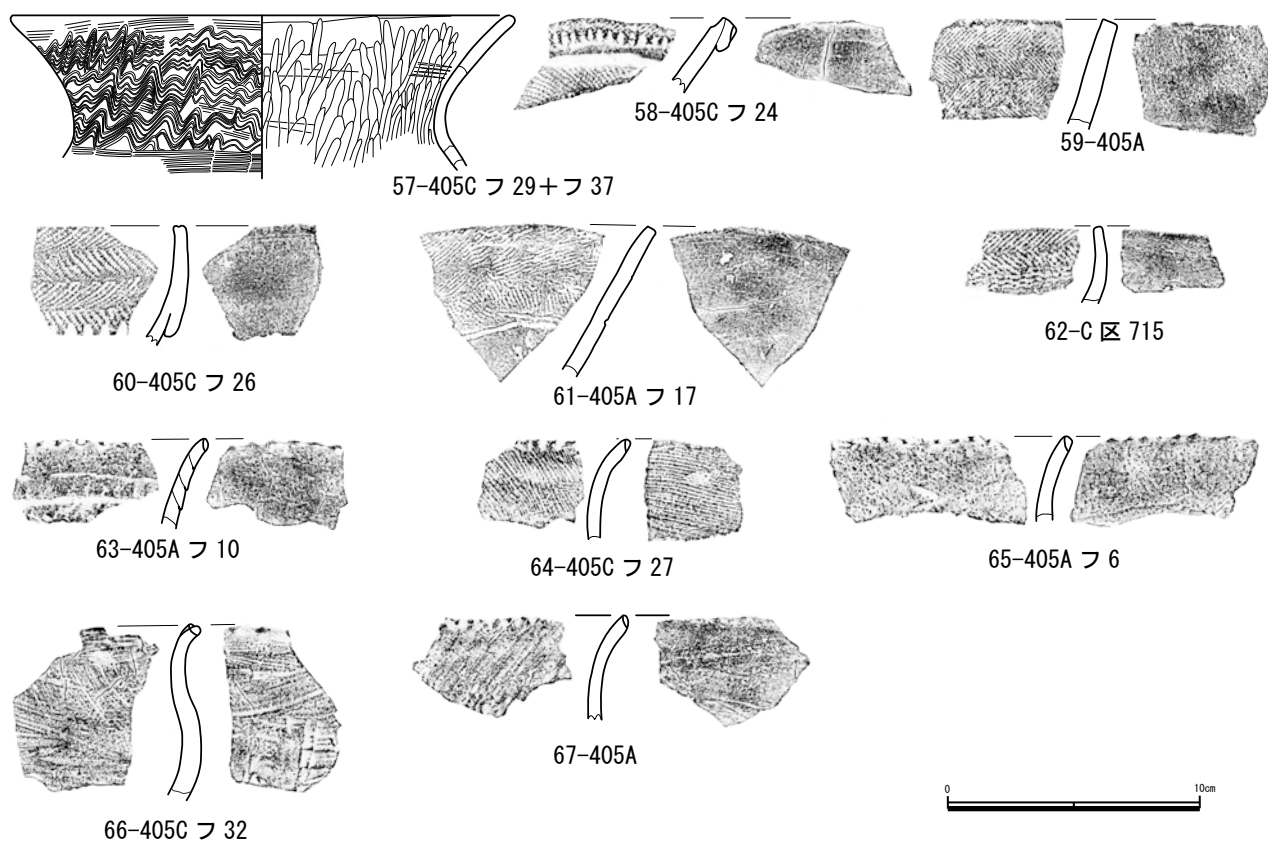
図版 番号	出土遺構	器種 / 部位 / 残存率	法量 (cm)	胎土 / 焼成 / 色調	器面調整	形態 / 文様 / その他の特徴	備 考
58	三殿台 405C フ24	壺 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：8.2	微砂粒多、チャート粒 やや多、/ 良好 / 内外 面とも黄橙色	外面はヘラナデ後に縄文 (LR) を施文。内面は横方向 のヘラナデ後に縦方向の棒状 ミガキが見られる。	大きく開く口縁を呈する。縁に 幅1.2cmの粘土紐を貼り付け、刻 目文を加飾する。口唇部には縄 文 (RL) を施文する / 内面は赤 彩が見られる。	久ヶ原・弥生 町式系
59	三殿台 405A	壺 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：4.1	微砂粒・チャート粒・ 長石粒・白色粒多、/ やや良好 / 外面は明赤 褐色、内面はにぶい橙 色～灰黄褐色。	内面は、横方向のヘラナデ後 にやや斜行する棒状ミガキを 加えている。	外面には横位の羽状縄文を施 す。口唇部には縄文 (RL) を施 文している。	久ヶ原・弥生 町式系
60	三殿台 405C フ26	壺 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：4.8	微砂粒・チャート粒・ 長石粒多、/ やや良好 / 外面は明赤褐色、内 面はにぶい橙色～灰黄 褐色。	内面は、横ナデ後に縦方向の 棒状ミガキを加えている。器 壁内面には、部分的に細かな 剥落が見られる。	疑似複合口縁を呈す。口縁は僅 かに内湾し垂直的に立ち上 がる。2段構成の横位羽状縄文が 巡る。下段のものには縄文原体 末端圧痕 (ループ文) を認める。 縄文帯下端には竹管による連続 刺突文を施す。内面には赤彩あ り。	久ヶ原・弥生 町式系
61	三殿台 405A フ17	鉢 / 同一個体片 2点	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：5.8	微砂粒多、長石粒・白 色粒多 / 良好 / 内外 面とも黄褐色。	外面は、ヘラナデ後にやや斜 行する棒状ミガキを加える。 ミガキは、縄文帯にもランダ ムに所々及んでいる。	逆「ハ」の字状に大きく開く。 口唇直下に幅4cmほどの縄文帯 を有す。その下端に沈線区画し、 以下に赤彩を施す。口唇部には 縄文 (RL) を施文。内面も赤 彩。	久ヶ原・弥生 町式
62	三殿台 C区715	鉢 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：2.9	微砂粒多、長石粒・白 色粒多 / 良好 / 内外 面とも明黄褐色。	内面は、横方向のヘラナデ後 にやや斜行する棒状ミガキを 加えている。	口唇部には縄文 (LR) が施文さ れる。口唇直下に横位の羽状縄 文帯を有しする。その下部には 綾線文が3条巡る。下端には赤 彩が残る。内面の赤彩あり。	久ヶ原・弥生 町式
63	三殿台 405A フ10	甕 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：3.4	砂粒多、長石・輝石・ 石英・白色粒・褐色粒 を混入 / 良好 / 内外 面とも灰黄褐色 / 二次焼 成を受けている。	内外面共にヘラナデが見られ るが、外面は輪積痕を残す。	口縁端部外側に押捺文を連続施 文する。	東京湾東岸系
64	三殿台 405C フ27	甕 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：3.8	長石粒・石英粒・チャ ート粒多 / 良好 / 外面 は橙色、内面はにぶい橙 色～灰褐色。二次焼成 を受け、薄く煤付着。	内外面ともにハケ目調整痕を 止める。	口縁端部は弱く外反する。口唇 部には外端に刻目文を加飾し山 形を呈する。	
65	三殿台 405A フ6	甕 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：3.1	微砂粒多、長石粒・輝 石粒・白色粒多 / 良好 / 外面は黒褐色、内面 はにぶい黄褐色。	一次ハケ目調整痕は不明確だ が、ヘラナデ後に棒状ミガキ を内外面ともに加えている。	口縁端部は弱く外反する。口唇 部には外端に刻目文を加飾して いるため小さな山形を呈する。	
66	三殿台 405C フ32	甕 / 口縁部破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：4.0	微砂粒多、白色粒多、 長石粒・輝石粒・石英 粒を混入 / 良好 / 外面 は黒褐色、内面はにぶ い橙色。	外面は、左下がりのユビナデ 調整が見られる。内面は、一 次ハケ目調整後に横方向のヘ ラナデを施し、さらに縦方向 の棒状ミガキを加えている。	口縁端部は弱く外反する。口唇 部には交互刻目文を加飾する。	
67	三殿台 405A	小形甕 / 口縁部 破片	口径：－ 頸径：－ 胴径：－ 底径：－ 残高：6.7	微砂粒多、白色粒多、 長石粒・輝石粒・石英 粒を混入 / 良好 / 外面 は黒褐色～灰褐色、内 面は黒褐色 / 二次焼成 を受ける。	やや深い条線のハケ目調整痕 を内外面ともに残す。外面口 唇直下は横方向に施し、胴部 は不規則に斜行する。内面口 縁部には横方向のヘラナデを 加えている。	口縁端部は弱く外反する。口唇 部には交互押捺文を加飾する。	

(※注：出土遺構欄の表記は土器の注記に従っている。住居址番号の後ろのアルファベットは重複する住居址を分別するものであり、「フ」は覆土、「ユ」は床面、「ユ上」は床面直上を指すものと思われる。)

である可能性がある。口唇部の刻目文は外向きに施されている。施文の痕跡から器面調整痕と同一の施文具を用いていると考えられる。

第14図54の広口甕は、頸部に簾状文を巡らせ横帯区画し、その上下に波状文を施している。波状文は口縁端部まで及んでいる。

第14図55は複合口縁の甕破片である。56は壺になるとと思われる破片で、頸部に細沈線による横帯区画



第 15 図 三殿台遺跡 405A・C 号住居址出土ほか弥生後期土器実測図

が見られ、内外面に赤色塗彩が施されている。

第 15 図 57 は、口縁が「く」の字状に大きく開く広口甕で、屈曲部に簾状文を巡らせ、口縁部には振幅の大きい波状文を施している。口唇直下には僅かな無文帯を残している。

第 15 図 58 ～ 62 は久ヶ原・弥生町式系の土器片である。59・60・62 には横位羽状縄文が見られ、61 は羽状縄文帯の下端を細沈線で区画し、62 は 3 条の綾線文で横帯区画している。なお、59 には外面に輪積の痕跡を残す僅かな筋が認められる。63 では輪積痕が明瞭である。指による押圧痕が残り僅かな凹凸を止めている。

第 15 図 64 ～ 67 は、ハケ目を残す甕ないし台付甕の口縁部破片である。64・67 は外向きの口唇となっており、口唇部に刻目文を有する。67 には右下がりのユビナデが並行してみられる。

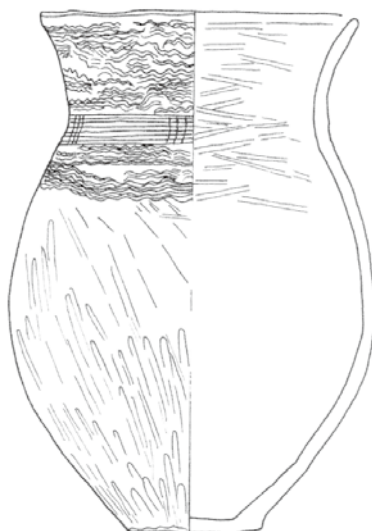
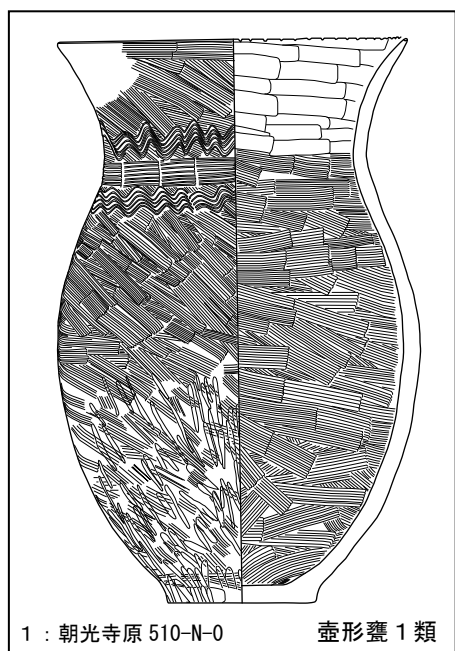
5. 朝光寺原遺跡510号住居址出土土器ほかの様相

一朝光寺原式設定時の基準資料を中心に

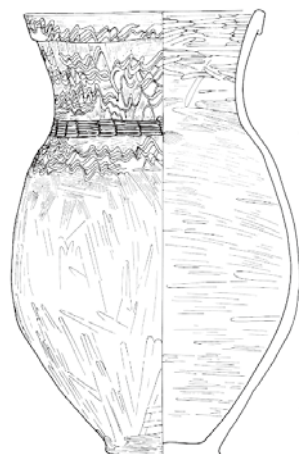
(1) 器種と器形について（第16～30図、写真 1 ～ 13）

朝光寺原式を提唱した報文（岡本・武井 1969）を見ると、B 区 510 号住居址出土土器が基準となっていることが推察される。すでに報告されている土器に、今回の調査で明らかになった未報告の土器を加えると、器種には、甕、高坏、壺、鉢が認められる。甕が圧倒的に多く、大きさも大・中・小とある。

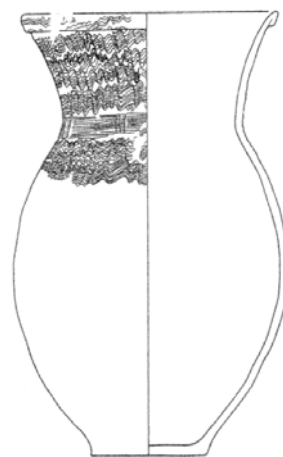
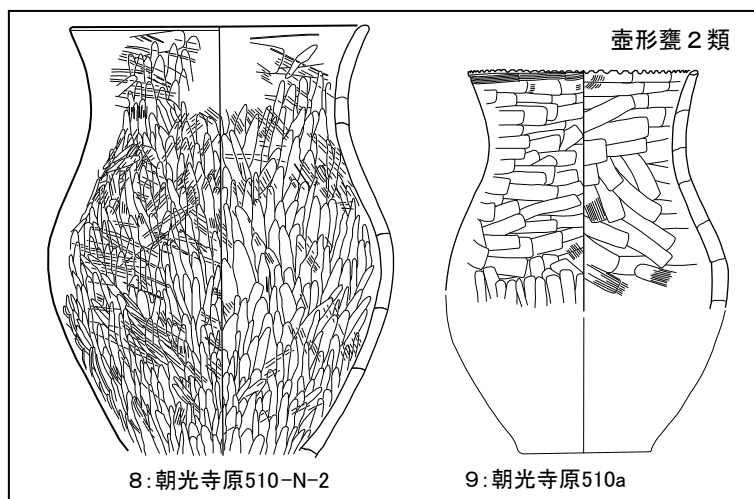
甕形土器については、器形が比較的明確なものを、その違いにより 11 の類型に分類することができる。広口甕を 1 ～ 8 類、壺形甕を 1 ～ 3 類とした。以下にその概要を示す。（なお、転載した実測図は極力初出の報告書によったが、入手不可能だったものについては、『第 9 回 東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生



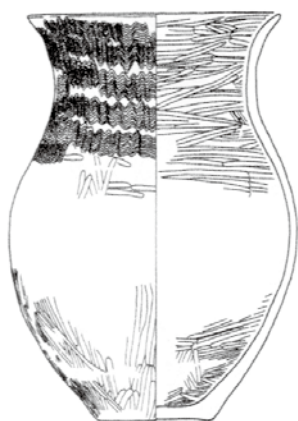
群馬県沼田市上川田
下原Y-4号住居址



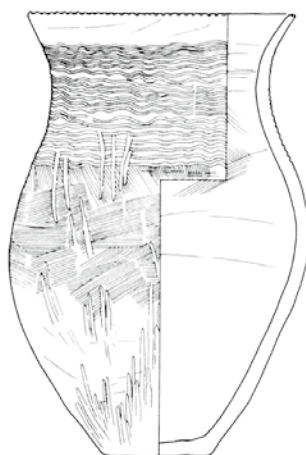
群馬県沼田市上川田町
赤坂遺跡9号住居址



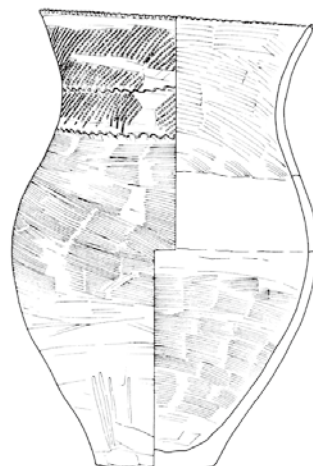
群馬県沼田市町田
町田小沢Ⅱ遺跡1号住居址



群馬県沼田市石墨町新田割
石墨遺跡沼田チェーンベース地点 I
10住居址

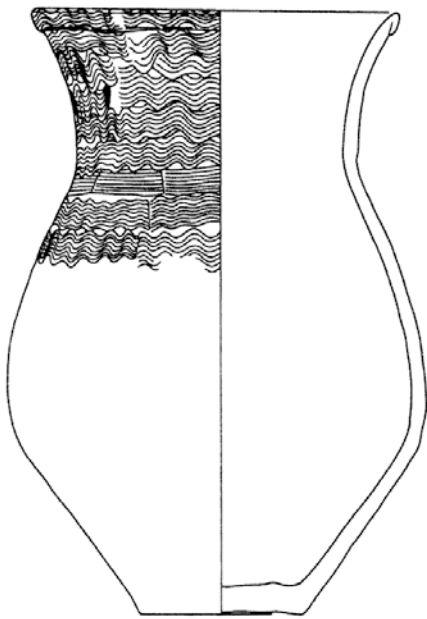


神奈川県横浜市青葉区荏田町
関耕地遺跡11号住居址

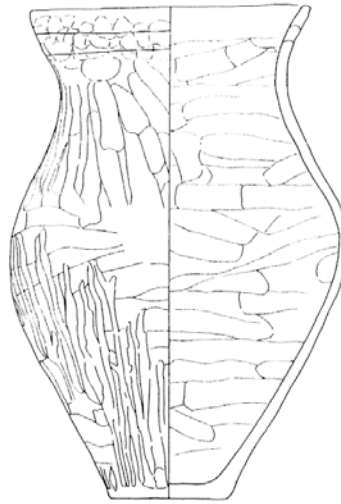


神奈川県横浜市青葉区荏田町
関耕地遺跡11号住居址

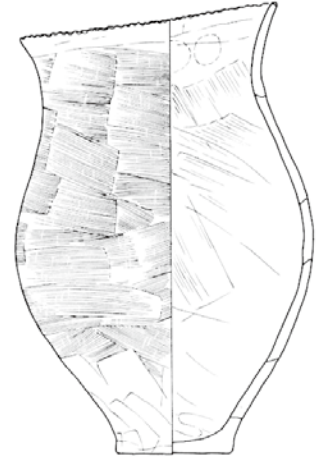
第 16 図 壺形甕 1・2 類の類例



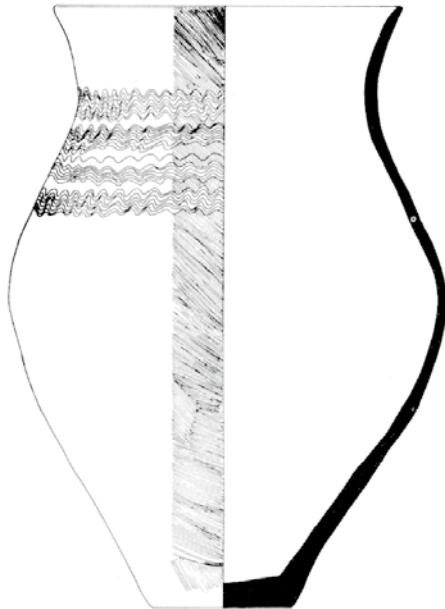
群馬県沼田市戸鹿野町
日影平遺跡11号住居址



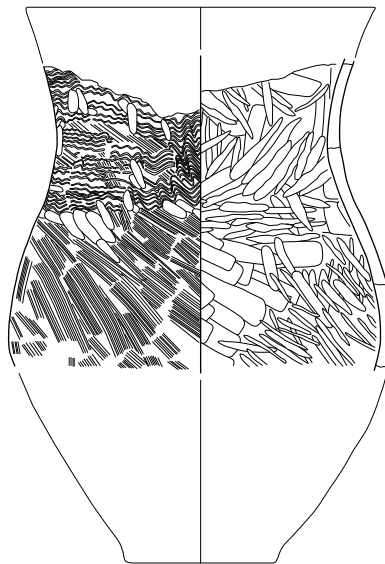
神奈川県横浜青葉区荏田町
釈迦堂遺跡4号



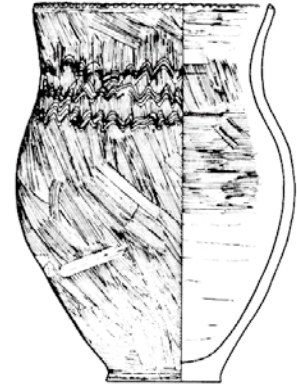
神奈川県横浜市青葉区荏田町
関耕地遺跡65号住



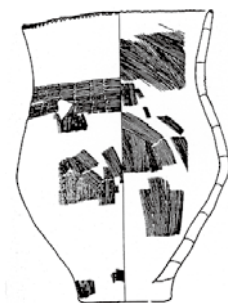
神奈川県青葉区柿の木台
上谷本第二遺跡B I 区-3号住



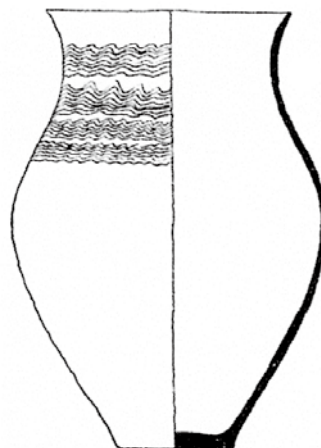
17 : 朝光寺原 510 b



神奈川県横浜市高速2号線
No. 6 遺跡25号住



東京都世田谷区
喜多見陣屋Ⅲ遺跡9号住



横浜市青葉区荏田町長者原遺跡(杉原1939)



神奈川県川崎市
末長遺跡8住

壺形甕 2 類

第 17 図 壺形甕 2 類の類例

時代後期の土器編年〔第1・2分冊〕』2000年、及び『利根沼田地域 弥生時代遺跡総覧』2020掲載の図を再転載した。縮尺は概ね1/4である。）

1)・壺形甕1類の類例と地域分布（第16図上）

細身の甕でやや壺形を呈する。器高に対する口径比は小さく0.64を示す。口径は、胴部最大径に近似するか僅かに小さい。口縁部文様帯となる口唇～頸部最短径の垂直幅員は広口甕8類に次いで大きく、器高全体の20%を占める。床付面直上は小さく括れ、胴・底部は弧状に膨らむ。頸部は括れて外湾を示して口縁端部に至る。510号住N-0（1）が該当する。

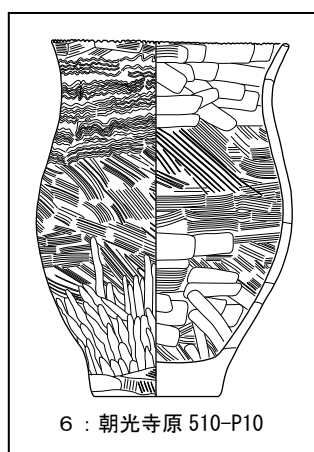
近隣では器形の類例が見いだせず、群馬県沼田市町田小沢Ⅱ遺跡1号住、同市上川田町赤坂遺跡9号住、同市下川田町下原遺跡Y4号住に認めることができる。いずれも樽式土器である。

2)・壺形甕2類の類例と地域分布（第16図下・17図）

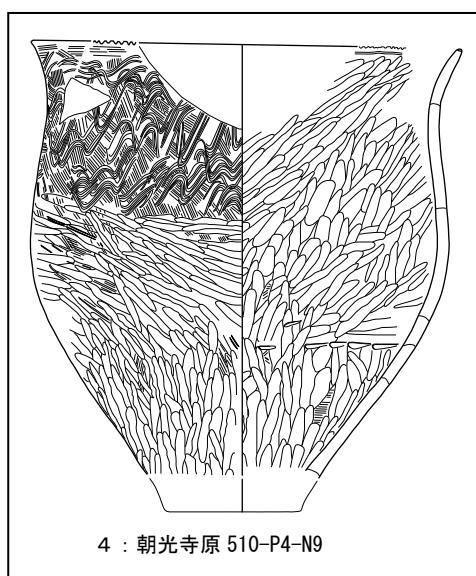
壺形甕1類と同様に細身の器形である。器高に対する口径比は同様だが、口径が胴部最大径より小さく、その比率が86%となる。胴部最大径は、胴部中位よりやや上に位置するものが多い。510a号住N2（8）、（9）が該当する。515b号住出土の甕（17）もこの類型に入ると思われる。

本類型は、近隣地域に多く見られる。横浜市青葉区荏田町関耕地遺跡11号住、同65号住、同町釈迦堂遺跡4号住、同町長者原遺跡（杉原1939b）、同区柿の木台上谷本第二遺跡BⅠ区3号住、横浜市高速2号線No.6遺跡25号住、川崎市末長遺跡8号住などに類例がある。510号住の2例土器は無文であるが、関耕地11号住では口頸部に櫛描波状文を有するものもある。同住では口頸部に斜行縄文を巡らすものもある。下端と中位に結節文を巡らせるものである。久ヶ原・弥生町式の新しい様相を示すものである。

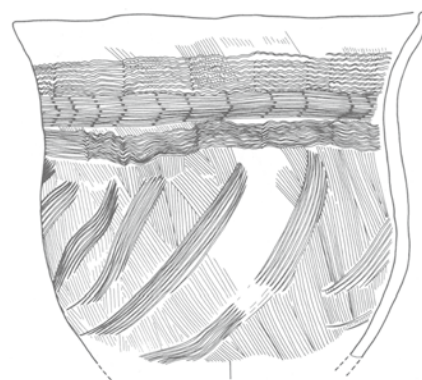
他県では、群馬県沼田市新田割石墨遺跡沼田チェーンベース地点Ⅰ遺跡10号住（樽式）、同市日影平遺跡11号住（樽式）、東京都世田谷区喜多見陣屋Ⅲ遺跡9号住などに類例を認めることができる。釈迦堂4号住例は口縁部外面に輪積痕を残すものであり、吉ヶ谷式の影響を示すものである。また、高速2号線No.6-25号住、喜多見陣屋Ⅲ9号住は、頸部のみに櫛描文（波状文・簾状文）を配しており、朝光寺原式 of 古段階に位置付けられているものである。



壺形甕3類



広口甕1類



神奈川県横浜市青葉区大場町
寺下遺跡 Y12号住居址

第18図 壺形甕3類・広口甕1類の類例

3)・壺形甕3類の類例と地域分布（第18図左）

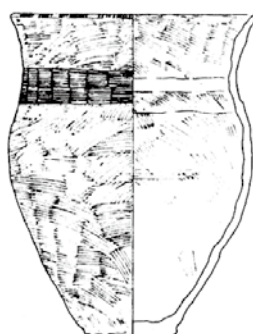
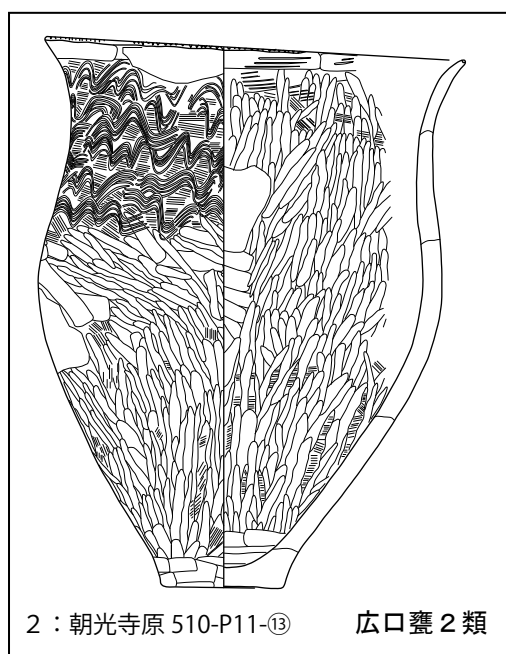
胴・底部は弱く弧状に膨らみ、頸部で小さく窄まり、外反する口縁に至る。胴部中位に最大径を持つ。器高に対する口径比がやや大きく 0.69 を示す。壺形甕 1・2 類に比して、口径に対する底径がやや大きく、口径の 54% を有する。510 号住 P10 (6) が該当する。

近隣や他地域に類例を見出し得ていない。

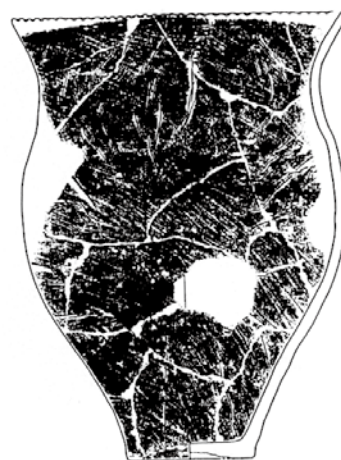
4)・広口甕1類の類例と地域分布（第18図右）

口径が大きく、器高とほぼ同じ (0.95) である。また、口径は底径の約 3.2 倍を示す。少し張った胴部から弱く湾曲する頸部に至り、口縁は小さく外反する。胴部最大径は、中位より僅かに上に位置し、口径より僅かに大きい。510 号住 -P4-N9 (4) が該当する。

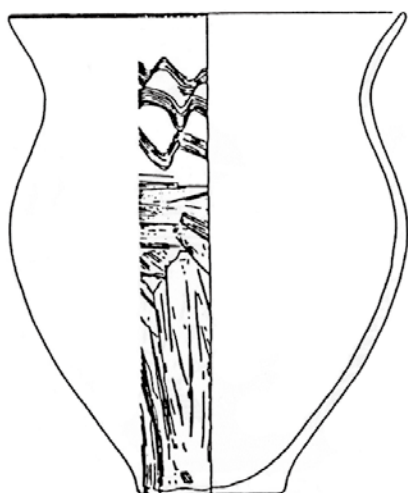
類例は少ないが、横浜市青葉区大場町寺下 YT2 号住出土土器に近似例がある。



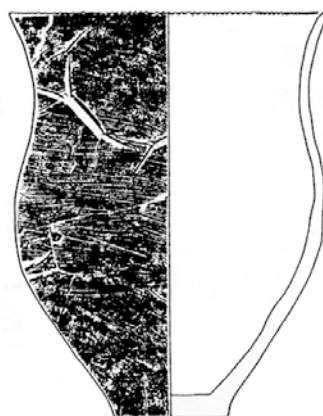
埼玉川越市霞ヶ関遺跡
3次調査区



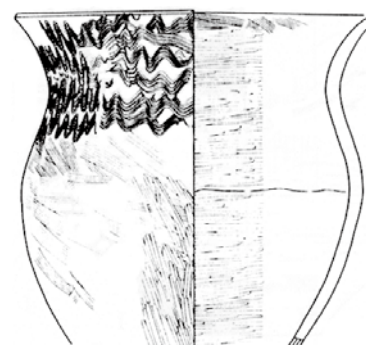
神奈川県横浜市青葉区
赤田地区遺跡群No.10遺跡YT4号住



山梨県韮崎市
中田小学校26号住

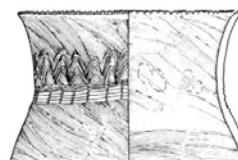
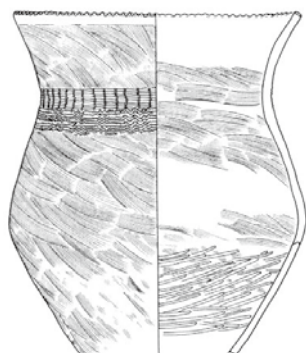
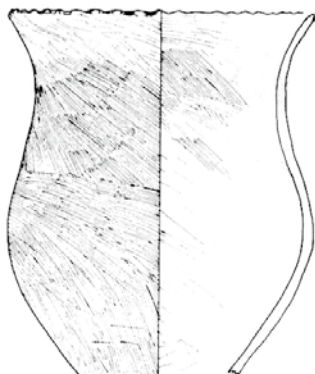
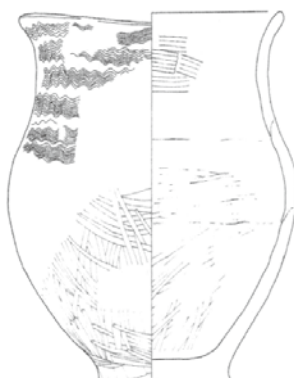
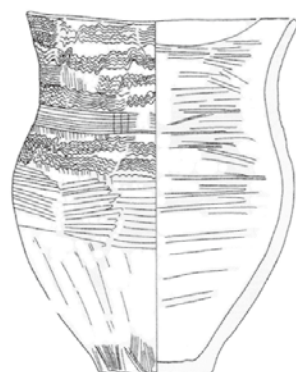
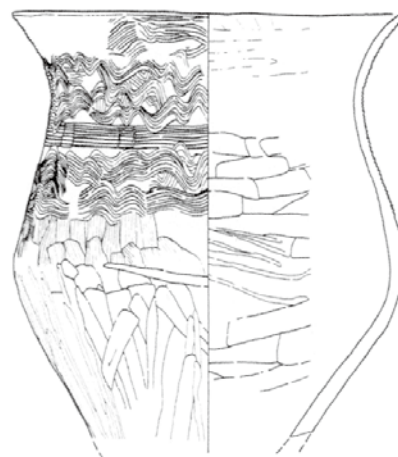
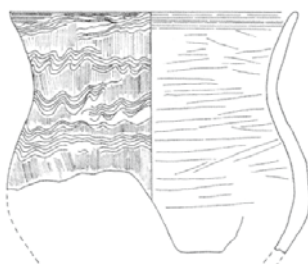
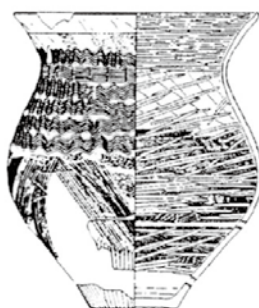
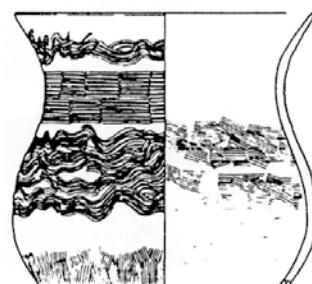
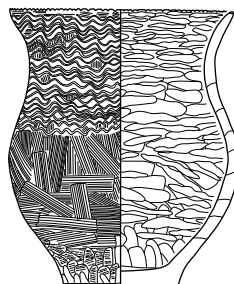
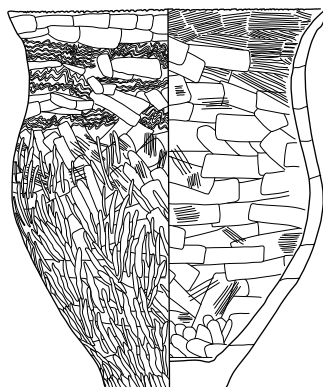
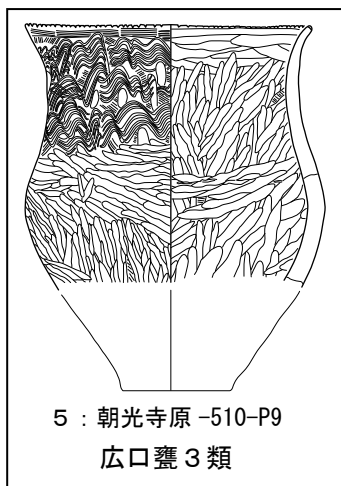


神奈川県横浜市青葉区
赤田地区遺跡群No.10遺跡YT5号住

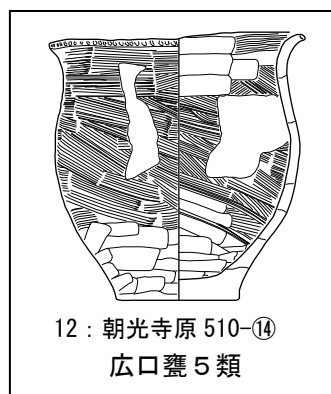


神奈川県横浜市青葉区奈良町
受地だいやま遺跡16号住

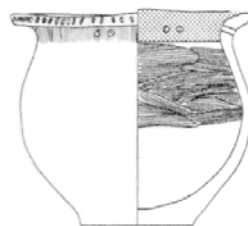
第 19 図 広口甕 2 類の類例



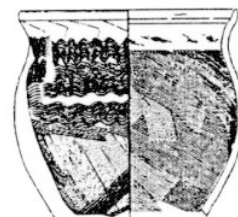
第 20 図 広口甕3類の類例



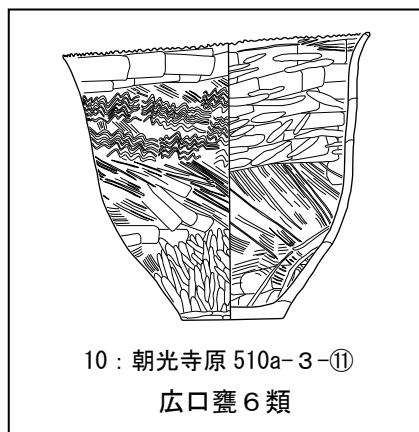
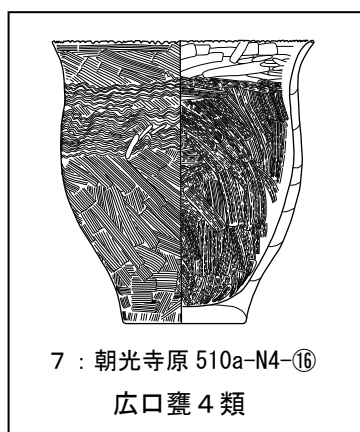
神奈川県横浜市港北区
新羽大竹遺跡32号住



群馬県沼田市石墨町
石墨遺跡B区11号住



埼玉県本庄市児玉町
真鏡寺後遺跡C地点33号住



第 21 図 広口甕 4 ～ 6 類の類例

5) ・広口甕 2 類の類例と地域分布 (第 19 図)

器形は広口甕 1 類にやや類するが、全体的に細身である。口径は、器高に対して 0.79 と小さくなり、胴部最大径とほぼ同じ数値を示す。底径の約 2.8 倍となる。また、口縁部の垂直幅（口唇～頸部最短径まで）が広口甕 1 類より大きくなり器高に対して 16% を占める。510 号住 -P11 (2) が該当する。

類似する例は、横浜市青葉区赤田地区遺跡群 No. 10 遺跡 YT4 号住・YT5 号住、同奈良町受地だいやま遺跡 16 号住などに見られるほか、埼玉県川越市霞ヶ関遺跡（3 次調査）、群馬県沼田市岡谷町鎌倉遺跡 7 号住、山梨県韮崎市中田小学校遺跡 26 号住など広範囲に近似する例を認める。霞ヶ関例はやや古い様相を示すものである。

6) ・広口甕 3 類の類例と地域分布 (第 20 図)

中型の甕がほとんどである。器高に対する口径の比率は広口甕 2 類と同じだが、底径に対する口径の比率が、2 類は約 2.8 倍であるのに対し、3 類は約 2.5 倍を示しており、口径比が小さい。器高が低く寸詰まり感・ずんぐり感のある器形を呈している。朝光寺原遺跡では 510 号住 -P9 (5)、C 区不明遺構 (21)、107c-P5・P9 (20) が該当する。

横浜市高速 2 号線 No. 6 - 3 号住、川崎市長尾台 14 号住にやや類する例を見るが、近隣他遺跡においてはほとんど一致する例を見出せない。しかし、広域で見るとやや近い類例を見出すことができる。利根川上流にあたる群馬県沼田市戸鹿野町日影平遺跡 4 号住、同市岡谷町鎌倉遺跡 7 号住、同市町田町戸神諏訪Ⅲ遺跡 79 号住、同市戸神諏訪遺跡 78 号住、同市橋場遺跡 Y2 号住、埼玉県本庄市真鏡寺後遺跡 C33 号住、山梨県

中球磨郡敷島町金の尾遺跡 36 号住などである。近隣に同じ類例がほとんどないということは本類型の特質を示すものである。換言すれば、広口甕 3 類は本遺跡特有の器形として捉えることができる。

7)・広口甕4類の類例と地域分布（第21図下）

小型の甕で、広口甕 2 類の底部を少し詰めたような器形である。口径は、器高の 92% で、底径の約 2 倍を示す。3 類よりいずれも小さい数値を示す。本遺跡 510 号住（7）が該当する。

他の本遺跡出土土器に良好な類例を見出せない。近隣他地域においても同様である。

8)・広口甕5類の類例と地域分布（第21図上）

胴部がやや張り、少し窄まった頸部から湾曲して外反する。口唇部は外側を向くのが特徴である。口径は、胴部最大径より僅かに上回る。口径は、器高の 98% を示す。本遺跡 510 号住（12）が該当する。

酷似する類例は見出せていないが、敢えて、やや類するものをあげれば、横浜市港北区新羽大竹遺跡 32 号住（前野町式期）、埼玉県本庄市真鏡寺裏遺跡 C 地点 33 号住、群馬県沼田市石墨町石墨遺跡 B 区 11 号住などを見出すことができる。真鏡寺裏遺跡 C 地点 33 号住例は、頸部から胴部にかけて振幅のやや大きい波状文を巡らせている。新羽大竹 32 号住例（報文では広口壺としている）は、胴部上半に縄文帯を 2 段巡らせ、3 列の結節縄文で横帯区画するもので、口縁上端内側と口唇部に縄文を施しており、前野町期とされる住居址の出土である（岡本孝 1980）。

9)・広口甕6類の類例と地域分布（第21図下）

小型甕で、広口甕 1 類を小型化したような器形である。胴部最大径より頸部最短径の方が大きく、さらに口径が上回っており、口径が最大径となる。口径は器高の 98% を有する。また、底径に対する口径は約 3.1 倍である。510 号住 a3 ⑩（10）が該当する。

本遺跡の他の土器に良好な類例を見出せない。近隣他地域においても同様である。広口甕 1 類の範疇に含めることも可能かもしれないが、本稿では別類としておく。

10)・広口甕7類の類例と地域分布（第22図）

小型の甕で、コップ形を呈する器形である。底部から徐々に開いて立ち上がり、僅かに窄まって頸部を成し、口縁は外反する。口縁端部が弱く内湾するものもある。口径は、底径の約 2 倍を示す。器高に対する口径比は 88% である。本遺跡では、510 号住 -P7-N11（11）、510 号住 -報文 22 図 7 が該当する。

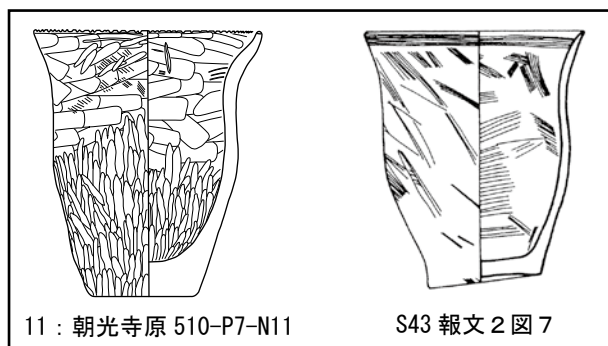
近隣では、横浜市青葉区赤田地区遺跡群 No.1 遺跡 YT2 号住、同区柿の木台上谷本第二遺跡 B I 区 20 号住、同区荏田町関耕地遺跡 11・40・42・46 号住、同区荏田町小黑谷遺跡 II 地区 12 号住、同区寺下遺跡 YT-2 号住、川崎市多摩区長尾 6 丁目長尾台北遺跡 5 号住例をあげることができる。赤田地区 No.1 遺跡 YT-2 号住と上谷本第二 B I 区 12 号住、関耕地 46 号住例はハケ甕であり、510 号住例と共通しているが、口唇部に刻み目を有している点で相違もある。また、小黑谷遺跡 II 地区 12 号住、関耕地 11 号住、同 40 号住は、頸部文様帯に櫛描波状文を 2～4 段巡らしているものである。朝光寺原式では、やや古い様相として捉えられるものである。関耕地 46 号住では、前述のハケ甕が覆土から、頸部に櫛描波状文をもつものが下層から出土のである（田村ほか 1997）。共伴の可能性が高く、同時期に 2 様が存在することを示唆している。

他県では、埼玉県本庄市真鏡寺後遺跡 C 地点 33 号住、群馬県沼田市戸鹿野町日影平環濠、千葉県佐倉市江原台遺跡 Y8 号住などに類例が求められる。

この類型は近隣に類似例を多く見出せるが、ハケ甕の方がより 510 号住との類似性が強い。

11)・広口甕8類の類例と地域分布（第23図）

口径と胴部最大幅がほぼ同じで、口縁部文様帯垂直幅が大きく、口唇～頸部最短径までの垂直幅員は、器



広口甕 7 類



横浜市青葉区柿の木台
上谷本第二遺跡
B I 区20号住居址



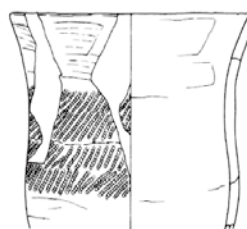
群馬県沼田市戸鹿野町
日影平遺跡環濠



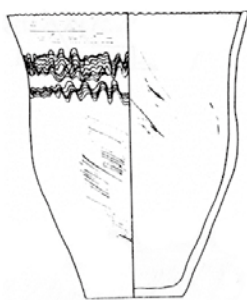
横浜市青葉区赤田地区遺跡群
No.1遺跡YT-2号住居址



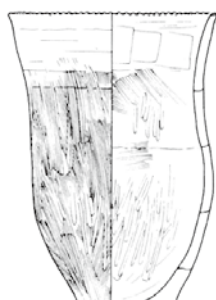
横浜市青葉区赤田地区遺跡群
No.1遺跡YT-2号住居址



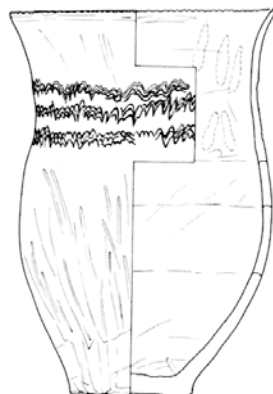
関耕地遺跡42号住居址



横浜市青葉区荏田町
小黑谷遺跡Ⅱ地区12号住



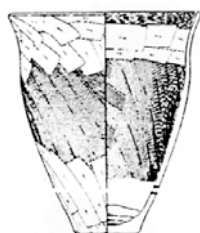
横浜市青葉区荏田町
関耕地遺跡46号住



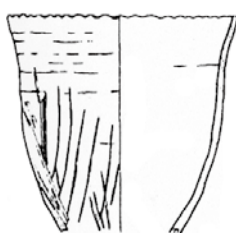
横浜市青葉区荏田町
関耕地遺跡11号住



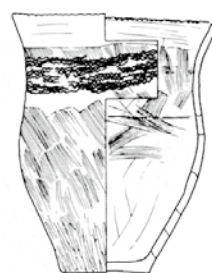
横浜市青葉区大場町
寺下遺跡YT-2号住



埼玉県本庄市真鏡寺後遺跡
C地点33号住



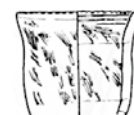
千葉県佐倉市
江原台Y8号住



関耕地遺跡40号住



関耕地遺跡46号住

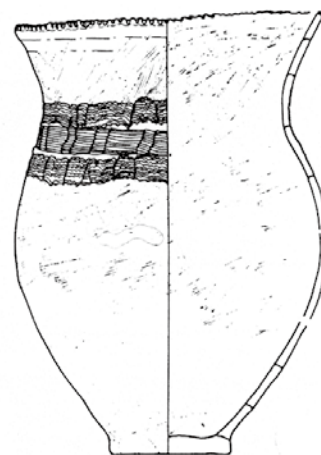
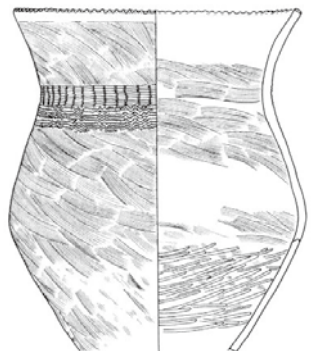
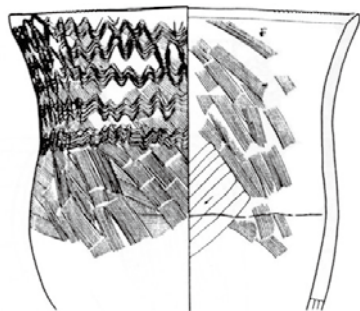
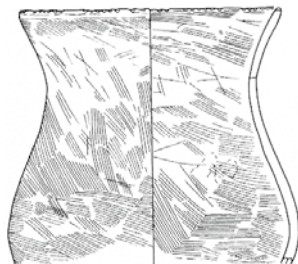
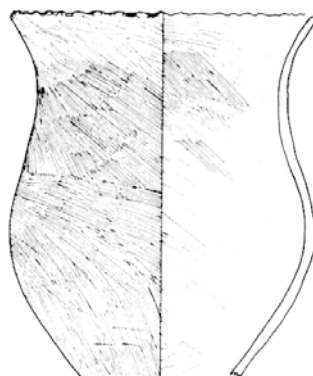
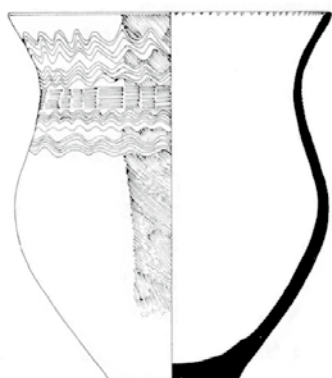
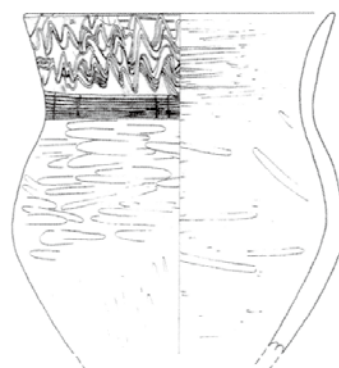
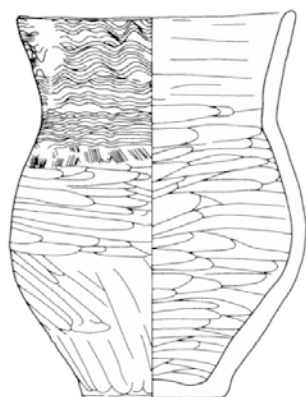
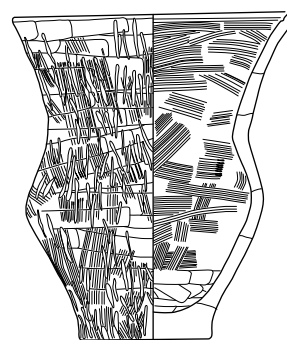
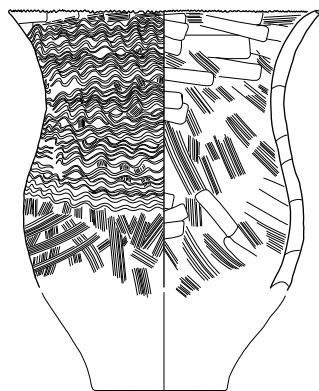
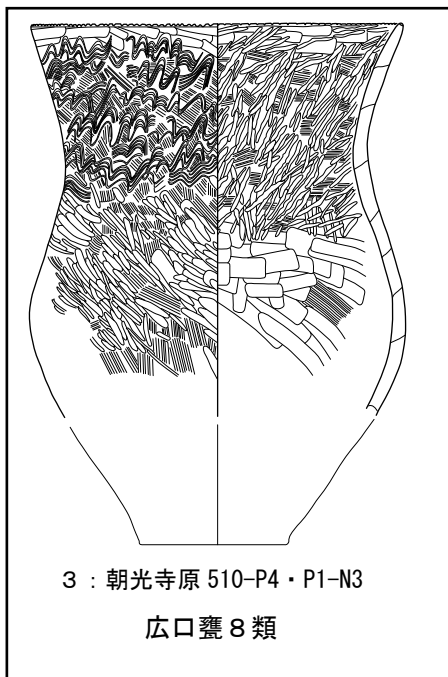


川崎市多摩区長尾六丁目
長尾台北遺跡5号住

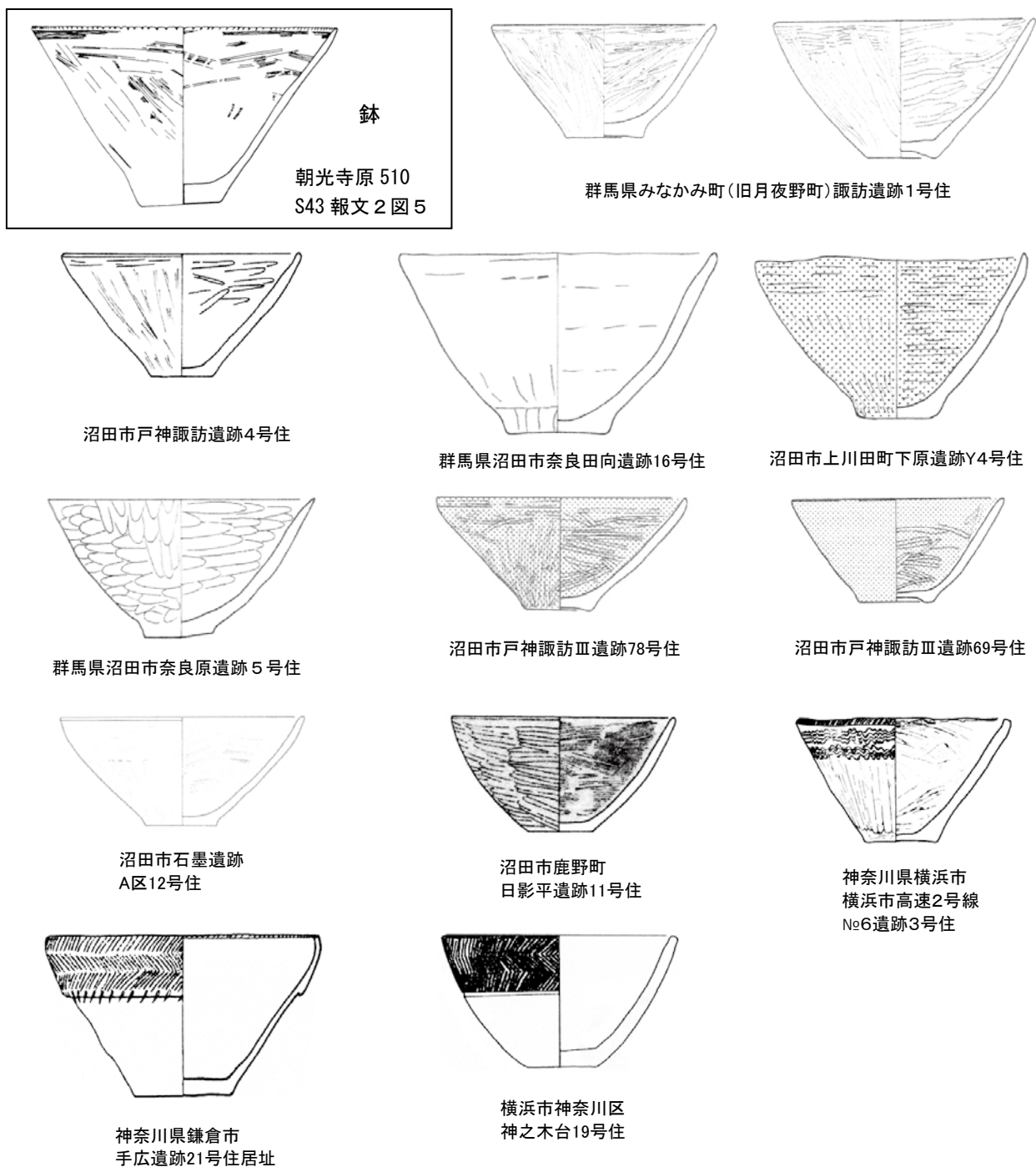
第 22 図 広口甕 7 類の類例

高の 28% を占めている。他の類型に比して最も大きい数値を示す。また、胴部最大径は中位より下に位置している。本遺跡 510 号住 P4・P1-N3 (3) が該当する。本遺跡では、他に 237 号住 No.Ⅰ (20)、515 号住出口 Pit (23) の土器が該当する。本例では口頸部文様帯に櫛描波状文を上端まで巡らせている。

近隣では、横浜市青葉区奈良町受地だいやま遺跡 16 号住、同区柿の木台上谷本第二遺跡 A 区 47 号住、



第 23 図 広口甕 8 類の類例



第 24 図 鉢の類例

横浜市高速 2 号線 No. 6 遺跡 3 号住、川崎市末長遺跡 8 号住、同 14 号住、東京都世田谷区喜多見陣屋Ⅲ遺跡 158 号住などに類例があり、県外では、群馬県沼田市日影平遺跡環濠、同市奈良田向遺跡 16 号住に同類を見出すことができる。高速 2 号線 No. 6 遺跡 3 号住と末長遺跡 8 号住はハケ甕である。また、末長遺跡 8 号住と喜多見陣屋Ⅲ遺跡 158 号住は頸部のみに櫛描波状文・簾状文を有するもので、朝光寺原式の古い様相を示している。前者は、胴がやや「く」の字状に張っている点も古相を示す。

12)・鉢の類例と地域分布（第24図）

底部から逆「ハ」の字状に大きく開く器形である。仰角 57～59 度で直線的に開いている。後期の甑に多

く見られる器形でもある。口径は器高よりも大きく 1.76 を示し、底径と比較すると 2.7 倍となるものである。口唇部に刻目文を有している。無文の鉢で、ハケ目調整痕を止めている。510 号住 S43 報文の 2 図 -5 が該当する。

近隣では好類例を見出せなかったが、近似するものとして、口縁部文様帯に羽状縄文を巡らせる例を、横浜市神奈川区神之木台遺跡 19 号住、鎌倉市手広遺跡 21 号住に認めることができる。前者は複合口縁状を呈し下端に段を有し、後者は下端を沈線区画するものである。高速 2 号線 No. 6 遺跡 3 号住例では、口縁部に櫛描波状文を巡らせ、外傾する口唇部には斜行縄文を施している。

他県では、群馬県沼田地域などに多く見られ、みなかみ町（旧月夜野町）諏訪遺跡 1 号住、沼田市奈良田向遺跡 16 号遺跡、同市上川田町下原遺跡 Y4 号住、同市戸神諏訪Ⅲ遺跡 69 号住、同市石墨町石墨遺跡 A 区 12 号住に類例を見出すことができる。これらはいずれも無文である。下原遺跡 Y4 号住、戸神諏訪Ⅲ遺跡 78・69 号住例は内外面に赤彩を施しており、祭器の機能を有していた可能性があるものである。

13)・朝光寺原遺跡 510 号住居址におけるその他の器種

上記のように、510 号住居址出土の甕には 11 類を認めることができる。これらは、櫛描波状文系が主体をなし、無文系土器が若干含まれるものである。他に 510 号住においては、羽状縄文・斜行縄文を有する久ヶ原・弥生町系の土器が共伴している。

前述以外の土器として、第 9 図 13 に見る高坏がある。坏部は逆「ハ」の字状に大きく開き、中位から口唇にかけて弱く内湾するものである。口縁部文様帯下端を沈線で区画し、羽状縄文を充填させている。口唇部はほぼ水平で斜行縄文を施している。久ヶ原・弥生町式系のものとして捉えられる。類例は関耕地遺跡 49 号住居址出土の高坏（鉢）に見ることができる。

第 9 図 14 の P1-N1 は、大形壺となる頸部下半の大形破片である。内外面に棒状ミガキ後に赤彩が施されている。器形全容は不明である。

既公表資料（第 10 図）には、S43-2 図 -1 のように口縁端部が水平近くまで大きく開き、口唇部が外を向く大型壺がある。端部は複合口縁を呈し、三輪玉状の棒状貼付文（3 条 1 組）を加飾している。貼付文間には斜行縄文を施している。

また、S43-2 図 -10 のように、胴部から内屈し口縁端部に至る鉢もある。疑似複合口縁を呈し、口唇部は内傾しているものである。口縁部文様帯には横位羽状縄文を施文し、下端を沈線文で区画している。

これら縄文系の土器は、久ヶ原・弥生町式系の土器として捉えられる。

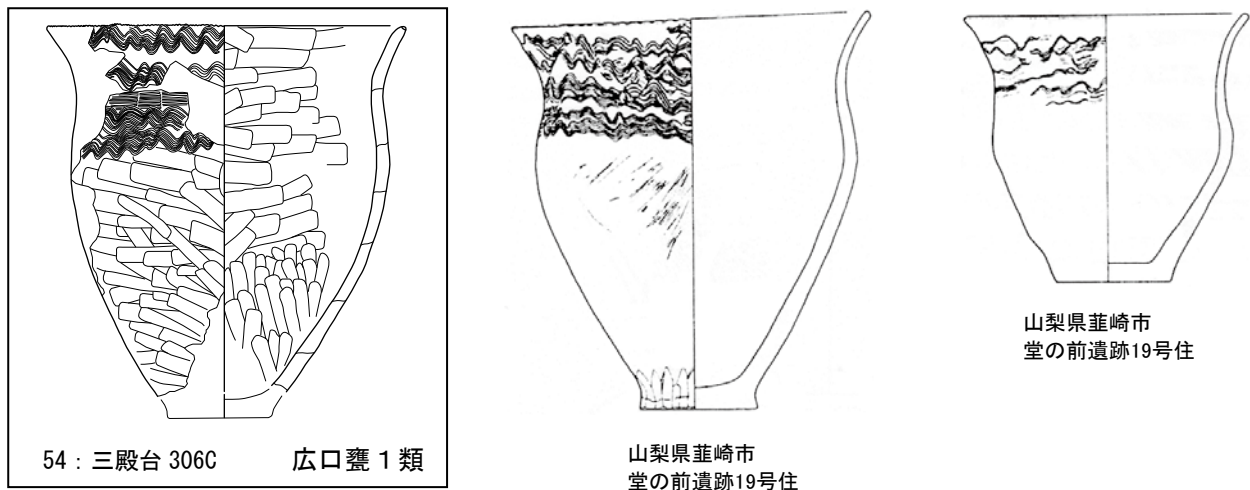
14)・朝光寺原遺跡における 510 号住居址出土以外の器種と器形（写真 9～11）

第 12 図 28 は中型の長頸壺である。同一個体と判断し器形復元したものである。撫肩で胴が張り、下膨れの器形を示す。口縁部は頸部屈曲部から垂直的に立ち上がり、外反して口唇に至る。複合口縁部と、頸部から胴部中位に羽状縄文帯を配している。後者は羽状縄文が横位ではなく、縦区画沈線を境にして縦位羽状縄文を構成するものである。この縦区画沈線文は、頸部屈曲部まで伸び横走区画沈線文と接すると思われるが、破片であるため部位が合わず、実測図に表現できなかった。羽状縄文帯の下端は横走沈線文で区画している。

第 11 図 24 は長頸壺となる。口頸部が長く垂直的に立ち上がるもので、胴底部は押し潰された球状（算盤玉状）を呈すると思われる。尾張・山中式中期土器の影響を強く受けた土器と考えられる。

第 12 図 29 は短頸小型壺である。底径が広く安定した器形であり、胴部は球状に張るが若干下膨れ感がある。頸部は「く」の字状に屈曲し大きく外反する。口縁は複合口縁を呈する。

第 12 図 30 は高坏であるが、坏部上半が欠失しており、13 と同様に羽状縄文を有するものになるかは不



第 25 図 三殿台遺跡 306C 号住居址出土広口甕 1 類の類例

明である。

15)・三殿台遺跡出土の弥生後期土器の器種と器形（第25～30図、写真4下）

第 14 図 54 は、広口甕 7 類の器形の横幅を広げたような器形であり、口径は器高に近似する数値 (0.95) を示し、胴部最大径より大きい (1.13) ものである。胴部最大径は中位よりやや上位 (0.64) にある。頸部は僅かに窄まり外湾を示し、口縁は直線的に開く。三殿台遺跡広口甕 1 類とする。頸部に簾状文を巡らせ、その上下に各 2 段の波状文を施文している。波状文は振幅が大きく、ピッチも比較的大きい。器壁外面はミガキに近いヘラナデ仕上げである。

類例は近隣には見られず、山梨県韮崎市堂の前遺跡 19 号住居址出土土器に類するものを認めることができる。これらは頸部に簾状文による横帯区画を有さないものであり、口縁部文様帯に振幅の大きい乱れた波状文を 4～5 段に亘り巡らせているものである。朝光寺原式では新しい段階として捉えられる要素を示している。従来、朝光寺原式の成立について、甲府盆地の影響を受けているとする捉え方もあるが、少なくとも、三殿台遺跡 54 の広口甕を製作した段階において、何らかの交流があったことは想察できるのであろう。

第 14 図 52 は台付甕であるが、底部に丸味をもつのが特徴である。頸部最短径の位置が口唇近くにあり、口縁部垂直幅が短い。口縁は弱く外反して開く。口唇部はやや外を向き、木端状工具により刻目文を施している。ハケ目痕仕上げの甕であり、口縁上端と胴部中位は横方向、他は右下がりのハケ目痕となっている。

類例は、厚木市子ノ神遺跡 2 号住、横浜市青葉区関耕地遺跡 30 号住、同 66 号住、横浜市北区寺谷戸遺跡 38 号住、綾瀬市落合 (No. 54) 遺跡表採、静岡県榛原郡川根町天王山遺跡 2 号住、静岡市瀬名遺跡 2 号住、静岡県沼津市北神馬土手北遺跡 SB413A 号住に認めることができる。これらは口唇部が外を向き外傾している共通点を持っている。このような特徴から、52 の台付甕は駿河地方の影響を受けたと考えられるが、当該地において主体的な器形ではなく、在地化の問題も含め今後の検討を要する。

第 13 図 45 は、有段高坏である。坏底部は大きく開いた逆「ハ」の字状を呈して「く」の字状に内屈して立ち上がる。屈曲部には稜線をもち、外面に波状文を有する体部は弱く開いている。

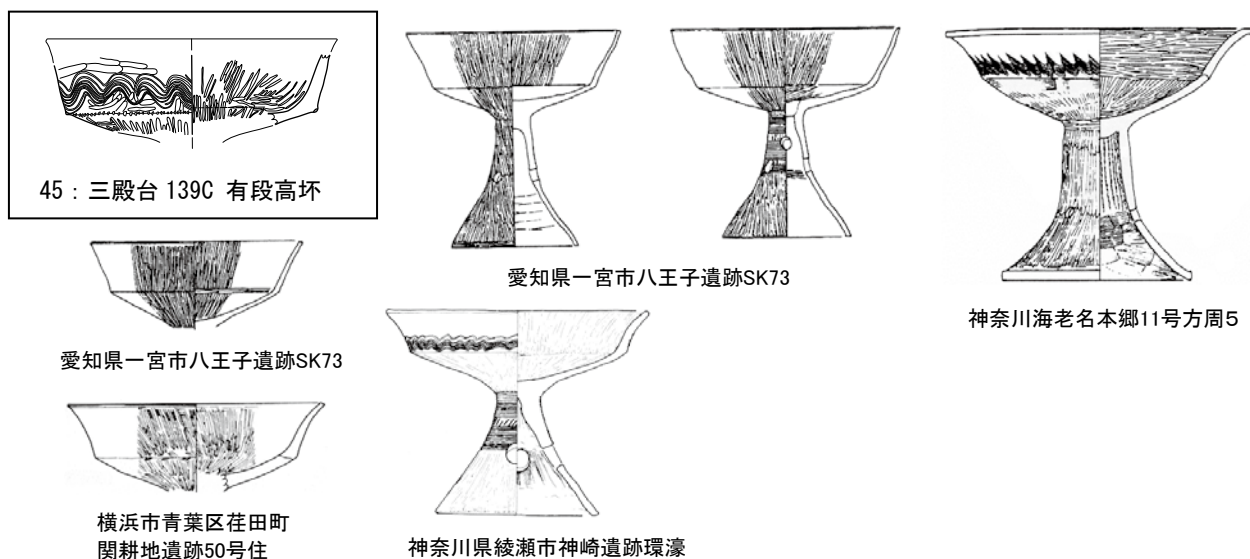
類例は、無文であるが近隣の関耕地遺跡 50 号住居址に類似する器形を見出すことができる。山中式後期の 5 段階に比定できるものであろう。神奈川県海老名市本郷遺跡 11 号方形周溝墓、同県綾瀬市神崎遺跡環濠には、体部下位に波状文を有するものを見るが、体部の開き方が三殿台遺跡 45 よりやや大きくなっており、僅かに外反もしている。有段高坏に波状文を巡らせる手法は、山中式の 2～4 段階に見られるが、本



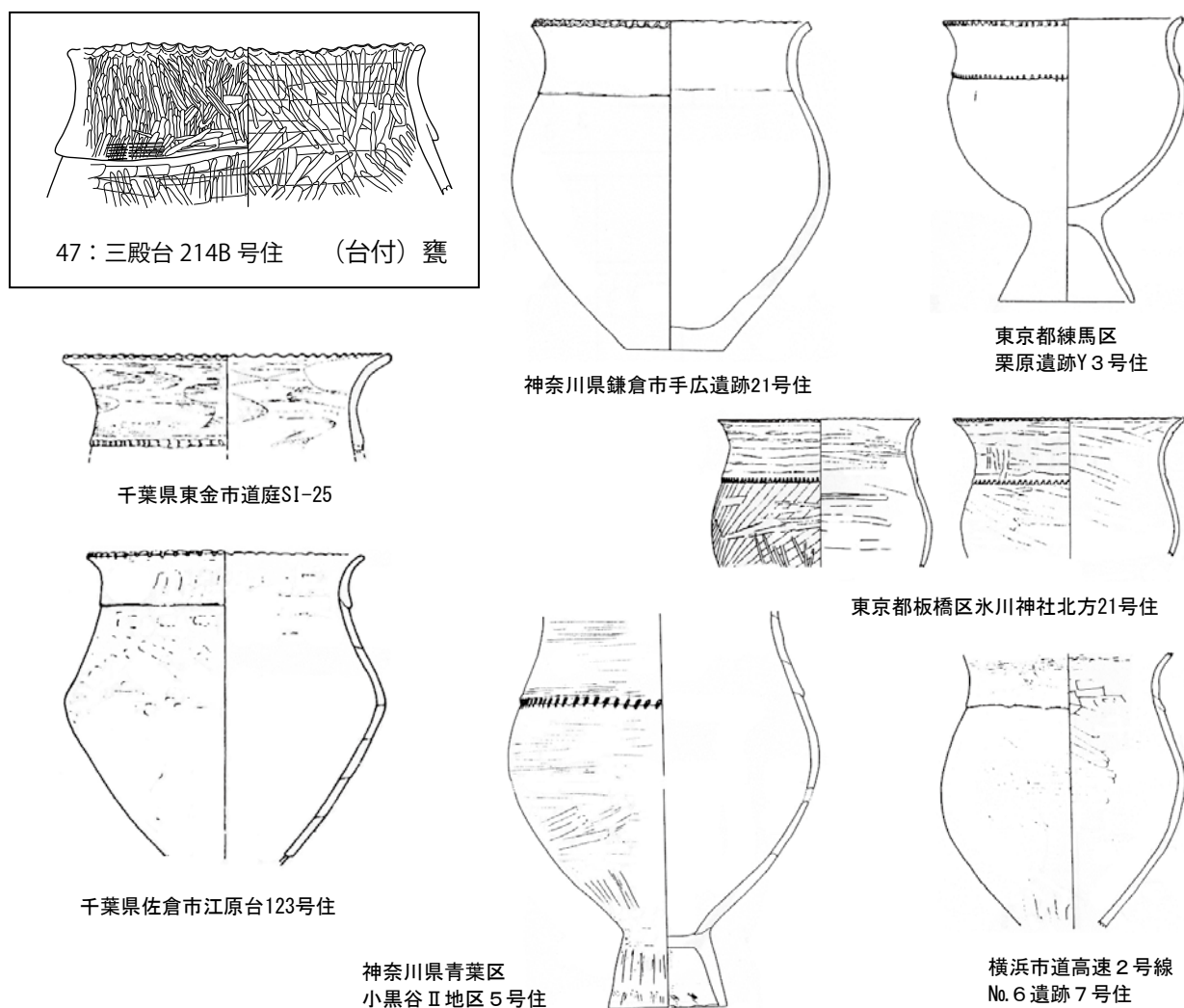
第 26 図 三殿台遺跡 304A 号住居址出土台付甕の類例

郷遺跡例・神崎遺跡例は、坏部の深さなどから山中式の4段階に比定されるものであろう。また県外では、体部の開き方が類似する例（無文）を愛知県一宮市八王子遺跡 SK73に見出すことができる。坏部の器形は近似するものである。廻間Ⅰ式期0段階に位置付けられているものである。このように、45の有段高坏は、静岡県の山中式や愛知県の廻間式の影響を受けて存在していることが看取できる。また、施文された波状文は、後述する三殿台Ⅰb類に当たるものであり、在地製作の土器であることが考えられる。

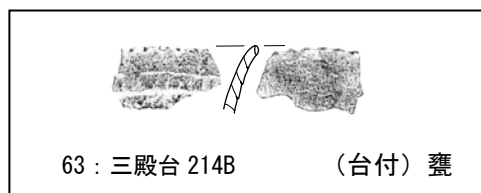
三殿台遺跡 223 号住居址出土の第 14 図 51（無文の小型台付甕）は、甕部器高に対する口径比率は約



第 27 図 三殿台遺跡 139C 号住居址出土有段高坏の類例



第 28 図 三殿台遺跡 214B 号住居址出土(台付)甕の類例 (1)

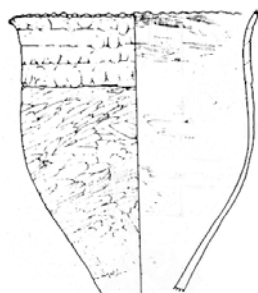


63 : 三殿台 214B

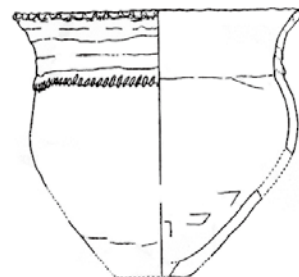
(台付) 甕



千葉県袖ヶ浦市文脇遺跡213



神奈川県横浜市
横浜市高速2号線No.6遺跡7号住



千葉縣市原市唐崎遺跡1号住

第29図 三殿台遺跡214B号住居址出土(台付)甕の類例(2)

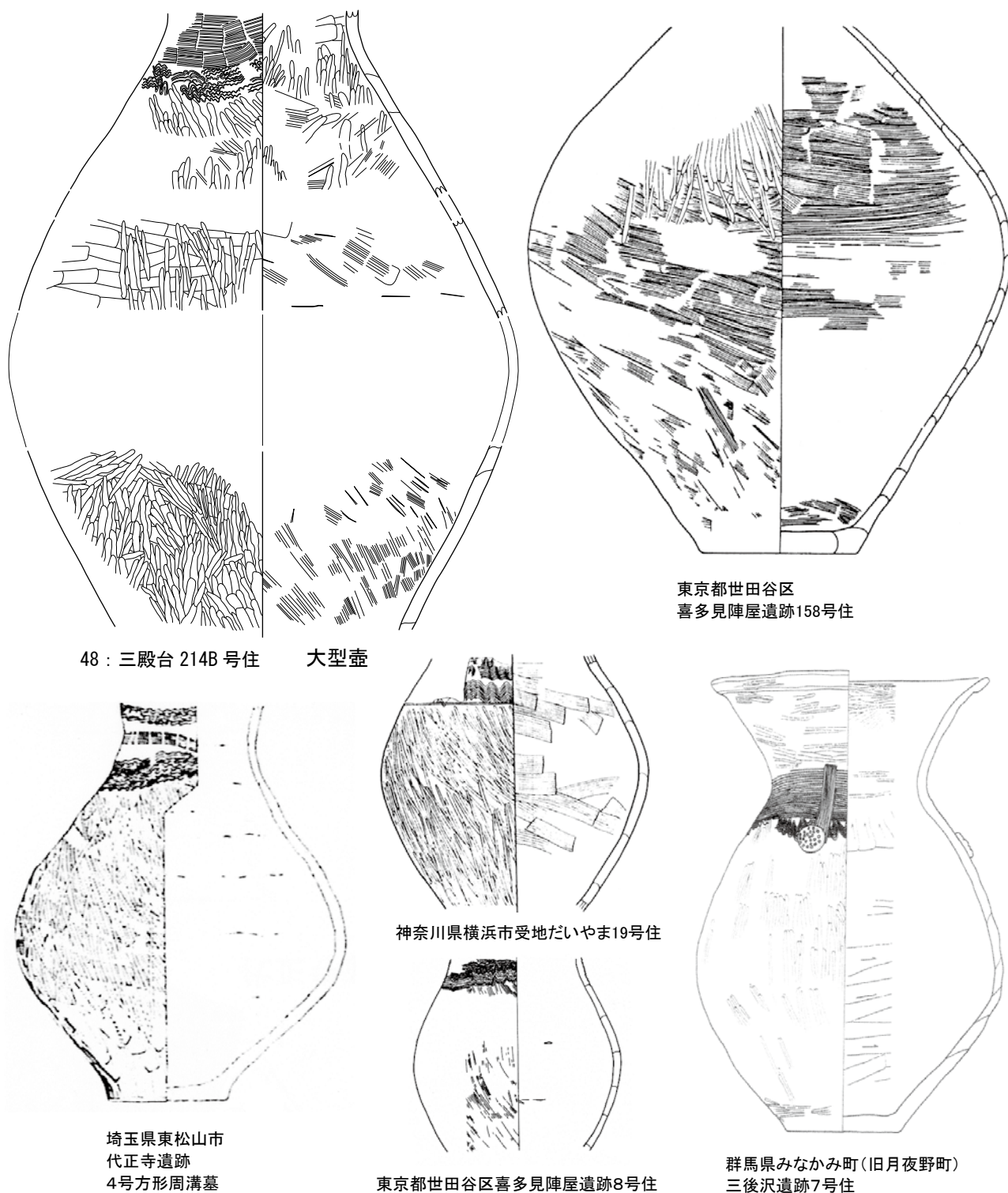
88%であり、やや細身の器形である。胴部最大径は、甕部中位にあるが球状の張りは示さず、甕部器高の86%に過ぎない。胴部最大径より口径は小さく93%を示す。口頸部がやや長く口縁は短く外反している。「コ」の字両端を広げたような形状の曲線を示している。口唇部には、刻目文を巡らせている。施文具が口唇部器壁内面（内傾面）に並行するように当てられており、外側より内側に多くの施文痕が残されている。田村良照氏によれば、このような施文手法は、朝光寺原式の甕に多く見られる特徴の一つであるという。近隣や他県にも類例を見出すことができなかったが、朝光寺原式土器文化圏の中で成立したものであると捉えることができよう。朝光寺原式の台付甕については存在しないと言われてき。しかし、横浜市大熊宮原遺跡出土の櫛描文（波状文・簾状文）の有る台付甕を再確認しており（写真14、坂本・宮田2021）、本例は口頸部の形状に宮原遺跡例と類似性を認めることができる。いずれにしても極めて少ない台付甕の例となる。

三殿台遺跡214B住居址出土の甕（台付甕）第13図47は、所謂「く」の字甕の範疇に含まれるものであろう。台付甕になるかと思われるが判然としない。口縁部が疑似複合口縁を呈し、輪積みの粘土紐下端部を僅かに突出させたまま磨り潰さずに残す手法をとり、そこに小段を有する。この位置が胴部最大径付近まで下がっているものが多いが、本例は頸部下端の位置に存在している。破片から器形復元しているため、器形の傾きに若干の相違があるかもしれないが、残存している口頸部は「ハ」の字状に内傾を示している。

輪積痕帯下端の小段位置が頸部下端にある類例をさがすと、神奈川県では、鎌倉市手広遺跡21号住居址、横浜市高速2号線No.6遺跡7号住居址、横浜市小黒谷遺跡Ⅱ地区5号住居址に認められる。小黒谷遺跡5号住居址例は、口頸部が内傾するものであり、47との共通性がある。また、東京都練馬区栗原遺跡Y3号住、同板橋区氷川神社北方遺跡21号住居址にも類例があり、さらに、千葉県佐倉市江原台遺跡123号住居址、同県東金市道庭遺跡SI-25住居址などに見出すことができる。これらは弥生後期東京湾東岸系土器として捉えられるもので、比較的広い地域に分布が及んでいる。三殿台遺跡には、東京湾東岸系の土器も影響を与えていることが窺える。

三殿台遺跡214B住居址出土の第15図63は、甕の小破片である。口頸部に輪積痕を残すものである。近隣では、横浜市高速2号線No.6遺跡7号住居址に類似例を見出すことができる。他県では、袖ヶ浦市文脇遺跡213号住居址、同県市原市唐崎遺跡1号住居址などに類例がある。東京湾東岸系の土器の影響とみられる。

三殿台遺跡214B住居址出土の第13図48は大型壺で、中期・宮ノ台式の系統を引く器形と思われる。胴部は大きく張り、頸部は細く窄まっている。口縁部の形状は不明である。頸部に3段の簾状文で横帯区画し、その下に乱れた小振幅の波状文を2段巡らせている。簾状文帯の上にも波状文が施文されていると思われる。



第 30 図 三殿台遺跡 214B 号住居址出土大型壺の類例

類似例は、近隣にはほとんど見られないが、横浜市青葉区受地だいやま遺跡 19 号住居址に類似するものがある。波状文が巡る頸部下端を、沈線で横帯区画するものである。また、東京都世田谷区の喜多見陣屋遺跡 158 号住居址にも近似する器形のものがある。頸部は欠損しており、簾状文とその上の波状文は判然としない。簾状文・波状文を有する中型壺が埼玉県東松山市代正寺遺跡 4 号方形周溝墓、喜多見陣屋遺跡 8 号住

居址にも見られる。後者は胴部の張りが弱いものとなっている。群馬県みなかみ町三後沢遺跡7号住居址出土の樽式土器壺にも胴部の張り方に類似性を見出すことができる。樽式終末期の様相を示すものである。

(2) 器面調整痕 (第31～37図、写真1～14)

以下、朝光寺原遺跡と、後述する三殿台遺跡出土土器における櫛描文系土器の器壁内外面調整を観ていくことにする。(なお、カッコ内の数字は本誌掲載の実測図土器番号であり、拓影図は1/2縮小である。)

1)・器壁外面調整 (第31・32図)

一次器壁外面調整は、木端状工具によりハケ目(「一次ハケ目調整」)を残すものである。右下がりに斜行するものがほとんどであるが、第31図7(6)・8(4)・11(3)・13(5)のように、口唇直下位にヨコハケを施す例がある。また、7(6)では底部下端部をヨコハケとしている。ハケ目痕の深さには若干の差が見られる。一次ハケ目調整後にヘラナデを加え、さらに棒状ミガキを施すという器面調整手順(手法)で行われている。

櫛歯状工具による波状文や簾状文は、一次ハケ目調整後に施文している。波状文の隙間に残っているハケ目痕を認めることができる。波状文と簾状文施文の前後関係は、後者が先に施されている。簾状文は区画的な性格を有していることが窺える。少なくとも波状文を施文する上で基準となっていることは明確である。

棒状ミガキは、丁寧かつ密に加えており、ハケ目痕をほとんど消し去っているが、僅かに残る個所もある。深いハケ目の箇所でもその痕跡を残している。底部ではタテミガキ、胴部はやや右下がりのミガキとなるのがほとんどである。中には、第30図8(4)・13(5)のように横方向に近いものもある。10(7)は、一次ハケ目調整痕が比較的深いものであるが、底部下端のみ横方向のヘラナデを施している。筋状擦痕を伴うヨコナデである。

ハケ甕となる第32図18(25)・19(12)には、口縁部にヨコナデがあり、19には底部下端にもヨコナデが見られる。

他遺跡となるが、横浜市青葉区鹿ヶ谷遺跡10d号住居址出土の広口甕(20)では、ヘラナデで後に、口唇直下から頸部にかけて左下がりの斜行指ナデを有している。横断面が浅い皿状(弧状)を呈するものであり、指ナデが先端が丸味をもつヘラ状工具あるいは棒状工具によるものである。

第32図21(53)は、深いハケ目痕を止めるものである。胴・底部には、縦・横・斜めと複数回にわたってハケ目調整を行っている。口縁部にはやや右下がりの並行ハケ目痕が巡っている。

2)・器壁内面調整 (第33～35図)

内面についても、一次ハケ目調整は右下がりとなるものがほとんどである。第33図10(6)のように、その後に横方向のハケ目調整を加えているものもある。

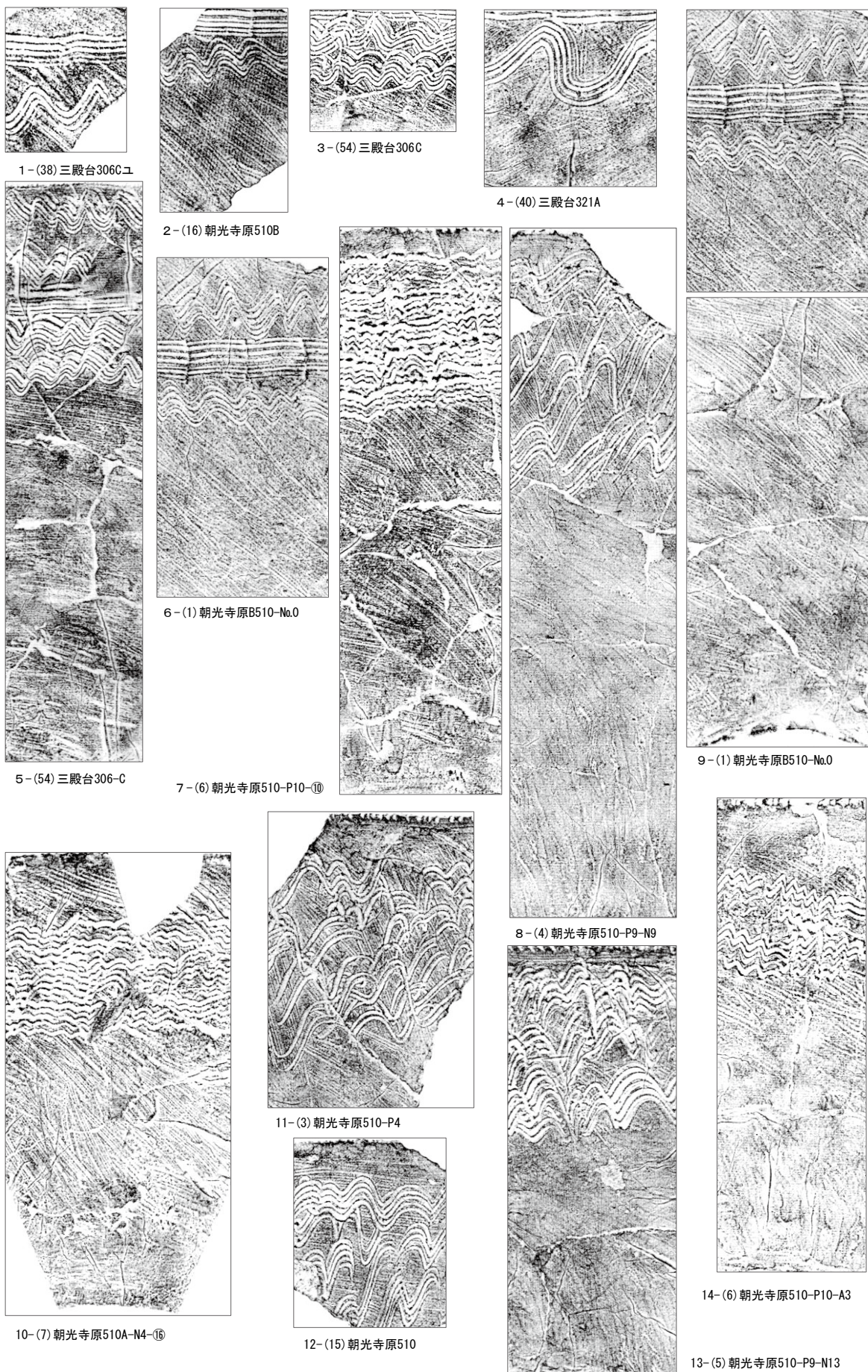
第33図11(10)は、ハケ目痕と平行する沈線状の条線を伴うものも見られる。工具端部の当て方によって生ずるものと思われる。

一次ハケ目調整後には、ほとんどがヘラナデを行っている。口唇直下においてはヘラナデもしくはユビナデが横方向に行われ、浅い沈線状を呈するものも見られる。

第33図6(4)では、棒状ミガキを加えている。口・頸部は左下がり、胴・底部は縦方向のミガキである。

第34図13(2)では、ヨコナデ後に棒状ミガキを施しているが、底部の方がより密になっている。内面にこのような棒状ミガキを有する例は、第33図2～5・8・11をあげることができる。他は、内面をヘラナデで仕上げているケースが多い。

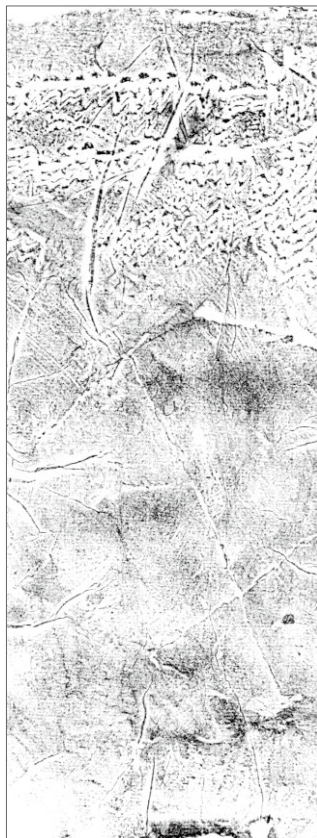
三殿台遺跡223号住出土の第35図33(49)及び第14図(53)は、ヘラナデが口縁部まで及んでいない



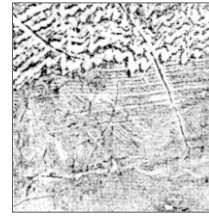
第 31 図 波状文施文前・後の器壁外面調整痕(1)



15-(2) 朝光寺原510-P11



16-(10)-1 朝光寺原C-不明遺構



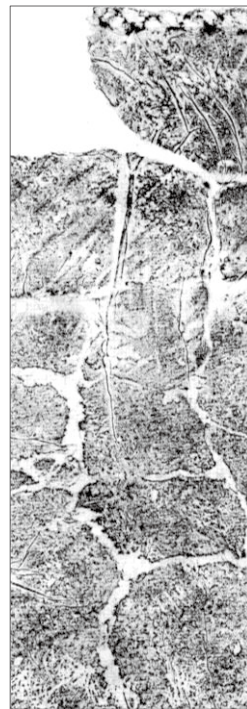
17-(10)-2 朝光寺原C-不明遺構



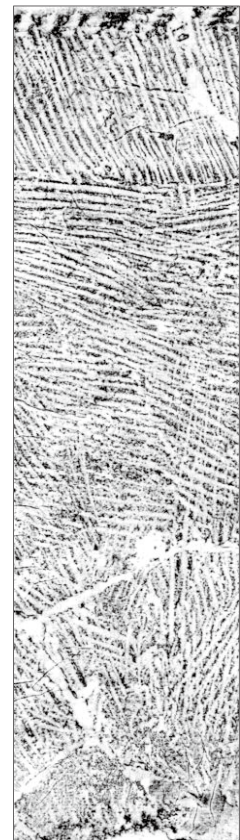
18-(25) 朝光寺原504A-フ



19-(12) 朝光寺原510-⑭



20-鹿ヶ谷10西

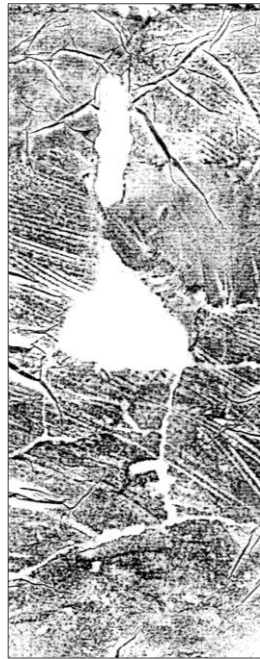


21-(53) 三殿台223

第 32 図 波状文施文前・後の器壁外面調整痕(2- 上)／無文土器の器壁外面調整(2- 下)



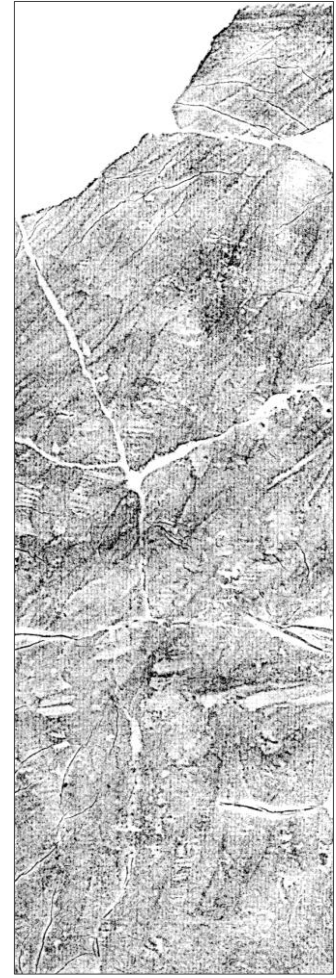
1-(25) 朝光寺原504A-フ



2-(12) 朝光寺原510-⑭



5-(8) 朝光寺原510-A1-N2



6-(4) 朝光寺原510-P4-N9



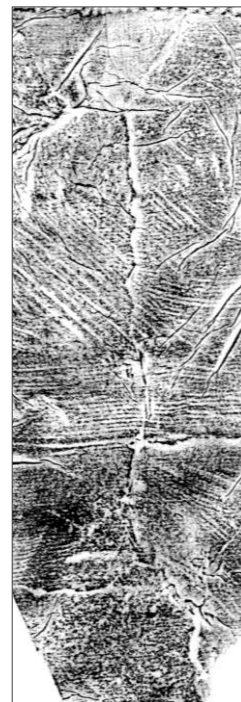
3-(5) 朝光寺原510-N11



4-(16) 朝光寺原510B



8-(9) 朝光寺原504A-フ



10-(6) 朝光寺原510-P10-⑩



11-(10) 朝光寺原510
A3-⑪



7-(3) 朝光寺原510-P4・P1-N3

第 33 図 朝光寺原遺跡出土土器器壁内面調整痕(1)

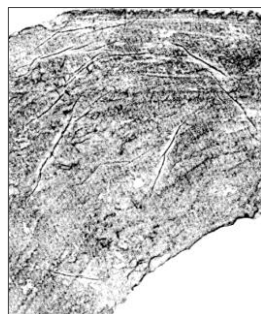
例である。

第35図21(31)は、内面を指で斜めに掻き上げたような痕跡を止めるものである。

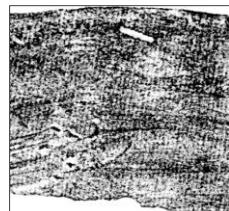
上記のように、器壁内面の調整については、一次調整のハケ目を消すようなヘラナデを行っているものが多い。その後に丁寧な棒状ミガキを加えて仕上げているものはさほど多くはない。口縁上端まで施しているものは第33図6(4)のみである。



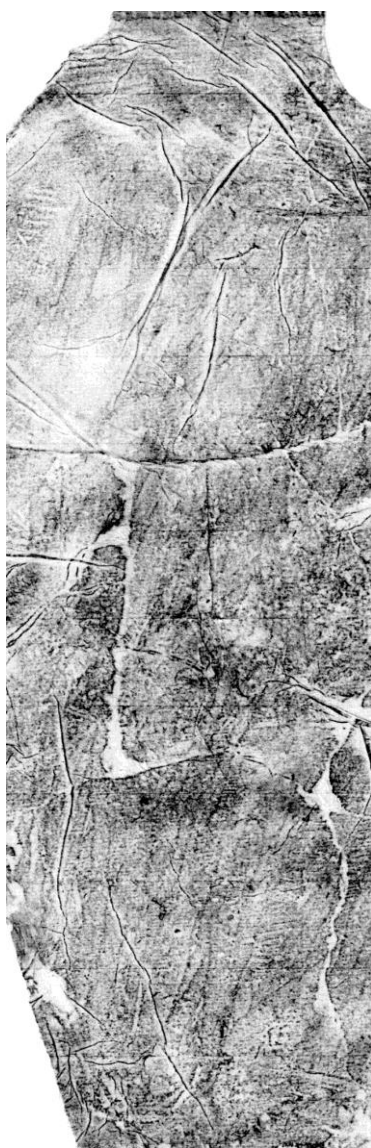
12-(1) 朝光寺原510-N0-②



16-(15) 朝光寺原510



17-(17) 朝光寺原515B



13-(2) 朝光寺原510-P11



14-(24) 朝光寺原511-C-A

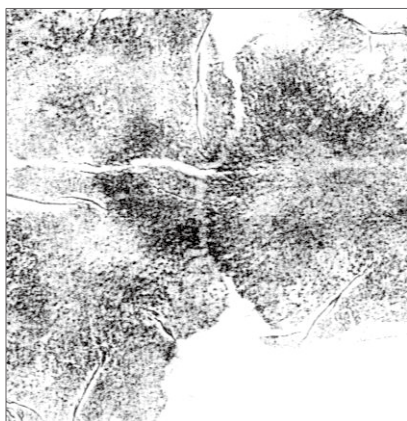


15-(23) 朝光寺原512-出口Pit



18-(27) 朝光寺原515フク-D

第34図 朝光寺原遺跡出土土器器壁内面調整痕(2)



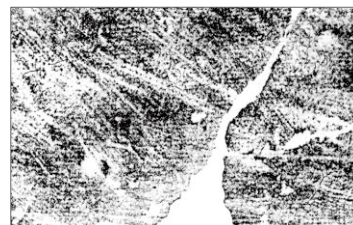
19-(28) 朝光寺原515-A3



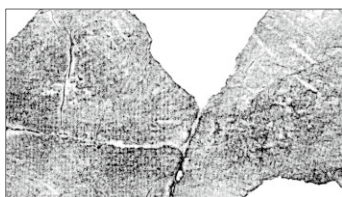
20-(28) 朝光寺原515A-口縁



21-(31) 朝光寺原515フ



22-(26) 朝光寺原B-525



23-(18) 朝光寺原B-524



24-(22) 朝光寺原チ287-No.イ



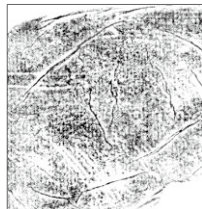
25-(21) 朝光寺原C-不明遺構



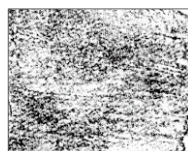
31-(21) 朝光寺原C-902口縁部内面



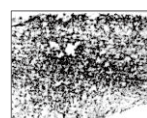
32-(37)
三殿台321P



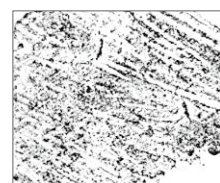
33-(35)



34-(39)
三殿台204Cユ



26-(33)
三殿台113Aユ



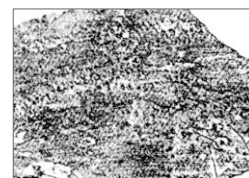
27-(43) 三殿台113A



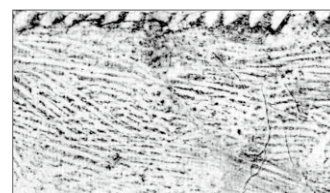
28-(36)
三殿台114B



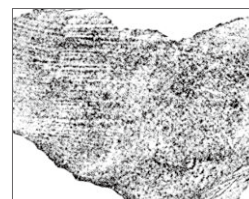
29-(41) 三殿台124フク



30-(42) 三殿台212Bユ



33-(49) 三殿台223ユ



35-(38)
三殿台306Cユ

第 35 図 朝光寺原遺跡出土土器器壁内面調整痕(3)

(3) 波状文（第36・37図、写真1～5・7・8）

波状文の分類（第36・37図）

朝光寺原遺跡と三殿台遺跡出土の櫛描波状文を観察し、波形を主として分類を行った。朝光寺原では、Ⅰ類、Ⅱa類、Ⅱb類、Ⅲ類に4分類し、三殿台では、Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅰc類に分類した。Ⅰc類は朝光寺原遺跡と三殿台遺跡に共通するものである。（使用した拓影図は1/2に縮小している。）

1)・朝光寺原 Ⅰ類（第35図上）

朝光寺原遺跡では、広口甕2・3・8類など広く採用されている波状文である。振幅が不規則に大きく上下するものである。波頂から波底まで2.8cmを有する箇所もある。波頂間のピッチは1.2～1.5cmと比較的等間隔であるが、波頂から波底までの上下幅は1.2～2.8cmとバラつきが大きい。器面を正位にして下位から上位へ順次施文しており、各段の施文は左から右へ、右上がりに移行施文する傾向がある。単位波状文の末端部は施文具を抜くように終息させている。終息点は波頂からやや下がった所にあり、「つ」の字状を呈しているのが特徴である。このような特徴のある波状文は、510号住居址出土の広口甕第35図（2）～（5）・（15）のみに見られるものであり、土器製作者の個性（癖）として把握できる。また、大きい振幅を示す波状文は、群馬県沼田地域の樽式に多用されているものであり、類似性を指摘することができる。

2)・朝光寺原 Ⅱa類（第36図中）

波状文の振幅が小さく、より直線的なものをこの類とした。波頂から波底までの上下幅は0.1～0.2cmであるが、波頂間のピッチは0.4～0.8cmを有する。26は深く施文されている。施文具を均一的な加圧で引かれており、1条の沈線幅も均一である。

波状文の振幅がⅡa類よりやや大きいものをこの類とした。振幅はⅠ類より小さく、均一的に0.5～0.8cmのピッチを刻んでいる。波状文の段や一段の中でも、箇所によって施文具加圧の度合いが異なっており、1条の沈線幅に差があるものが多い（22・42・20）。各段の波状文は、ほぼ水平方向に施文されている。

3)・朝光寺原 Ⅲ類（第37図上）

波状文が、小刻みかつ不規則な振幅を示すものをこの類とした。施文も箇所によって右上がりとなっているもの（6・7・21）と右下がりになるもの（10）がある。朝光寺原遺跡においては、波状文を口縁端部まで施さない土器に多く見られ、より新しい段階の様相として捉えられる。

4)・三殿台 Ⅰa類（第37図中左）

波状文がコンパス文的な半円形に近い形状を呈するものをこの類とした。施文工具の動かし方が他と異なり、波底部が「V」字状を呈している。均一な加圧でスムーズに描かれており施文の熟練度が感じられるものである（37・39）。この波状文は、朝光寺原遺跡には見られず、現在のところ三殿台遺跡においてのみに認めることができる。三殿台遺跡の特徴的な波状文となっている。

5)・三殿台 Ⅰb類（第37図中右）

コンパス文的な波状文がやや不正形化しているものをこの類とし、Ⅰa類と区別した。施文手法は、基本的にⅠa類と同様の箇所もあるが、波底部が尖らずに丸味をもつ箇所もある。

6)・三殿台 Ⅰc類（第37図下）

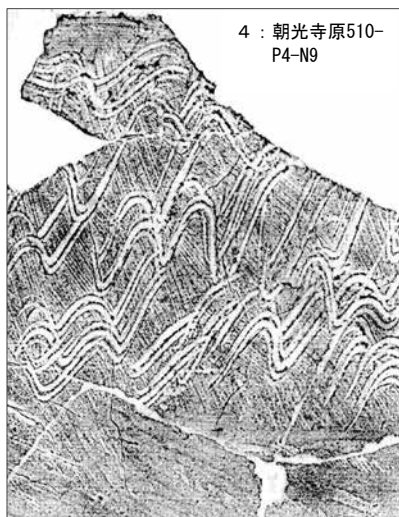
振幅が大きい類の波状文である。振幅幅は1.3～1.7cm、波頂間のピッチは1.0～1.7cmを示す。38はピッチがやや広く1.9cmを有している。Ⅰc類は、三殿台遺跡と朝光寺原遺跡において認められるものである。

7)・三殿台 Ⅰc類（第37図下）

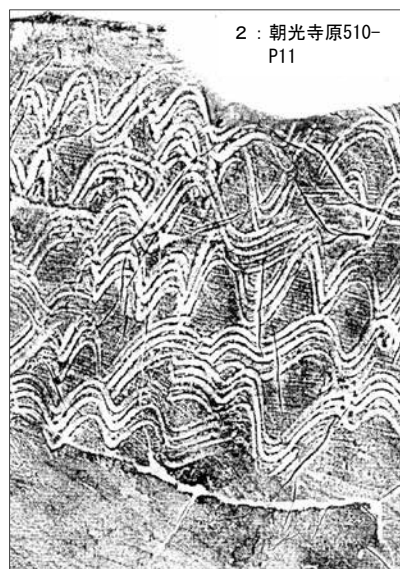
振幅が大きい類の波状文である。振幅幅は1.3～1.7cm、波頂間のピッチは1.0～1.7cmを示す。38はピッ



3 : 朝光寺原510-P4



4 : 朝光寺原510-P4-N9

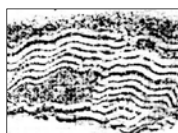


2 : 朝光寺原510-P11

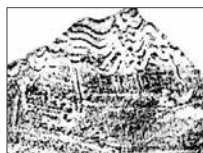


15 : 朝光寺原510フ

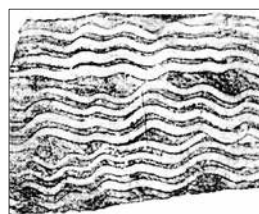
【櫛描波状文:朝光寺原 I 類】



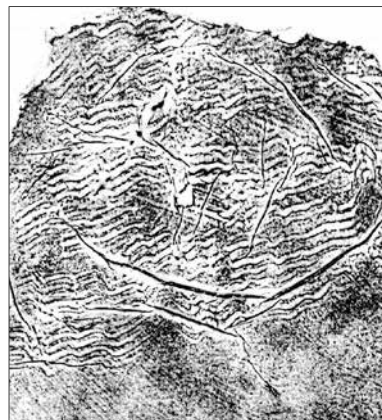
33 : 三殿台113A-ユ上



41 : 三殿台124フ

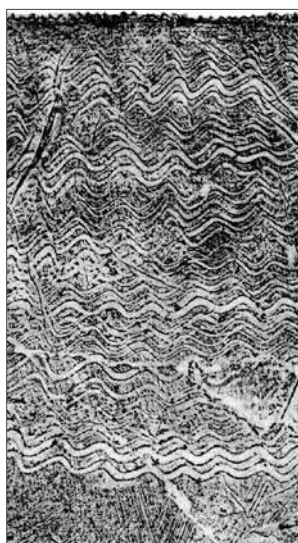


26 : 朝光寺原515B

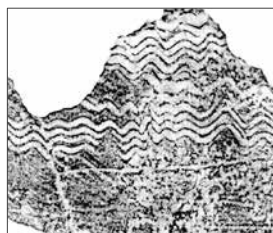


17 : 朝光寺原B-515-フ

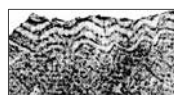
【櫛描波状文 : 朝光寺原 II a類】



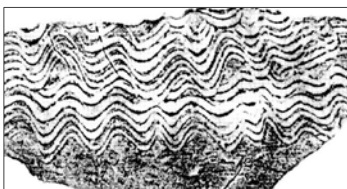
22 : 朝光寺原237No.1



18 : 朝光寺原B-524



27 : 朝光寺原515フ-D



42 : 三殿台212Bユ



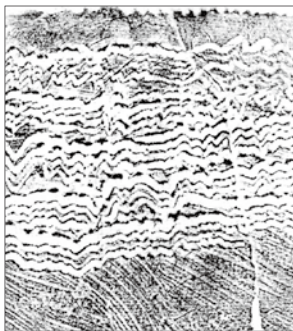
20 : 朝光寺原107C-P5

【櫛描波状文 : 朝光寺原 II b類】

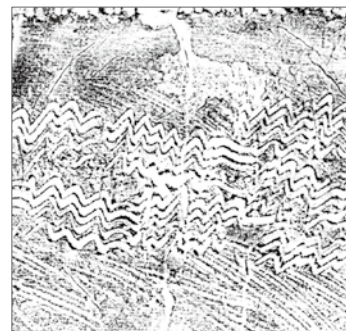
第 36 図 波状文の分類(1)



7 : 朝光寺原510A-N4-⑬



6 : 朝光寺原510-P10-⑩



10 : 朝光寺原510-P10-A3-⑪



21-1 : 朝光寺原C-不明遺構

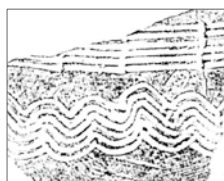


21-2 : 朝光寺原C-不明遺構

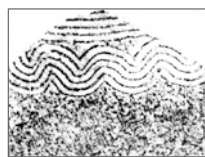


21-3 : 朝光寺原C-不明遺構

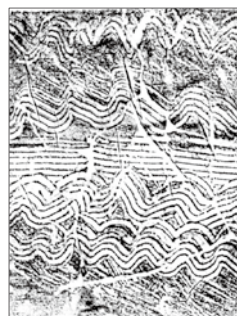
【櫛描波状文：朝光寺原 III類】



39 : 三殿台三殿台204C-ユ



37 : 三殿台三殿台321-P



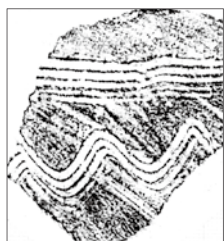
54-1 : 三殿台306C



54-2 : 三殿台306C

【櫛描波状文：三殿台 I a類】

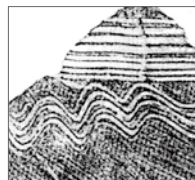
【櫛描波状文：三殿台 I b類】



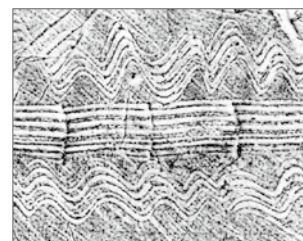
38 : 三殿台306C-ユ



36 : 三殿台114B



16 : 朝光寺原510B



1 : 朝光寺原B510-No. O

【櫛描波状文：三殿台 I c類】

第 37 図 波状文の分類(2)

チがやや広く 1.9cm を有している。I c 類は、三殿台遺跡と朝光寺原遺跡において認められるものである。

(4) 朝光寺原式土器基準資料の特徴

朝光寺原式の基準資料となった 510 号住居址出土の甕には、壺形甕と広口甕の二様があり、さらに前者は 3 類型、後者は 8 類型が認められ、器形が豊富であると共に数量も多い。中でも、壺形甕 2 類、広口甕 5・7 類は櫛描文を有さないもので、無文（紋）化が進行する傾向として捉えることができる。

櫛描波状文は、①頸部文様帯に簾状文とセットで施されているもの、②口頸部文様帯全面に施されているもの、③口縁上端まで施文せず、無文帯を残すものの三様がある。①はより古い様相、③はより新しい様相として捉えられている。

壺形甕 2 類と広口甕 7 類、広口甕 8 類の器形は、近隣に多く見られるものであり、一方、広口甕 3 類は近隣では見られず朝光寺原遺跡に多いものである。本遺跡の特有性として捉えられる。

台付甕は相伴していないが、櫛描文を有する大熊宮原遺跡例（写真 14）や、無文の三殿台遺跡 223 号例（51）があり、朝光寺原式を理解する上で無視できないであろう。

鉢は、逆「ハ」の字状に開く無文の鉢（第 10 図 S43-2-5）と、久ヶ原・弥生町式系の鉢（第 10 図 S43-2-10）が相伴している。

高坏も伴出したものは鉢と同様の久ヶ原・弥生町式系である。三殿台遺跡 139C 住居址においては、山中式系の高坏が出土している。

壺は大型壺のみが伴出しているが、やはり久ヶ原・弥生町式系のものである。三殿台遺跡 214B 住では、櫛描文を頸部に有する朝光寺原式的大型壺が存在しており、510 号住のような在り方が、本地域において全てではないことは言えるだろう。

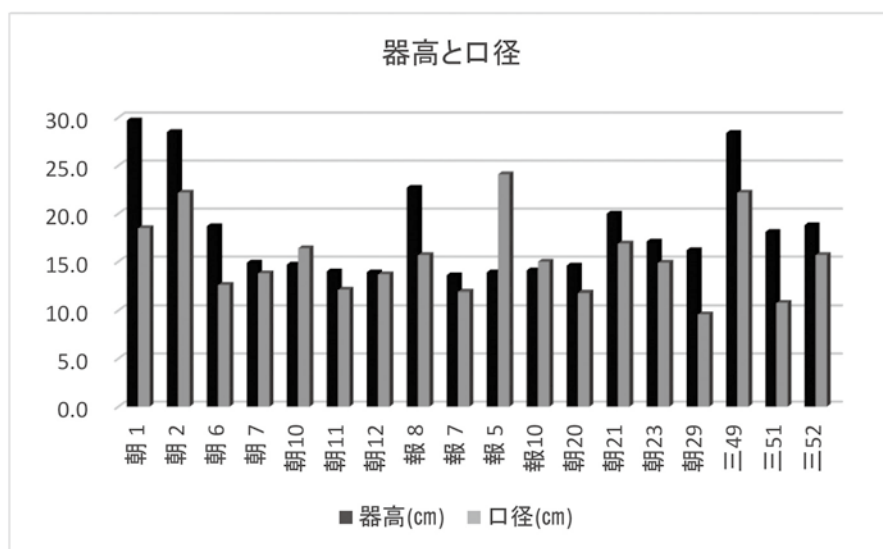
510 号住出土土器を主とした器高と口径について、完形土器で比較すると以下ようになる。

器高は、13～15cm の間に収まるものが多く 47% を占める。高いものでも 30cm 以下である。突出するのはおそらく大型壺の類になるであろう。

口径は、11～14cm の間に 35% が収まっている。20cm を超えるものは、広口甕 2 類（朝 2）と鉢（報

第 6 表 朝光寺原・三殿台遺跡出土弥生後期土器の器高と口径の対比表

No.	器高(cm)	口径(cm)
朝 1	29.7	18.5
朝 2	28.5	22.2
朝 6	18.7	12.6
朝 7	14.9	13.8
朝 10	14.7	16.4
朝 11	14.0	12.1
朝 12	13.9	13.7
報 8	22.7	15.7
報 7	13.6	11.9
報 5	13.9	24.1
報 10	14.1	15.0
朝 20	14.6	11.8
朝 21	20.0	16.9
朝 23	17.1	14.9
朝 29	16.2	9.6
三 49	28.4	22.2
三 51	18.1	10.8
三 52	18.8	15.7



5)、台付甕（三 49）のみである。

櫛描文は、木端状工具によりハケ目を残す器面調整を行いその後に施文している。波状文や簾状文を施文後に、胴部以下に縦方向ないし右下がりの棒状ミガキを、密に施しているものが注視できる（2・4・5）。底部のみに限定されるものもある。内面の器面調整は、ハケ目調整後にヘラナデを行い、さらに棒状ミガキを加えているものがある。ハケ目痕をそのまま残すものはほとんどないが、棒状ミガキに関しては、外面より概して粗雑感がある。2・4のみに口縁上端付近までミガキを施している。

ハケ目を地紋に残す櫛描文系土器は、那珂川右岸の大鋸町式土器（茨城県水戸市）に知られる特徴であり、十王台式土器の終末期に比定されている。今回類似例が見られた沼田・水土地域の樽式土器も同様のものが多く、ミガキが発達している点など、古式土師器の製作手法との共通性が認められるところであり、朝光寺原式土器の終焉時期については、樽式や十王台式などの様相と相互対比して検討する必要性もあるのではないかと考える。

櫛描波状文については、510号住において朝光寺原Ⅰ類・同Ⅱb類・同Ⅲ類、三殿台Ⅰc類が認められる。朝光寺原Ⅰ類の波状文は本住居址に特徴的であり、2～5（4個体）の広口甕に施文されている。また、同Ⅲ類は小型の広口甕に施される傾向がみられる（6・7・10）。三殿台Ⅰc類は、朝光寺原遺跡510号住で1例（1）認められたが、時期的な問題を含め、三殿台遺跡出土例と他の遺跡との比較検討が広く必要な所である。

6. 朝光寺原遺跡と三殿台遺跡の資料調査で分かったこと

（1）現時点の到達点

朝光寺原遺跡510号住を中心に、同遺跡と三殿台遺跡の朝光寺原式土器及び関連資料について調査した結果、次の諸点が明らかとなった。

- ①. 朝光寺原遺跡の朝光寺原式土器は全域に分布し、B区の集落規模は、関耕地・小黒谷Ⅰ・Ⅱ遺跡に及ばない。今後の精査で、A・C区の出土住居址はさらに増加することが予想される。
- ②. 朝光寺原式の基準資料であるB区510号住居址の土器20点の割合は、朝光寺原式3/4、久ヶ原・弥生町式が1/4で、両者の構成内容が明確になった。
- ③. 朝光寺原式の器種は平底甕を主体とし、鉢が伴う。久ヶ原・弥生町式は、壺・鉢・高坏で、両者は補完関係をなしている。三殿台遺跡では、東海系土器や東京湾東岸系土器が認められた。
- ④. 朝光寺原式の文様は、櫛描波状文が主体で、無文がこれに次ぎ、簾状文が少数ある。久ヶ原・弥生町式は、沈線区画のある羽状縄文で、赤彩が施されている。第12図28には、特徴的な縦位羽状縄文が見られた。
- ⑤. B区510号住居址以外の朝光寺原式は櫛描波状文甕が大半で無文甕が少数ある。大熊宮原タイプの櫛描文台付甕は見出せなかった。また、山中式系の長頸壺も見られた。
- ⑥. 515a号住の久ヶ原・弥生町式は、器種構成・文様・赤彩などの点で、510号住資料と類似するが、住居址の平面形状は異なっている。
- ⑦. 朝光寺原遺跡の報文等（109C住・902住）掲載資料の全てを見出せなかったが、新たな土器の存在が判明したので、今回提示した資料以外に、さらに多くの朝光寺原式土器が存在することは疑いない。
- ⑧. 三殿台遺跡の朝光寺原式は弥生後期にとどまらず、弥生～古墳時代の住居址から出土している。これは遺構重複の激しさを示し、かつ機械力を使用した慣れない調査方法を取らざるを得なかったことに

も起因していると考えられる。

- ⑨. 三殿台遺跡における朝光寺原式の完形品は2個体のみで、多くは櫛描波状文・簾状文土器片であった。第14図51は、器形・胎土・器面調整技法から、朝光寺原式の無文台付甕と考えられる。三殿台遺跡の朝光寺原式は、久ヶ原・弥生町式に伴って存在する。

(2) 山の道と海の道

朝光寺原遺跡においては、器形や器面調整手法、櫛描波状文などに遠く離れた群馬県沼田・水上地域との共通性が認められた。器形においては、甕を11類型に分類した内、6類型に類似性が認められ、無文（紋）の鉢にも数多く類似例が存在していた。近隣地域では類似例が見出せないが、同地域にみとめられた広口甕3類の存在もある。前述したように、器形の類似性を求めると、東京都世田谷区喜多見陣屋遺跡、本庄市真鏡寺後遺跡、東松山市代正寺遺跡、川越市霞ヶ関遺跡などにも点在している。また、八王子市平塚遺跡、町田市鶴川遺跡群L地点、TNT917・918遺跡などにおいても朝光寺原式系土器が知られている。これらは関東山地に近接する地域である。

飯島克己・若狭 徹は、群馬県における樽式土器の様相を5つの地域として捉えて比較しており（飯島・若狭1988）、平野進一は、弥生土器終焉期の土器を、やはり5つの地域に分けてその様相を論じている（平野1988）。両者の地域分類に若干相異はあるが、前者が「利根川上流域」、後者が「沼田周辺地域」とした地域は群馬県北部の山間地に位置するものである。この地域と朝光寺原遺跡の集落との間には、群馬県内だけでも4つの小地域が存在していることになるが、この4地域の土器と朝光寺原遺跡出土土器との類似性がほとんど認められていない点に注目しなければならない（註1）。

地理的空間を飛び越えて土器の近似性が認められたことに関して、及川良彦の興味深い想定がある。多摩地域の弥生時代後期の遺跡動向を論ずる中で、中部高地系土器や吉ヶ谷式土器分布範囲の拡散に関し、「各地で局所的ではなくより広域の玉つき、あるいは集団を飛び越えるような移動が認められるようだ。」と往時の社会状況を考察している（及川2021）。沼田・水上地域と朝光寺原遺跡がどのように繋がりを持ったのかを考える上で傾聴すべき考察である。そこで想起されるのが山の道である。

周知のように、関東平野北西部から西部にかけての縁辺部や山間部の河岸段丘・丘陵・台地などには、縄文時代後期から晩期に、集積墓・配石墓・立石など石を多用した特有の文化圏が展開している。この文化圏に朝光寺原式土器分布圏をのせると、多摩丘陵や下末吉台地などにおいて重なる部分が多く存在する。これらの地域は、山地と接する地域であることに注目したい。また栗島義明は、旧石器時代から縄文時代の黒曜石の流通と、塩化物泉の湧出する「塩場」での塩分確保のための移動を関連付けて広域移動を論じている（栗島2021）。この「塩場」を求めるルートには山が介在しており、山を通る道も含まれている。山の道には、尾根道や谷道、峠越えの道などがあり、無数の通路網を成していたと想定できる。山の道は険しくもあるが、平野の原始林（森林）を抜けるよりもかえって安全かつ容易ではなかったかと思われる。この道は、弥生時代になっても消えることはなく使われ続けたと考えられる（註2）。

狩猟の場である山地は「協同自助」的性格をもつ私有権が及びづらい土地である（柄谷2014）。かつて山には、「山人」^{やまびと}（柳田1963）が使ったかも知れない道「山の道」があった。「けものみち」だったかも知れない。それは縄文時代から存続していたものであろう。このような道は険しさがあるものの、平野部の原生林や他集団地域を通過するよりも障害が少なかったのではないかと推察できる。朝光寺原遺跡は関東山地から連なる多摩丘陵東部にあり、朝光寺原遺跡が営まれた時期においても「山の道」が使われた可能性があり、

人・物・情報が行き来したことは想像に難くない。当然、土器の類似性の背景には、婚姻（「婿入り婚」・「嫁入り婚」）による人の移動や集団的な移動があり、土器製作技法の伝習・継承が行われたことを想定しておきたい。また、沼田・水上地域において、遠く危険な旅をしなければならない何らかの事情が発生していたことも、併せて考えなければならないだろう。

また、渡辺 務は、朝光寺原式土器出土遺跡を分布図化し、A～Eの5地域の存在を示すと共に、分布しない空白地域の存在を指摘した（渡辺 1995）。田村良照はこの地域分類に準拠し、鶴見川中流域（A 地区）、多摩川右岸（B 地区）、鶴見川上流（C 地区）、横浜市南部－帷子川・大岡川流域－（D 地区）、多摩川左岸（E 地区）と分類し、57 遺跡・469 住居址ほかの遺構を出土土器や住居址形態などから、氏の5段階編年に充当した「朝光寺原式の遺跡・遺構一覧表」を作成した（田村 2013）。その成果を踏まえ、多摩川中流域と鶴見川中流域との間には「明白な様相の違いが認められ」、これは両者の「集団（部族）は出現背景が異なる」ことに起因するものであり、その勢力拡大については、「一元論的な図式（渡辺 1999）は成立し難く」、「多元論的な考え方」をする必要があるとしている（田村 2013）。前掲田村 2013 の一覧表を改編して第7表に示したように、鶴見川中流域（A）では、Ⅲ式期が57%で、Ⅱ・Ⅲ式期では89%を占める。これに対し多摩川右岸（B）では、Ⅲ式期は22%、Ⅳ式期が増え44%、Ⅲ・Ⅳ式期で84%を占めるようになる。土器の様相だけでなく隆盛時期に地域的な差も認められる。

これらの地域へ他地域から人が移動することに関しては、両地域の社会的状況によって、一つの方角からだけではなく複数の方向からあり、しかも時間的な差を有して、様々な社会状況により波動的・変動的に動くものと思われる。朝光寺原遺跡が含まれるA地区においても、朝光寺原遺跡と3kmも隔たっていない釈迦堂遺跡や関耕地遺跡とでは、土器の様相に相異があることも、このような背景が存在するのかもしれない。

第7表 朝光寺原式の地域別・時期別の遺構数とその比率

